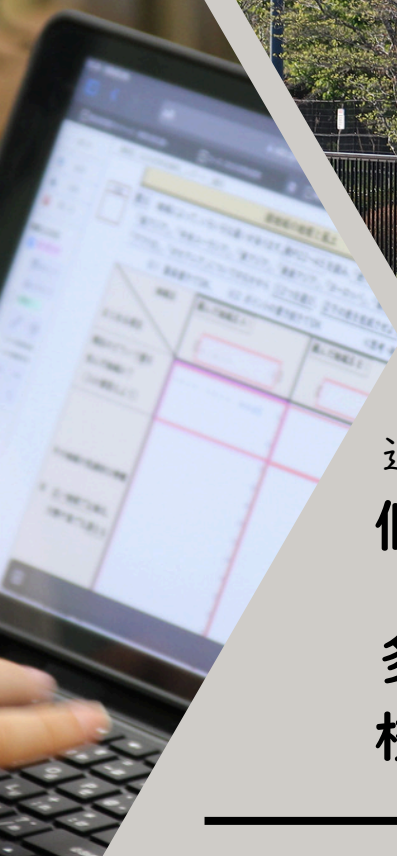


文部科学省調査研究事業

「多様性に応じた新時代の学び充実支援事業」



通信制における

個別最適な学び・協働的な学びの実現と発信

及び

**多様な背景を有する生徒に対する
校内支援・指導体制の改善**

令和7年度
研究報告書

神奈川県立
横浜修悠館高等学校

目次

- I はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.1
- II 横浜修悠館高等学校について・・・・・・・・P.2～7
(重層的支援体制や学びのしくみなど)
- III 調査研究事業計画・・・・・・・・・・P.8～11
- IV 令和7年度調査研究事業の内容および成果と課題
 - 研究全体の概要・・・P.12
 - 1班【通信制における個別最適な学び・協働的な学びの実現に向けた
レポート・スクーリングの改善・工夫】・・・P.13
 - 個別最適な学び(「個別チーム」の研究成果報告)・・・P.14～17
 - 協働的な学び(「協働チーム」の研究成果報告)・・・P.18～21
 - 授業実践例・・・・・・・・・・・・・・・・P.22～41
 - 国語科(現代の国語)・・・・・・・・P.22～
 - 地歴公民科(公共)・・・・・・・・P.24～
 - 数学科(数学Ⅰ)・・・・・・・・P.26～
 - 理科(生物基礎)・・・・・・・・P.28～
 - 保健体育科(保健)・・・・・・・・P.30～
 - 保健体育科(体育)・・・・・・・・P.32～
 - 芸術科(美術Ⅲ)・・・・・・・・P.34～
 - 外国語科(英語コミュニケーションⅠ)・・・P.36～
 - 外国語科(英語コミュニケーションⅢ)・・・P.36～
 - 家庭科(生活と福祉)・・・・・・・・P.40～
 - 2班【多様な背景を有する生徒への校内支援・指導体制の改善・普及】・・・P.42
 - トライ教室・・・・・・・・P.43～
 - 悠ルーム・・・・・・・・P.49～
 - Hanataba Cafe・・・P.50～
 - 架け橋教室・・・・・・・・P.59～
 - キャリア・ポート・・・P.62～
 - キャリア活動・・・・・・・・P.75～
 - 「学校生活アンケート」について・・・P.77～

I はじめに

近年、高校進学を選択肢として通信制高校を選ぶ生徒が増えています。その背景の一つとして、学習環境や時間、方法等を自ら選択し、自分のペースで学習を進めることができる点が挙げられています。スタートラインや目指すゴールも異なる多様な生徒に対する教育の場として、通信制高校はその役割と重要性を年々高めています。

一方、中央教育審議会「高等学校教育の在り方ワーキンググループ報告」では、教育の質の確保と向上に向けて「多様性への対応」と「共通性への確保」を併せて進める必要があるとされています。通信制課程においては、生徒がその後の進路にかかわらず、自立した学習者として社会で生きていくために必要となる資質・能力を身に付けられるよう、必要な支援体制を整えていくとともに、生徒が人間関係を築きながら社会性を育み、自分のよさや可能性を認識し、多様な人々と協働する機会を充実させていくことが重要である。(略)とされています。

本校には、不登校を経験した生徒や対人関係、学習への不安や困難を抱える生徒、自己肯定感が低く自信を持ってない生徒などが多く在籍しています。このような状況の中で、生徒が将来に向けて社会的自立に必要な資質・能力を身に付けるためには、学び直し支援から社会とつながるキャリア支援に至るまで、教育活動全体を通じて個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図ることが重要であると考えます。

こうした課題を解決するための方策として、本研究では①個別最適・協働的な学びの実現に向けた添削課題(レポート)・面接指導(スクーリング)の改善・工夫②多様な背景を有する生徒への校内指導・普及の2つのテーマを設定しました。1年目の研究(令和6年度)では、校内においての先行的な実践モデルを構築し、一定の成果を得ることができた一方で、通信制の原点である生徒が自宅等で自学自習することへの促進については、課題が残されました。2年目となる本年度は、(今年度からスタートした)オンラインレポートを基盤とした探究的な学びを取り入れたレポートとスクーリング改善を核とした個別最適な学びと協働的な学びを追求するために「自律的な学びの循環モデルの構築」「協働的な学びにおける実践の体系化」について定性的、定量的な分析を行いました。更に、研究チームを中心とした継続的な検討や専門家をお招きした研修会などを通して、多角的な検討を重ね、通信制における学習モデルの構築を目指しました。

本校では、「平日講座」「日曜講座」を科目ごとに選べる新しいタイプの公立通信制単独校(単位制による通信制の課程・普通科)として平成20年4月に開校し18年が経ち、開校以来、文部科学省の研究事業に取り組んできたところです。

【過去の取組】

平成21-22年：「高等学校における発達障がいのある生徒の支援」

平成24-26年：「高等学校における特別な教育的ニーズを有する生徒の自立及び円滑な社会参加を可能とする教育課程の編成及び指導方法、評価方法の検討」

平成27-29年：「定時制・通信制課程における支援相談体制の構築

—外部機関とのネットワークづくりや重層的支援の充実を通して—

平成30-令和2年：「通信制課程における多様な学習ニーズを支える持続可能な体制の構築」

令和3-5年：「多様性に応じた新時代の学び充実支援事業」

—通信制におけるICTを活用した「主体的・対話的で深い学び」の実践と発信

及び横浜修悠館高校の協働的な「学びのコミュニティ」の改善普及—

本研究が全国の高等学校通信教育に携わる多くの先生方と共有できますことを期待しますとともに、本研究に御指導、御尽力いただきました中央大学文学部特任助教 澁川 幸加様、北里大学海洋生命科学部教授 西原 秀夫様に心から感謝申し上げます。

令和8年3月

神奈川県立横浜修悠館高等学校
校長 米山 教子

Ⅱ 横浜修悠館高等学校について（重層的支援体制や学びのしくみなど）

Ⅰ 通信制の学びのしくみ

添削課題（レポート）の提出・合格 + 面接指導（スクーリング）に出席 + 試験に合格 = 単位修得

・添削課題の数や面接指導の回数は、教科・科目ごとに標準数が定められている。（以下は本校の例）

現代の国語（2単位）：レポート6通、出席2回

体育Ⅰ（2単位）：レポート2通、出席10回

芸術（美術・音楽・書道・工芸）（2単位）：レポート6通、出席8回

英語コミュニケーションⅡ（4単位）：レポート12通、出席16回

・生徒は1年間を通し、添削課題に取り組みつつ、面接指導に出席し、試験の合格を目指す。

2 横浜修悠館高校について



・平成20年創立

・単位制による通信制の課程普通科

・在籍生徒数2,414名（令和8年1月1日現在）

・活動生徒数2,005名（令和8年1月1日現在）

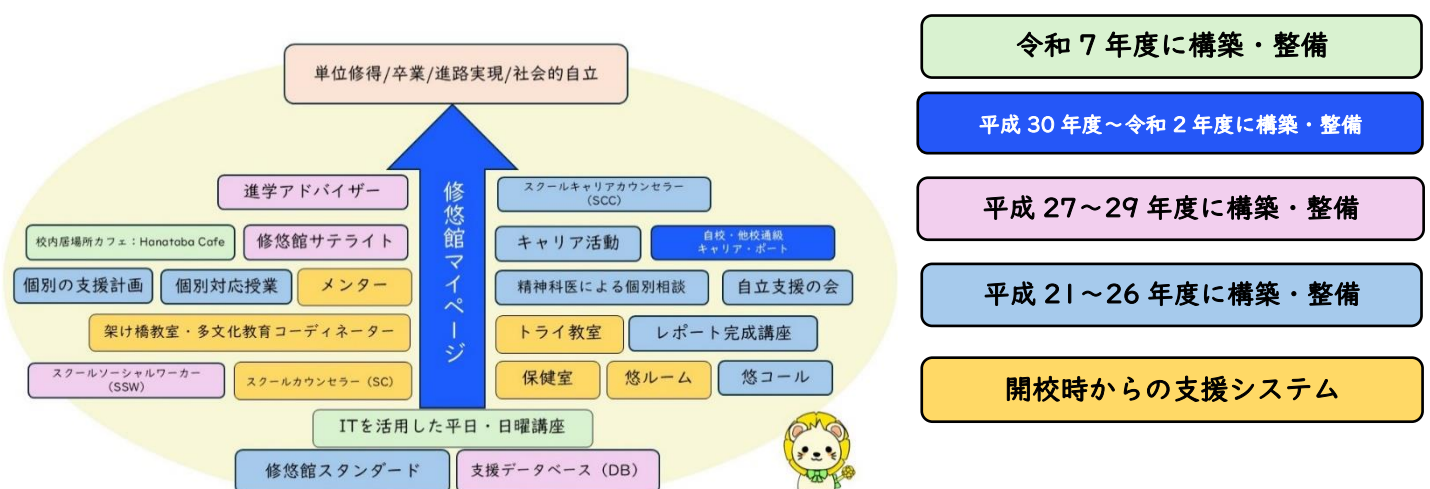
※活動生徒（活動生）：在籍生徒のうち、活動のための登録をした生徒

※実活動生：活動生のうち、実際にスクーリング出席、レポート作成・提出に取り組む生徒

【生徒の特性や課題感】

- ・対人関係に課題を抱える生徒が多く、スクーリングでの協働的な学び（意見共有など）への苦手意識が強い。障がい者手帳を取得している生徒や外国につながるのある生徒も多数在籍しており、配慮や支援が必要。
- ・一方で、進学を目指す生徒や学習を深めたいと望む生徒も在籍。
- ・多数の生徒が在籍しているため、個々の課題や学習ニーズの把握が困難。
- ・スクーリングでは、一斉指導を行うことが多く、生徒のニーズとのミスマッチが起こりやすい。

3 横浜修悠館の重層的な支援体制



本校では、開校当初から様々な支援体制を構築してきた。その支援策は階層構造をなし、生徒は必要な支援を活用し、自ら行動できるようになることを目指している。本図は重層的な支援体制のイメージ図で、令和7年度の「ITを活用した平日・日曜講座」の実装に伴い、改めて整理したものである。

開校時からの支援システム

○メンター

- ・担任以外に相談しやすい教職員を登録する制度。(メンターは教育相談・学習支援 G が調整して決定)
- ・生徒は担任に話しづらいことなどを、メンターに相談することができる。
- ・相談できる窓口が複数あることで、安心して学校生活を送ることができるようになることを目的としている。

○トライ教室 (P.45～50)



- ・学習支援が必要な生徒をマンツーマンで指導。
- ・週3日(月水木)スクーリング後に実施。
- ・学習支援ボランティア(※YSK サポーター)が中心となって生徒を支援。
- ・不登校等で学習面に課題のある生徒に、これまでの「学び直し」やレポートを完成させるための支援をしている。

○悠ルーム (P.51)



- ・生徒が「落ち着いて過ごせる場所」として常設。
カムダウン・クールダウンスペースとしての役割も担う。
- ・教職員または学習支援ボランティア(※YSK サポーター)が常駐
- ・より安心できる環境を整え、利用生徒を増やすために改修(令和6年～)
- ・ロボット(コミュニケーションロボット)の導入(令和6年～)

○架け橋教室 (P.61～63)



- ・外国につながるのある生徒を支援する教室。
- ・多文化教育コーディネーターが中心に生徒を支援。
- ・言語の違いによる学習課題に対する支援。
- ・外国につながるのある生徒を取り巻く環境に対する多面的な支援。
- ・「コミュニティ」としての役割。

○保健室

- ・養護教諭2名
- ・生徒にとって、よろず相談の場、心を落ち着かせる場、学校に来たらまず立ち寄る場となっている。
- ・時間割が生徒によって違うため、常に利用生徒がいる。
- ・令和7年度利用者数(1月末まで)は延べ3358名
例)5月総利用者数延べ744名(内科:33名 外科:24名 ころろ:384名 その他:303名)

○スクールカウンセラー(SC)

開校時より、拠点校としての配置を受け、月に4日程度来校。

※YSK サポーター: 学習支援ボランティアとして、生徒の学習サポートをお願いしている。
本校では YSK(横浜修悠館の略) サポーターと呼んでいる。

○悠コール

生徒、保護者の悩みに対する専用電話。教職員が電話相談に対応する。

○精神科医による個別相談

精神科校医が個別の相談に対応する。

○個別対応授業

- ・様々な理由で学習を進めることが困難な生徒について、本人、保護者、学校、相談機関等が連携。
- ・本人と保護者の承諾のもと、「個別の支援計画」を立てて指導を行う。

○レポート完成講座

- ・補習講座（スクーリングの出席にはならない）
- ・週 2 日（月木）スクーリング後に実施。
- ・レポートでつまずいた時、スクーリングに出席できなかった時に教員からの指導を個々に受けることができる。

○スクールキャリアカウンセラー（SCC）

- ・進路指導室に産業カウンセラー有資格者が複数名常駐。
- ・体系的な就職支援を行なう。

○自立支援の会

特別な支援を要する生徒の自立と社会参加を視野に、各種支援制度や相談機関、福祉サービス活用方法等について保護者に情報提供を行う。

○キャリア活動（学校設定教科「キャリア」における学校設定科目）（P.77、78）



・キャリア活動ⅠC：就労に向けた支援、指導を行う講座
【写真：職場見学の様子】

- ・キャリア活動ⅡC：就職活動に向けた準備講座
- ・キャリア活動Ⅲ：外国につながる生徒の総合支援としての講座

○修悠館スタンダード

- ・「発達障がいのある生徒にとって無いと困る支援は、全ての生徒にとってあると便利な支援となる」がコンセプト。
- ・スクーリング、レポートのユニバーサルデザイン化（文字のフォントやサイズ、色使いなど）
→全教職員に周知し、組織的に統一。
- ・学習環境、生徒が過ごす環境の整備（教室環境の整備、掲示物の整備、スロープの整備など）

平成 27～29 年度に構築・整備した支援システム

○修悠館サテライト

- ・連携する「湘南・横浜若者サポートステーション」のサテライト教室。
- ・週に3日開室。若者支援専門の相談員が常駐。
- ・働くことやコミュニケーション等に課題を抱える生徒が利用。卒業後も利用できる。

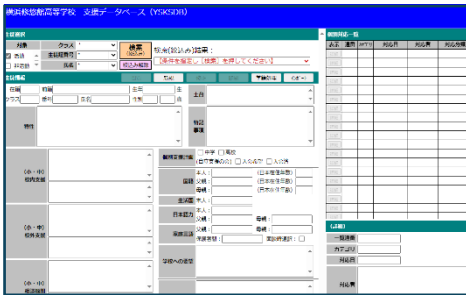
○進学アドバイザー

- ・進路指導室で教諭経験のある相談員が、進学に関する助言をする。

○スクールソーシャルワーカー（SSW）

- ・週に2日程度来校。
- ・困難を抱える生徒に対して、「環境への働きかけ」や「関係機関とのネットワークの構築」などを行い、問題行動の未然防止や早期解決を目指す。

○支援データベース（DB）



- ・入学時から生徒の支援に必要な情報を蓄積、共有するシステム。
- ・担任、教科担当、SC、SSWなどが生徒対応した際に、共有すべき内容をデータベースに記録。

平成 30 年度～令和 2 年度に構築・整備

○通級 キャリア・ポート（P.64～76）



- ・通級による指導。
- ・学習、生活上の困難を改善、克服するための「自立活動」に相当する。
- ・キャリア・ポートは本校の呼び方で、就労など生徒の進路に向けたポート（港）のような役割を目指したいという思いが込められている。
- ・本校では、生徒個々の実態に応じ、教室で行う学習活動と校内外での様々な体験活動を行っている。

【写真：体験活動 ジャガイモの収穫の様子】

令和 7 年度に構築・整備

○校内居場所カフェ：Hanataba cafe（P.52～60）



- ・生徒の「校内に安心できる空間がほしい」という声から、生徒自身が空間のデザイン、改修（壁のペンキ塗りなど）、家具の製作・購入をして完成した。
- ・火曜日は校内居場所カフェとして運営（ソーシャルワーカー事務所ランプと連携）
- ・その他の曜日は自由に使える空間として開放
- ・ロゴも生徒がデザインした。

4 横浜修悠館高校の学びのしくみ

○学習のしくみ

これまで

- ・ 平日講座（紙レポート）
- ・ 日曜講座（紙レポート）
- ・ IT 講座（オンラインレポート）

R7年度
～

- ・ 平日講座（オンラインレポート）
- ・ 日曜講座（オンラインレポート）

令和7年度からITを活用した平日・日曜講座とし、すべてのレポートをオンラインで提出する仕組みを整備した。
 （従来のIT講座の仕組みを生かしつつ、新たにシステムを構築）
 生徒は、修悠館マイページからレポートや視聴報告を提出する。

○修悠館マイページ



- ・ 本校独自の学習支援ポータルサイト（e-ラーニングシステム）
- ・ このシステム内でレポート、視聴代替の課題提出をする。
- ・ 「時間割」「出席・レポート提出状況」や「レポートの解説動画、資料」を見ることができる。
- ・ 教員への個別相談ができる。
- ・ NHK 高校講座や classi (株) の学習動画につながる機能も備える。

○オンラインレポートについて

【概要】



作問

- PDFでレポートの下地を作成。
- その上に **WBT Builder** で解答欄を設定。
 （レポート作問・解答・添削システム）

公開・解答

- マイページにリンクを貼って公開
- リンクからレポート解答・送信。

添削

- WBT Builder で○×やコメント挿入などを行う。

- ・ 教員はWBTで作問し、修悠館マイページに公開する。
- ・ 生徒は修悠館マイページ上でレポートに取組み、提出。
- ・ 提出されたレポートはWBTに保存され、教員が添削、返却する。
- ・ 生徒は修悠館マイページで添削されたレポート確認することができる。

【オンラインレポートの作問】



WBT Builder (Web Based Training system)

- ☑ PDFで作成したレポートの上に解答欄や評価欄を添付
→紙レポートの良さを残しつつスムーズにオンラインへ移行する意図。
- ☑ 模範解答の埋め込みにより、添削時の自動採点が可能
- ☑ 作成したレポートのリンクを横浜修悠館マイページに添付することで公開

職員用マニュアルで作業を補助→



【オンラインレポートの解答】



多様な解答方法

- ☑ キーボードによるテキスト入力
→文字数指定や手書き入力も選択可能
- ☑ スタイルスペンによる手書き入力
→画像の上に絵や文字を入力することも可能
- ☑ 画像などのファイル添付
→文書から画像や映像までさまざまな拡張子に対応

【オンラインレポートの添削】



丁寧に効率的な添削を支える機能

- ☑ 一問一答形式の自動採点
→作問時に模範解答を埋め込むことで自動判定
- ☑ ワンクリックで○△×の正誤判定
→オープンクエスチョンの問題には手動で対応
- ☑ 手書き or テキスト入力による添削文挿入
→定型文を登録することで効率化も可能

【オンラインレポート導入までの流れ】

令和5年度：オンラインレポート導入の決定、職員への周知

各種アプリ等の検証後、WBT Builderでの導入決定

令和6年度：オンラインレポートと1人1台端末の導入について生徒、保護者へ周知

試作版 WBT Builder の機能検証・改善と校内環境の整備

オンラインレポートの作成

令和7年度：オンラインレポート運用

※端末購入を基本としつつ、校内での貸与ができる環境を整備

タッチパネルとスタイルスペンに対応した Chromebook を推奨している。

Ⅲ 調査研究事業計画

1 調査研究課題名

「多様性に応じた新時代の学び充実支援事業」

～通信制における個別最適な学び・協働的な学びの実現と発信 及び
多様な背景を有する生徒に対する校内支援・指導体制の改善～

2 調査研究の目的

多様な背景を有する生徒の学習ニーズに応じるため、次の2点を研究の目的とする。

◎個別最適・協働的な学びの実現に向けた添削課題（レポート）・面接指導（スクーリング）の改善・工夫

多様な入学動機や進路希望、学習経験など様々な背景を有する生徒が在籍する現状に対し、通信制の特性を生かしたオンラインでの添削指導やスクーリングのあり方を研究し、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させていくことを目指す。また、通信制における協働的な学びの実現に向けて、ICTのさらなる活用の仕方や面接指導と添削課題との効果的な連携の仕方を模索する。

◎多様な背景を有する生徒への校内支援・指導体制の改善・普及

在籍する生徒が多様な背景を有していることを踏まえ、生徒同士が協働しながら人間関係づくりあげるために必要な支援や指導のあり方を検討するとともに、校内体制を改善し、生徒自身が適切な支援や学習形態を選べるシステムの構築・整理を目指す。

3 調査研究の内容・方法・実施体制

(1) 調査研究の内容・方法

◎生徒の実態に応じた指導・支援に向けた調査・分析

生徒の学習面、対人課題を調査する学校生活アンケート（定点観測的アンケート）の作成・実施

→生徒の実態、学習ニーズを捉えたうえで、レポート・スクーリングの改善や校内支援・指導システムの構築に繋げる。また、生徒個々の変化を追うとともに、全体の変化も追い、研究の評価の一端とする。

◎個別最適・協働的な学びの実現に向けた添削課題（レポート）・面接指導（スクーリング）の改善・工夫 に向けて

①探究的な学びを取り入れたレポートの作成とオンライン化

- ・オンラインの特徴を利用したレポートを各教科で工夫する。
- ・自ら問いを立てるなど、生徒が主体的に学びを深められる課題を設定する。
- ・個々の学習状況に合わせ、生徒自身が学習内容や学習方法を選択できる形式を模索する。

②スクーリング展開の工夫やICTの活用

- ・個々の学習状況（理解度、意欲など）によって学習のしかたを選択できる形式を模索する。
- ・協働的な学びの実現に向けたICTの活用方法を検討する。
- ・スクーリングのオンライン配信と効果的な指導方法を検討する。（R7年度以降）

→生徒の取り組み（スクーリングの様子や添削課題の記述）やアンケート結果、単位修得率等の変化から効果を検証

◎多様な背景を有する生徒への校内支援・指導体制の改善・普及 に向けて

○横浜修悠館高校の支援システムの検証・改善

- ・重層的な支援システムの継続的な運用 + アンケート結果を踏まえた改善策の検証、実施する。
- ・支援が必要な生徒を支援システムにつなげる仕組みを工夫する。

→支援システムを利用する生徒の取り組みやアンケート結果、出席率等の変化から効果を検証

(2) 研究の実施体制

○校内研究チーム

すべての教科から1～3名のメンバーで構成。

データ分析班、スクーリング・レポート改善班（1班）、支援体制の改善班（2班）に分かれる。

令和7年度から、1班は個別最適な学びを深める「個別チーム」と協働的な学びを深める「協働チーム」を編成し、各領域で課題を深掘するとともに、これらを一体的に充実させることを目指した。



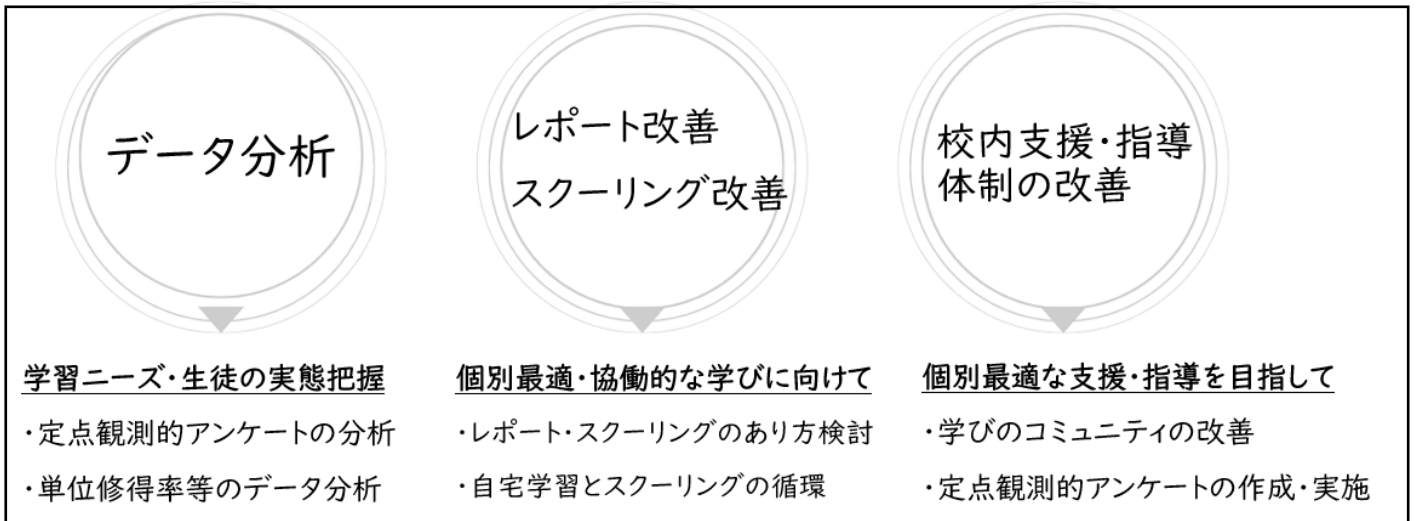
・週に1回程度の定例ミーティング

（R7：火曜 15：30～16：00）を実施。

・校内の企画会議や各分掌と連携しながら組織横断的な研究を目指す。

【写真：定例ミーティングの様子】

全体ミーティング、班ごとのミーティングなど、目的に応じて実施
研究メンバーである管理職（教頭）も参加する。



1班、2班それぞれにデータ分析班のメンバーが入り、「生活アンケート（定点観測的アンケート）」や「自習を促すアンケート」の分析を担った。

○検討会議委員

中央大学 文学部特任助教 澁川 幸加 氏

北里大学 海洋生命科学部教授 西原 秀夫 氏

★年に4回の検討会議において、研究への指導・助言を行う。

○研究を支える人材資源

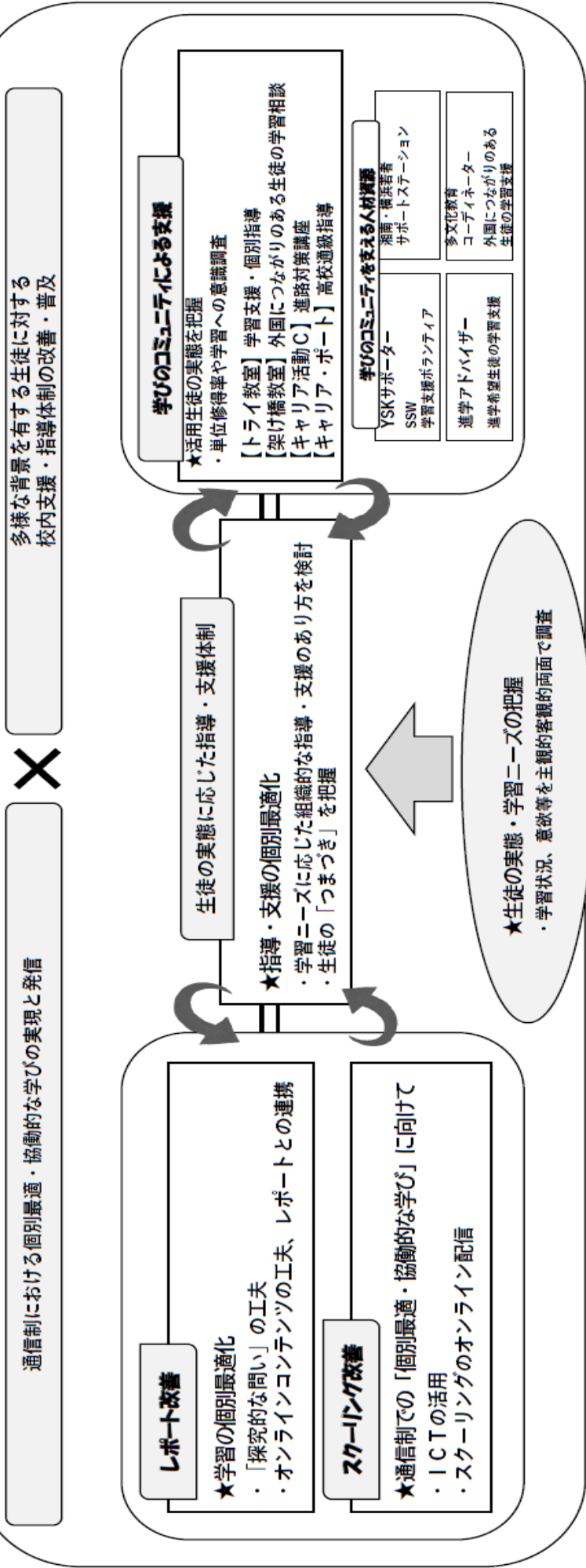
- ・YSK サポーター：学習支援ボランティアによるトライ教室・悠ルームなどでの学習支援
- ・湘南若者サポートステーション：修悠館サテライトで生徒の相談対応など
- ・進学アドバイザー：進路指導室（キャリアガイダンスルーム）で進学指導
- ・多文化教育コーディネーター：架け橋教室で外国につながるのある生徒を支援

研究概要図

社会的自立

スクリーニング出席・レポート提出・卒業・進路実現

学びの継続性・主体性



多様な背景を有する横浜修悠館高校の生徒
不登校経験、身体・知的・精神・発達等の障害、ひきこもり、長期入院、外国につながる、上級校への進学希望

学習環境の整備・ICT活用環境の整備
(オンラインでのレポート指導・スクリーニング配信)

横浜修悠館高校が積み重ねてきた支援体制

4 研究の効果測定等の方法

◎個別最適・協働的な学びの実現に向けた添削課題（レポート）・面接指導（スクーリング）の改善・工夫

≪定性的指標≫

- 「探究的な学びを取り入れたオンラインレポートによる学習で、生徒の学習意欲や他者と協働して学びを深めようとする姿勢はどのように変容したか。」
- ・探究的な学びに対する生徒の解答やスクーリング中の解答を分析する。
 - ・生徒のスクーリング中の取組の様子を観察する。

≪定量的指標≫

- 「探究的な学びを取り入れたオンラインレポートによる学習や各教科でのスクーリング実践の工夫により、令和6年度と比べどのような効果があったか。」
- ・レポートの提出総数の推移
 - ・スクーリング出席回数の推移
 - ・単位修得率の推移
 - ・学校生活アンケートの分析

◎多様な背景を有する生徒への校内支援・指導体制の改善・普及

≪定性的指標≫

- 「生徒の学習意欲や他者と協働して学びを深めようとする姿勢はどのように変容したか。」
- ・学びのコミュニティを活用する生徒の取組みの様子やレポート内容
 - ・生徒に対するアンケート調査（主に自由記述欄）

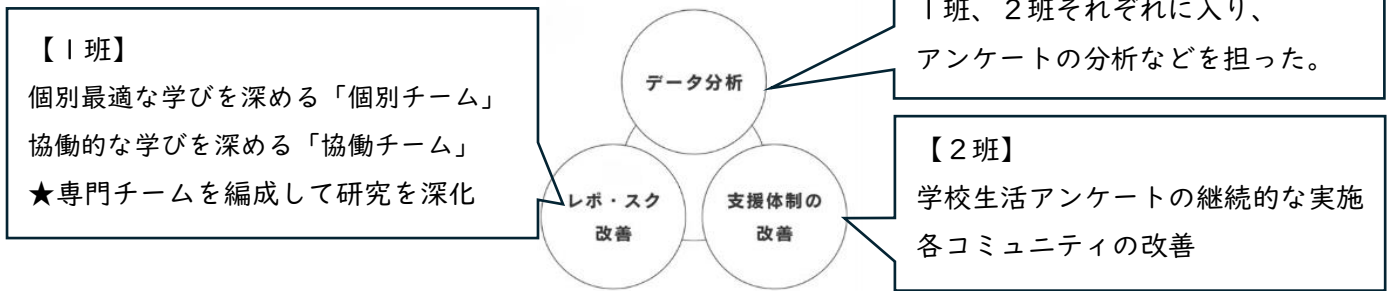
≪定量的指標≫

- 「前年度と比較し、学びのコミュニティの活用によりどのような効果があったか。また、これまで活動できなかった生徒の学習状況にどのような効果があったか。」
- ・レポートの提出総数の推移
 - ・スクーリング出席回数の推移
 - ・単位修得率の推移
 - ・学びのコミュニティ活用生徒に対する学習意識アンケート
 - ・学校生活アンケートの分析

IV 令和7年度調査研究事業の内容および成果と課題

研究全体の概要

1 各班の研究について



令和6年度の研究では、通信制における個別最適な学びの一例として、「選択肢の充実」をあげ、学習方法や学習内容を選択できるレポート作成やスクーリング展開を工夫してきた。令和7年度は個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させるために、専門チームを編成し、「個別チーム」では、自律的な学びの循環モデル構築、「協働チーム」では、協働的な学びにおける実践の体系化に取り組んだ。(P.14～21)

2班においては、令和6年度に作成、実施した学校生活アンケートを継続的に実施し、その結果の比較、分析を行った。(P.79～92) また、各コミュニティにおいても個別のアンケートを実施するなどして、生徒の実態を把握しながら支援・指導体制の改善に取り組んだ。(P.45～78)

2 学校生活アンケート（定点観測的アンケート）について（P.79～）

アンケートの概要

- ・「学校生活アンケート」として実施
- ・学習面のつまずきに関する質問 × 8問
- ・学校生活（おもに対人関係）に関する質問 × 8問
- ・実施時期：毎年10月、2月
- ・検討委員の助言を参考に作成。

アンケートの活用

令和6年度に2班が作成・実施した学校生活アンケートを定点観測的に令和7年度も実施した。それにより結果の比較・分析が可能となり、各班の研究に活用することができた。生徒の学習ニーズを把握してレポート・スクーリングの改善や校内支援・指導体制を進める土台が整いつつある。

- ・令和6年度と令和7年度の比較・分析（P.79～84、P.87～90）
- ・学校生活アンケートから対人面・学習面に課題を抱える生徒を抽出し、支援する取組み（P.84～86）
- ・学校生活アンケートとレポート提出状況のクロス分析（P.91、P.92）
- ・学校生活アンケートを活用した「協働チーム」の分析（P.20）
- ・学校生活アンケートを活用した「プッシュ型支援」の実践（P.46）
- ・各コミュニティを利用した生徒の生活アンケート結果の抽出・分析
トライ教室（P.50）
架け橋教室（P.63）
キャリア・ポート（P.76）

1 令和6年度の課題

令和6年度は、校内において先行的な実践が展開された一方で、それらが一部の教員による個別の取組に留まり、学校全体にわたる組織的な改善へと波及しなかった点に課題を残した。また、「個別最適な学び」については、スクーリングにおける学習手段の多様化という点で多くの事例を蓄積できたものの、スクーリングの場を離れた自学自習における生徒の「自律的な学び」の促進について検討の余地を残した。さらに、実践を重ねる中で手法の導入自体が目的化し、生徒の学びの本質に立ち返った指導のあり方の検討が不十分であった点も指摘された。

2 令和7年度の研究の方向性

・専門チームによる課題の深化

1班内に「個別チーム」「協働チーム」を編成し、各領域で焦点化された課題の検討を進めた。両チームの成果を相互に共有・反映させることでさらに研究を深め、各科目の実践を通してこれらを一体的に実現させる指導のあり方を探った。

・自律的な学びの循環に向けたモデル構築

「自学自習とスクーリングの循環」を主題に据え、「個別チーム」を中心に、スクーリングでの指導を通じて生徒が自律的に学習を調整できる方策を検討した。

・「協働的な学び」における実践の体系化

「協働チーム」が中心となり、集積した事例を「社会性の涵養」と「多様な視点の獲得」の二軸で体系化することを目指した。心理的安全性を支柱とした土台づくりから、他者との交流による学びの深化までを構造化し、目的に応じた最適な協働のあり方を検討した。

3 令和7年度の研究の概要

令和6年度の試行的な成果をより客観的かつ体系的なものとするため、本年度は官公庁発出の公的文書や先行研究の再検討を行い、通信制高校におけるスクーリングの役割、および「個別最適な学び」「協働的な学び」のあり方を理論的に再定義することから着手した。

その結果、スクーリングは単なる対面指導に留まらず、自律的な自学自習を前提とし、それを支え、促進するための場であるという本質を再確認した(※1)。特に「個別最適な学び」を生徒の視点から捉え直すと、自らの学習を客観的に把握し調整する「学びの自己調整」が中核的な要素となることが明らかになった(※2)。

これらを踏まえて、令和7年度研究では、スクーリングの役割を「生徒が自学自習の質や量を自らコントロールできるよう支援する場」として焦点化し、自学自習の成果をスクーリングで強化し、そこで得た気づきを再び自学自習へと還元する「自学自習とスクーリングの循環」のモデル化を試みた。

今年度研究では、「協働的な学び」を、他者の視点を取り入れることを通して個の学びを質的に深化させる機会として位置づけた。「協働的な学び」の実施に際しては、本校の生徒実態に鑑み心理的安全性の醸成を基盤に据えた。生徒が安心して協働的な学びに取り組むことができる環境を整えたうえで「社会性の涵養」を促し、最終的に「多様な視点の獲得」へと至る段階的なプロセスを構築することに重点を置いた。

以上から、本年度は1班内に2つの小チームを設置し、専門的な研究を推進した。次頁以降、各チームによる研究報告、およびこれらを各科目の特性に応じて一体的に具現化した実践例について詳述する。

※1 文部科学省『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 総則編』p.116「⑤面接指導とその評価」において、面接指導の役割は「自宅学習に必要な基礎的・基本的な学習知識について指導すること」や「その後の自宅学習への示唆を与えたりすること」等、常に自宅学習を前提とした双方向的な指導を行うものと規定されている。本研究における「自学自習とスクーリングの循環」モデルは、この学習指導要領の趣旨を通信制教育の現場において具体化したものである。

※2 文部科学省『学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料(令和3年3月版)』p.7-8「①個別最適な学び」において、指導の個別化の要素として「生徒自身が自らの特徴や効果的な学習の進め方を学んでいくこと」が挙げられている。これは、OECDが提示する「Student Agency」の概念、すなわち「自らの学習に対して主体的に責任を持ち、より良い方向へ変化を起こす力」と密接に関係している。DeSeCoプロジェクト以来のキー・コンピテンシーの中核である「自律的に活動する能力」は、本研究で重視した「学びの自己調整」を通じて育まれるものであり、「個別最適な学び」が自律した学習者へと成長するための不可欠な土台であることを示唆している。

（1）研究にあたって

本研究の目的は、生徒が自らの学習プロセスを主体的に調整し、学習内容の定着状況を適切に振り返る「自己調整学習」を習得できるよう支援することである。近年、個別最適な学びが重視される中で、学習者が自らの理解状況を把握し、必要に応じて学習方略を選択・修正できる力は、教科学習のみならず、生涯にわたって求められる基盤的能力であるとされている（※3）。

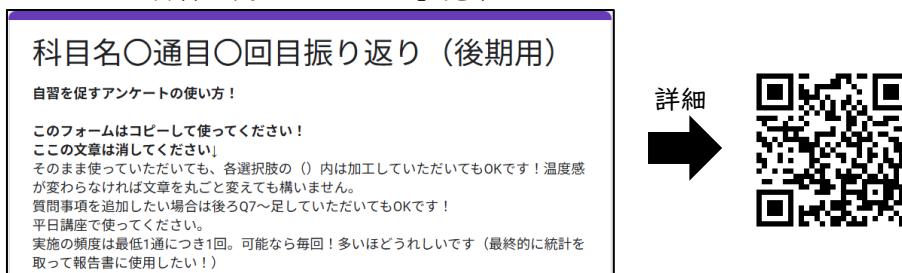
しかし、通信制高校の学習環境においては、自学自習の質や量が生徒間で大きく異なる。そこで本研究では、各科目で「自習を促すアンケート」を継続的に実施することで、生徒自身の学習行動を言語化させ、自学自習への意識を高めることを目的とした。加えてそのデータを分析し、スクーリング内容の改善やレポート指導の充実に還元することを試みた。

また、本研究は文科6期における学習改善の重点施策であり、学校全体として自学自習の質を高めるための実証的なデータを蓄積することを意図している。本研究を通して、ICTを活用した学習行動データの収集・分析、およびそれらに基づく教員の言葉かけやスクーリング設計の工夫が、個別最適な学びの実現にどのように寄与するか検討することで、本校における教育実践のさらなる充実に生かしていきたい。

（2）「自習を促すアンケート」

本研究では、各科目担当教員がスクーリング終了時において実施する振り返りを効率的かつ一定の基準で収集することを目的として、回答用フォームを作成した。後述する統計的分析を見据え、データ収集の一元化と処理の容易さを確保するため、フォームの作成には「Google Forms」を採用した。

「自習を促すアンケート」見本



なお、フォーム設計に際しては、以下の点を特に重視した。

- ・ 生徒が心理的負担なく学習の振り返りができること
 回答者である生徒がプレッシャーを感じることなく、自己の学習状況を客観的に見直すことができるよう、質問文の表現や回答方式に配慮した。
- ・ 全ての教員が汎用的に利用できること
 複数の教員が特段の修正を加えることなく使用できるよう、基本構造は統一性と簡便性を重視した。
- ・ 教科（科目）特性に応じた柔軟な加工が可能であること
 各教科（科目）特有の活動や評価観点を反映できるよう、必要に応じて科目担当者が項目を追加・調整できる設計とした。

以上のような観点を踏まえて作成したフォームにより、スクーリング後の学習記録を効率的に収集し、分析可能なデータとして整理した。

※3 文部科学省『学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料（令和3年3月版）』p.16-17。同資料では、生涯にわたって能動的に学び続けるために、自己の学習活動を振り返り次につなげる「主体的な学び」の重要性や、ICT活用等を通じて自ら学習状況を把握し、新たな学習方法を見いだすことへの期待が示されている。

(3) 方法

本研究では、各学期を通して各科目において自学自習の状況を把握する「自習を促すアンケート」を継続的に実施した。中心項目は、Q1（予習の取組状況）・Q2（復習の取組状況）とし、レポートへの着手状況を軸に回答させる形式を採用した。

複数回答した生徒については、学習の初回と最終回の回答を抽出して変化を分析する「リピーター分析」を実施した。これにより、単回の印象に左右されず、学習行動の推移を客観的に捉えることが可能となった。

さらに、回答の変化を俯瞰的に把握するため、サンキーダイアグラムによる可視化を行った。学習行動の流れを視覚化することで、「どの層の生徒がどの程度行動変容したのか」を定量的に捉える手法として有効であった。

(4) 結果

【資料1】分析に使用したアンケートの質問項目

<p>Q1. 本日の学習に向けてどのような予習をしましたか？*</p> <p><input type="radio"/> ④（教員の想定）以上に学習した！</p> <p><input type="radio"/> ③（今日の内容のレポートを）やってみた！</p> <p><input type="radio"/> ②（今日の内容のレポートを）見てみた！</p> <p><input type="radio"/> ①（レポートを見て）いない...</p> <p><input type="radio"/> ⑤その他</p>	<p>Q2. 前回の学習を踏まえてどのような復習をしてきましたか？複数選択可*</p> <p><input type="checkbox"/> ④気になったことについて自分で調べた！</p> <p><input type="checkbox"/> ③出来なかった（問題、課題）に再チャレンジした！</p> <p><input type="checkbox"/> ②（予習で完成したものを）より良くした！</p> <p><input type="checkbox"/> ①復習はしなかった</p> <p><input type="checkbox"/> ⑤その他</p>
--	--

【資料2】分析結果

項目	Q1	Q2
平均値	2.08	2.12

リポート回数	3.4 回/人
回答生徒数	362 人
のべ回答数	1508 回（無効データ含む）

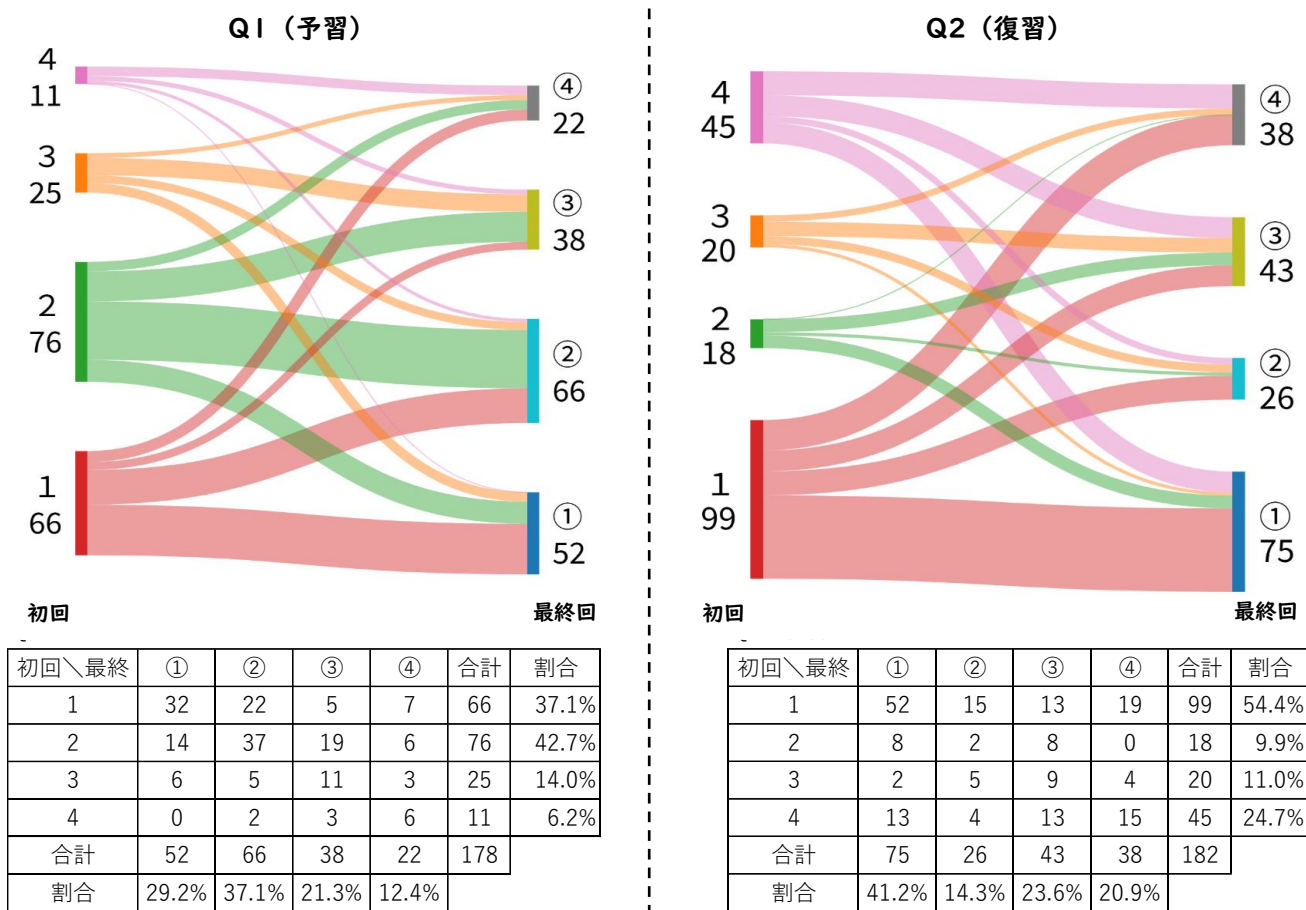
※各設問について④を4点、③を3点、②を2点、①を1点として平均点を算出した。

科目名	のべ回答数	予習平均値	復習平均値	予習内訳				復習内訳				2回以上回答者数	予習増減平均	復習増減平均	予習平均値	復習平均値
				①見てない	②見た	③取組んだ	④レポ越え	①見てない	②見た	③取組んだ	④レポ越え					
現代の国語	57	1.91	1.98	26	13	15	3	34	1	9	12	13	-0.04	-0.04	1.95	1.98
歴史総合	166	2.52	2.42	33	54	35	42	64	17	32	50	15	-0.08	-0.04	3.51	2.81
地理総合	34	3.29	2.94	5	1	7	21	11	1	1	21	10	-0.07	-0.7	3.46	2.96
世界史探究	83	2.54	2.55	7	21	32	5	28	1	10	27	11	0.35	0.67	2.54	2.51
公共	34	2	1.94	14	9	8	3	19	5	3	7	9	0.17	0.17	2.35	2.04
数学Ⅰ	66	1.73	1.8	30	26	8	2	32	19	11	4	17	0.2	0.1	1.73	1.73
科学と人間生活	23	1.77	1.7	8	11	3	0	16	2	1	4	0	該当なし	該当なし	該当なし	該当なし
化学基礎	18	2.06	1.78	4	9	5	0	11	2	3	2	0	該当なし	該当なし	該当なし	該当なし
生物基礎	226	2.14	2.32	59	97	47	22	90	26	51	55	47	0.08	0	2.15	2.35
体育Ⅰ	96	1.77	1.91	46	26	17	4	50	15	16	13	23	0.12	0.31	1.78	1.97
体育Ⅲ	110	1.81	1.64	52	20	21	6	70	12	11	11	26	0.11	0.56	1.74	1.59
保健2	108	2.37	2.14	28	32	25	21	54	7	19	25	15	-0.4	0.2	2.65	2.47
美術Ⅰ	239	1.98	1.9	63	117	46	6	129	37	22	42	53	0.03	0.1	1.97	1.95
英語コミュニケーションⅠ	144	1.81	2.12	53	66	20	3	68	13	30	27	38	0.14	0.16	1.79	2.1
英語コミュニケーションⅢ	53	2	2.4	14	22	14	0	22	2	15	14	12	0.02	-0.17	1.98	2.24
情報Ⅰ	4	1.5	1.75	2	2	0	0	2	1	1	0	0	該当なし	該当なし	該当なし	該当なし
パソコン入門	13	1.92	3.23	3	8	2	0	2	1	2	8	1	0	0	2	4
生活と福祉	3	1.67	2.67	1	2	0	0	1	0	1	1	0	該当なし	該当なし	該当なし	該当なし
くらしと環境	32	1.66	1.71	18	7	7	0	22	1	3	5	9	0.44	-0.11	1.68	1.76
回答数				381	507	269	108	608	148	219	284					
回答率				30%	40%	21%	9%	48%	12%	17%	23%					

予習および復習（※4）に関する回答の平均値は、ともに2点を上回った。これは「レポートを見てみた（2点）」以上の回答が多数を占めており、生徒が一定程度の自学自習を実施していると自己評価していることを示唆している。特に予習に関しては、2点の回答が圧倒的多数であった。

一方で、復習の平均点も予習と同様に約2点であったが、その分布には特徴的な傾向が見られた。具体的には1点と4点に回答が偏る「双峰型」を示しており、復習を全く行っていない層と熱心に取り組む層の二極化がみられ、中間層が薄い状態が浮き彫りとなった。

【資料3】サンキーダイアグラムによる解析（※5）



複数回回答した生徒を対象としたサンキーダイアグラムの分析（資料3）からは、初回から最終回にかけての行動変容について次の傾向が見られた。

・予習の推移

3点および4点の回答層が増加した一方で、1点の回答層は減少した。これは、学期の経過とともにスクーリングの題材となるレポートへの取組頻度が上昇したことを示している。（※6）

・復習の推移

4点の回答層がわずかに減少した一方、2点および3点の回答層は増加している。予習ほど高い水準を維持することが難しく、中程度の取組にとどまる層へと変化した生徒層が一定数いることを示している。

特に予習においては「予習なし（1点）」の層から「レポートを見てみた（2点）」以上の上位層へと行動が移行する流れが可視化された。こうした学習行動の変化は、アンケートを通じた定期的な振り返りが生徒の事前学習・事後学習に対する意識変容に一定の役割を果たした可能性を示唆している。

※4 本研究報告全体では「事前学習」「事後学習」と表記を統一しているが、本頁においては実際のアンケート項目に合わせて「予習」「復習」と表記した。
 ※5 サンキーダイアグラムの両端に示されている数値上段は「自習を促すアンケート」Q1・Q2の質問項目番号を、下段は回答数をそれぞれ示している。また、質問項目番号について、初回と最終回が混同しないよう、初回は通常の数字、最終回は丸数字でそれぞれ表記した。
 ※6 科目によってはレポートだけではなく、別途補充教材を復習課題として生徒に提供しているケースもある。

(5) 考察

「自習を促すアンケート」を後期（10～12月）の半期分実施した結果、次のようなことがわかった。

・「自習を促すアンケート」を起点とした問いかけとスクーリング設計の連動

本研究で導入した「自習を促すアンケート」は自学自習の実施状況を生徒自身が振り返る項目を核としている。この問いかけを成立させるためには、教員側においても「自学自習での取組をスクーリング内でどう扱うか」をこれまで以上に意識したスクーリング設計が必要となった。このように、「自習を促すアンケート」という仕組みの導入が教員による指導の工夫と生徒の意識変容を一体的に引き出す有効な手立てとなったことが示唆された。

・教員の言葉かけによる補完効果と学習の充実

科目担当者による自学自習への肯定的な言葉かけが、生徒の行動を後押しする大きな影響を与えることが一部の教科で確認された。これは自己調整学習における「外的促し」の重要性を示すものである。また、事前学習に対する取組が少しずつ促された結果、スクーリング時の理解度が高まり、学習が充実するという相乗効果も教員への聞き取りから推察された。

・事後学習に関する項目の改善

事前学習に比べると、事後学習の定着には課題が残る。教員への聞き取りにより、基礎知識の定着を重視するスクーリングを展開した場合、生徒が事後学習の必要性を感じにくくなる傾向があると推察された。また、「自習を促すアンケート」上でレポート以外の具体的な活動内容が明示されていないことも、レポート完成後に「何をすればよいか分からない」状況を招く要因と考えられる。今後は、事後学習の意味付けを明確にし、生徒が取り組みやすい補助教材の提供などを検討する必要がある。特に、分析結果に表れた「二極化」の解消に向けた具体的な学習方法の提示が求められる。

以上の結果から、自学自習を意識させる「自習を促すアンケート」の導入を核とし、そこに教員の言葉かけや指導の工夫を組み合わせることで、生徒の主体的な学習を一定程度促せることが確認できた。令和7年度は「自習を促すアンケート」を学校全体へ十分に浸透させることができなかった点について課題を残したものの、生徒の自己調整能力を養う手立てとしての有効性は十分に示されたと言える。

令和8年度（文科6期最終年度）に向けて、全科目での「自習を促すアンケート」実施に向けた仕組みや運用の統一化を検討する。あわせて、アンケート項目の改善とスクーリングの設計や教員の言葉かけなど指導の工夫を継続し、生徒一人ひとりの実情に対応した個別最適な学びをより深めるための実践研究を推進していきたい。

（1）研究にあたって

本校には、入学動機や学習経験において多様な背景を有する生徒が在籍しており、対面で他の生徒と対話をしたり発表したりする方法での「協働的な学び」に対して苦手意識を持つ生徒は多い。しかし、通信制課程においても、「添削指導・面接指導における個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を通じた主体的・対話的で深い学びの実現」が必要であるとされている。（※7）

本校では、「協働的な学び」は他者の視点を取り入れることで学びに質的な向上をもたらす重要な機会であると位置づけている。これを踏まえ、「協働チーム」では、「協働的な学び」のさらなる拡充を目指し、各教科の事例を整理して本校全体で共有することと、事例を体系化することを目標とした。

（2）本校における「協働的な学び」について

①全体像

令和6年度から令和7年度の前期のスクーリングにおいて実施した「協働的な学び」について、全教科に協力を依頼して事例収集を行い、本校における「協働的な学び」の事例集（以下、「事例集」とする）を作成した。事例集についてはP.21を参照とする。

事例集を整理したところ、「生徒の活動」や「手段・ツール」において次のような工夫が見られ、様々な教科で「協働的な学び」に取り組んでいる現状が明らかになった。なお、教科や手段・ツールにとらわれず生徒の学びの本質に焦点を当てて事例を見ることができるよう、「生徒の活動」に着目して5項目に分類し、整理した。事例集には「ツール」の項目も設けているが、補足的な情報として位置づけており、分類の軸としては「生徒の活動」を重視している。

【生徒の活動】

- 1.協働学習への導入 2.意見共有・対話 3.鑑賞・解釈 4.体験・実技 5.探究・調べ学習

【手段・ツール】

- ・ICTの活用：Figma、Padlet、Pear Deck、生成AIなど
- ・アナログ：模造紙、付箋、体験キットなど
- ・実技：体育、美術など

②体系化したイメージ図



※7 『「令和の日本型学校教育」の実現に向けた通信制高等学校の在り方に関する調査研究協力者会議（審議まとめ）』p.7（2）より抜粋。

左の図は、本校における「協働的な学び」の構造を体系化したものである。事例集を分析したところ、本校の教員は「協働的な学び」に対して主に次の2つの効果を期待していることがわかった。

・ 社会性の涵養：他者と関わる経験を積むことで、「協働的な学び」の土台を作る

・ 多様な視点の獲得：他者の考えを知ることで、自らの知識を広げ、思考を深める

他者との関わりに不安を抱えている生徒もいる現状を踏まえて、心理的安全性の醸成を基盤に据え、「社会性の涵養」を促し、最終的に「多様な視点の獲得」へと至る段階的なプロセスを構築することに重点を置いてスクーリングを実施していることが明らかになった。また、その過程で「できた」を積み重ねることで、生徒の自己肯定感を育むことも目指している。

③代表的な事例

事例集の中から、先に示した2つの効果に注目して代表的なものを抜粋した。なお、事例の詳細については、P.21以降を参照とする。

【社会性の涵養】

・ 協働学習への導入

体育Ⅱのスクーリング冒頭にアイスブレイクを行うことで、生徒同士の直接的な対話への抵抗感を和らげることができた。

・ 意見共有・対話

英語コミュニケーションⅠのスクーリングで、メタバース（仮想空間）を活用してチャットでの英会話を行った。対面での直接的な対話ではないため、生徒同士が緊張せずに会話に挑戦することができた。

【多様な視点の獲得】

・ 意見共有・対話

現代の国語のスクーリングで本文を読んだ感想や意見を Padlet に入力し、クラスで共有した。さらに、他者の意見を踏まえた自らの考えをレポートに入力することで、多角的な視点を得たり考えを深めたりすることができた。

・ 鑑賞・解釈

美術Ⅱのスクーリングで制作中の作品を教員が撮影し、それをスクリーンに投影してクラスで共有した。教員からの意見や生徒同士の反応を受けて粘り強く作品制作に取り組み、完成度を高めることができた。

(3) 事例集の活用方法と教員向けアンケートの分析

「協働的な学び」に対する考えや課題を把握するために、本校のスクーリング担当者（約50名）を対象にアンケートを実施した。アンケート結果の詳細は右の2次元コードを参照とする。



事例集の活用については、教員の朝の打合せで全体に周知したり、本校で実施しているスクーリング見学の際に補助資料として参考にしたりするように促した。その結果、回答者43名のうち約6割が「事例集を見た」と回答した。事例集の活用やスクーリング見学から、他の教員の取組を自身のスクーリングに部分的に取り入れるなど、教員間での実践共有が進んでいる様子もうかがえた。

「協働的な学び」を進める上での課題については、生徒の特性や個人差への配慮、基礎的な内容とのバランス、作業時間の確保、などがあげられた。また、他者とともに学ぶことは重要だが、そのような「協働的な学び」が苦手な生徒を置き去りにしてはいけないという意見もあった。

以上の結果から、「協働的な学び」の意義を理解しつつも、生徒個々の状況や課題に向き合いながら実践を工夫している教員の現状が明らかになった。

(4) 生徒向けアンケートの分析

2班が実施した、令和6年度および令和7年度「学校生活アンケート」の結果から、「協働的な学び」についての生徒の反応をうかがうことができる。なお、「学校生活アンケート」の詳細についてはP.79～を参照とする。

「学校生活アンケート」の問3「横浜修悠館高校でこの半年、あなたは学習面の成長を感じていますか。」(学習面の成長実感)と、問5「あなたは横浜修悠館高校で他の人と同じことに協力して取り組むことができていると感じていますか。」(協働の実感)の回答データを基にクロス集計を行った。

表：協働の実感と学習面の成長実感に関するクロス集計（合計630人）

		協働の実感			
		よく感じている	ある程度感じている	あまり感じていない	全く感じていない
学習面の成長実感	よく感じている	32	25	12	3
	ある程度感じている	40	190	98	15
	あまり感じていない	9	71	70	18
	全く感じていない	1	8	14	24

その結果、協働の実感を「よく感じている」「ある程度感じている」と回答した生徒は376人で、全体の59.7%だった。さらにその中で学習面の成長実感も「よく感じている」「ある程度感じている」と回答した生徒は287人で、76.3%だった。前向きな回答が半数近く示され、協働の実感と学習面の成長実感との間には一定の関連が見られることが推察される。しかし、全体の人数(630人)を母数にすると、協働の実感も学習面の成長実感も「よく感じている」「ある程度感じている」と回答した生徒の割合は45.6%となる。令和8年度はこの数値の増加を目指したい。

もちろん、生徒が学習面の成長を感じる要因を1つに絞ることは難しく、本分析の結果のみで全てを説明できる訳ではないだろう。さらに、「学校生活アンケート」の問5の質問内容は広く「学校生活における協働の実感」を問うものであり、行事等のスクーリング以外の要素が含まれている点も考慮する必要がある。しかし、こうしたデータの制約はあるものの、学校に登校して他者と協働することを肯定的に捉えている生徒ほど、学習面での成長も実感しているという傾向は一定程度うかがうことができる。これは、日々の指導現場で感じている肌感覚とも一部合致するものであり、通信制課程における「協働的な学び」が生徒の学習意欲や自己肯定感を支える一助となっていると言えるのではないだろうか。

(5) まとめと今後の展望

各教科の事例を整理して本校全体で共有し、それらを体系化するという目標は、「事例集」の作成・活用と「体系化したイメージ図」の作成によって、達成できたと言えるだろう。また、これらの作成を通して、教員が多様な背景を有する生徒が安心してスクーリングに出席できるような配慮や工夫をしながら「協働的な学び」を実践している多くの事例を確認することができた。

今後は、「体系化したイメージ図」を生徒と教員の共通認識として位置づけることで、「協働的な学び」に対する生徒の不安や教員の負担感を軽減し、「協働的な学び」の実践をより円滑に進めることを目指していきたい。また、「協働的な学び」を苦手とする生徒も参加できる「協働的な学び」の在り方や、ICT活用のさらなる深化、ICT活用と対面による「協働的な学び」とのバランスなどを検討し、生徒・教員双方にとってよりよい学びにつなげていきたい。

協働的な学びの事例集 一部抜粋

※「期待する効果(≒目的)」の欄には、大きく分けて2種類の効果が記載されています。
 ・オレンジ色で書かれたものは、社会性の涵養(他者と関わる経験を通じて、協働的な学びの土台を作ることを目的としたものです。
 ・緑色で書かれたものは、多様な視点の獲得(他者の考えを深めること)を目的としたものです。

※事例の並び順は教科ごとではなく、生徒の活動ごとに分類しています。

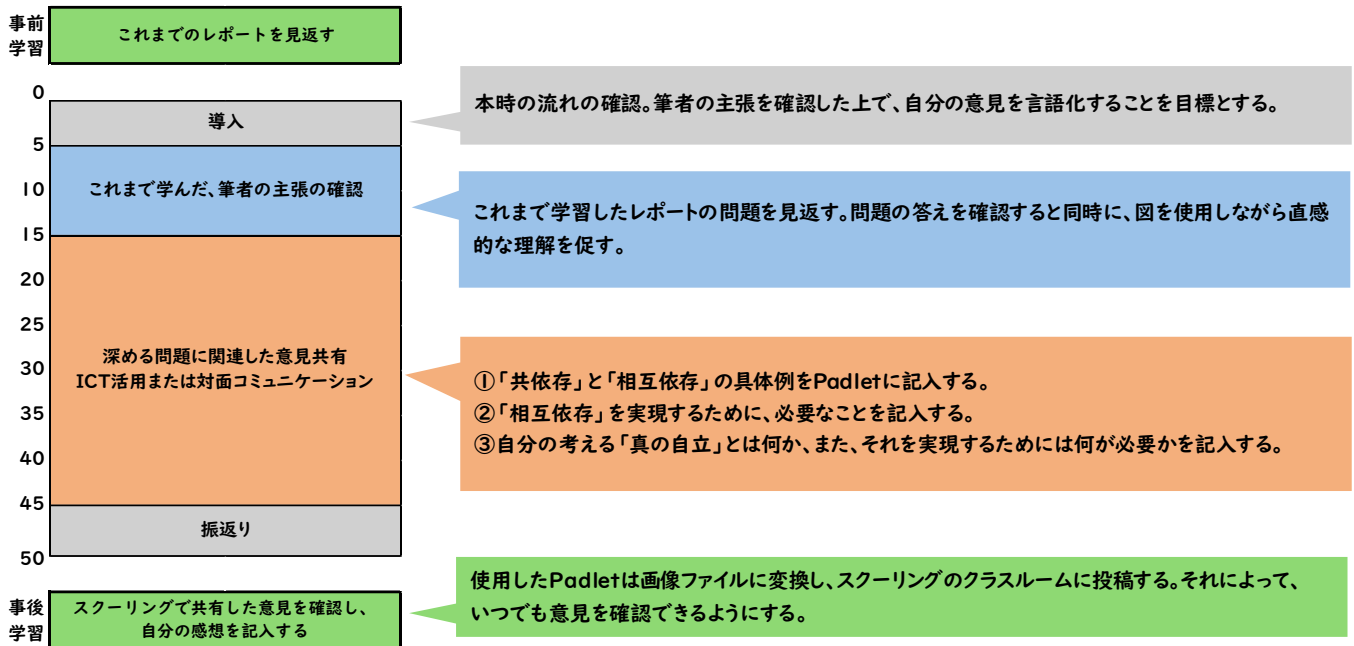
生徒の活動	活動形態	ツール	講座	期待する効果(≒目的)	実践例	実践して感じたこと、改善点、等	生徒の様子
協働学習への導入	直接的対話型	その他	体育Ⅱ	<ul style="list-style-type: none"> 他者と関わるきっかけを得られる 対話への抵抗感を和らげられる 活動前に緊張をほぐせる ペア・グループ活動に入りやすくなる 	毎回のスクーリングのはじめに行う。 【手順】 ①スクーリング開始前にアイスプレイク的な内容から入る。 ②ペアを組む時は必ず自己紹介+アイスプレイクをする。 自己紹介の時間は20秒が最速。30秒では長い。1分は無理。	・保健と体育で実践したがどちらもその後の活動でコミュニケーションをとることにに対してハードルが下がった。 ・アイスプレイクをするだけでも配慮や支援が必善なので、大変ではあるが効果はあった。 ・体育のようにアイスプレイクのあとに活動が嫌な場では効果が大変いい。保健のように教室で行うアイスプレイクは行動範囲も狭く動きが小さいため、アイスプレイクとその後の活動が運動しないこともあった。	・必修修科目 ・保健:10~20人程度/体育:5~25人程度 ・コミュニケーションが苦手な生徒と苦手意識を持たない生徒が混在し、積極的に人と関わりたい生徒もいる。
意見共有・対話	ICT活用型	padlet	現代の国語	<ul style="list-style-type: none"> 多角的な視点を持つことができる。 自分の意見と他の人の意見を比較すること、トピックに対する考えを深めることができる。 	その月の最終回で実施 【手順】 ①本文を読んだ感想や意見をレポートに記入する。(10分) ②Padletに自分の内容を記入する。(10分) ③Padletに記載された内容を共有。(5分) ④他者の意見を踏まえ新しい意見や感想を創造し、レポートに記入する。(15分)	・一つの教室で完結するのではなく、複数の教室で一つのPadletに入力をさせるべきだった。より多くの視点で書かれた意見や感想文があれば、もっと生徒の選択肢や考える内容の幅が広がると思う。	・一つの教室で5人前後。 ・必修修科目
意見共有・対話	ICT活用型	その他	英語コミュニケーション	<ul style="list-style-type: none"> 直接顔を合わせなくても、緊張せずに会話ができる。 	【活動内容】 メタバースを使い、仮想空間で英会話でペアワークをする。	・ゲームなどに慣れていない生徒に操作を説明するのが難しいが、R7年度は、操作がむずかしくその生徒はほとんどいなかった。 ・操作に慣れて、会話をすると生徒が増えた。 ・タイピングに時間を取られて暇な時間を作らなかったために、1文でうまく返答するように指示した結果、やり取りが増えた気がする。	必修修科目 10~15人
鑑賞・解釈	鑑賞	その他	美術Ⅱ	<ul style="list-style-type: none"> 制作途中の作品をお互いに鑑賞することで、作品制作への意欲を高めることができる。 他者からの意見や反応を受けて、粘り強く作品制作に取り組み、自身の作品の完成度を高めることができる。 	【手順】 ①スクーリング中に生徒が制作している作品の写真を教員が撮影する。 ②スクーリングの終わりに、撮影した写真をスクリーンに投影し、教員が良いところをコメントをする。(5分)	・生徒は他者の作品に強い興味を持ち、他者の作品の良いところを自身の作品に取り入れようとする姿が見られた。 ・作品を取り上げられた生徒は嬉しそうにしていた。 ・氣にならなかった作品の作者に声をかける生徒もおり、結果的に生徒同士の交流にもつながった。 ・作業時間の確保を考えると、毎時間実践するのは難しい。	・人数は10~15人程度 ・選択科目なので、美術への意欲が高い生徒が多い。 ・全体の前で作品を見せられることに抵抗がある生徒は少なく、ほとんどの生徒が活動に協力をしてくれた。



その他の事例に関しては、右の2次元コードを読み取ってください

◆学習活動全体の組み立て

(1) 概要



(2) ねらい

①個別最適な学び

- ・筆者の主張を正確に把握した上で、生徒一人ひとりの意見を言語化する

自身の意見を言語化することは重要だが、本文の内容を軽視してはならないと考えた。そのため、筆者の主張を自分の中に落としこんで、視野を広げた上で新たな意見を記入させた。

- ・「自習を促すアンケート」の実施

スクーリングが終わるごとに、振り返りのアンケートを実施した。その際、事前学習・事後学習に関する質問項目を用意し、生徒の自学自習を促した。

②協働的な学び

- ・Padlet および対面による口頭での意見共有

令和6年度に引続き、Padletを利用して生徒の意見を共有した。同時に、投稿した意見について口頭での説明が可能である生徒は名前を記入するよう指示し、教員から質問を投げかけた。従来は文字のみでの意見交換を行っていたが、対面でのコミュニケーションへのステップアップをねらいとした。ただし、生徒同士のコミュニケーションを行うことは現時点では時期尚早であると感じられた。そのため、スモールステップを意識し、まずは教員と生徒間における対面でのコミュニケーションを行った。

- ・2クラス合同のスクーリング

令和6年度はコース制での協働学習を行ったが、令和7年度は2クラス合同のスクーリングを行った。

ICTコース、対面コースと、別々の教室で実施してはお互いに何をやっているのかが分からない。そのため、コース制では対面でのコミュニケーションに挑戦する意欲を養いにくいと考えた。同じ教室の中でICTのみの協働学習を行う生徒、対面での協働学習も行う生徒、お互いの様子を可視化することにより、学習意欲の涵養と新たな一歩への挑戦を促した。

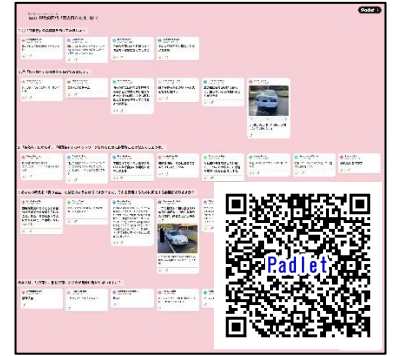
◆実践結果



電子黒板を用いた意見共有



生徒による意見入力の様子



Padlet 入力データ

(1) 成果

・教科書本文の理解を基にした、意見の言語化

本文のキーワードである「相互依存」についての具体例を生徒一人ひとりが考え、共通項を見つけ出す学習を行った。その活動を通して、教員による一斉講義よりも本文を深く理解し、自分の中に落としこんで考えることができた。その上で「真の自立とは何か」について視野を深め、自分なりの意見を言語化することができた。

・必履修科目における、協働学習の実施

令和6年度の報告書に展望としてあげていた、必履修科目での協働学習を行うことができた。また、令和7年度は2クラス合同の学習を行うことにより、意見を発表することに自信のない生徒であっても、他者の意見を参考にし、自分の考えを言語化するための環境を整えることができた。今回の実践により、上級科目である文学国語や論理国語において、さらに発展させた協働学習を行うための土台ができたと感じた。

(2) 課題

・生徒意見への介入方法

今回のスクーリング実践は複数時限で行っており、各時合同で行った。その際、教員により生徒の意見への介入の方法がまちまちであり、事前の情報共有や指導方法のすり合わせが不十分であったと反省した。

・対面でのコミュニケーション

令和6年度の実践と同じように、対面でのコミュニケーションに苦手意識のある生徒が大多数であった。ICT等を利用した文字でのコミュニケーションは可能だが、口頭でのコミュニケーションとなると、途端に消極的になってしまう。令和7年度は必履修科目での実践であったため、令和6年度よりも苦手意識の強い生徒が多いようにも感じた。

(3) 令和8年度に向けた展望

・計画的な合同スクーリング

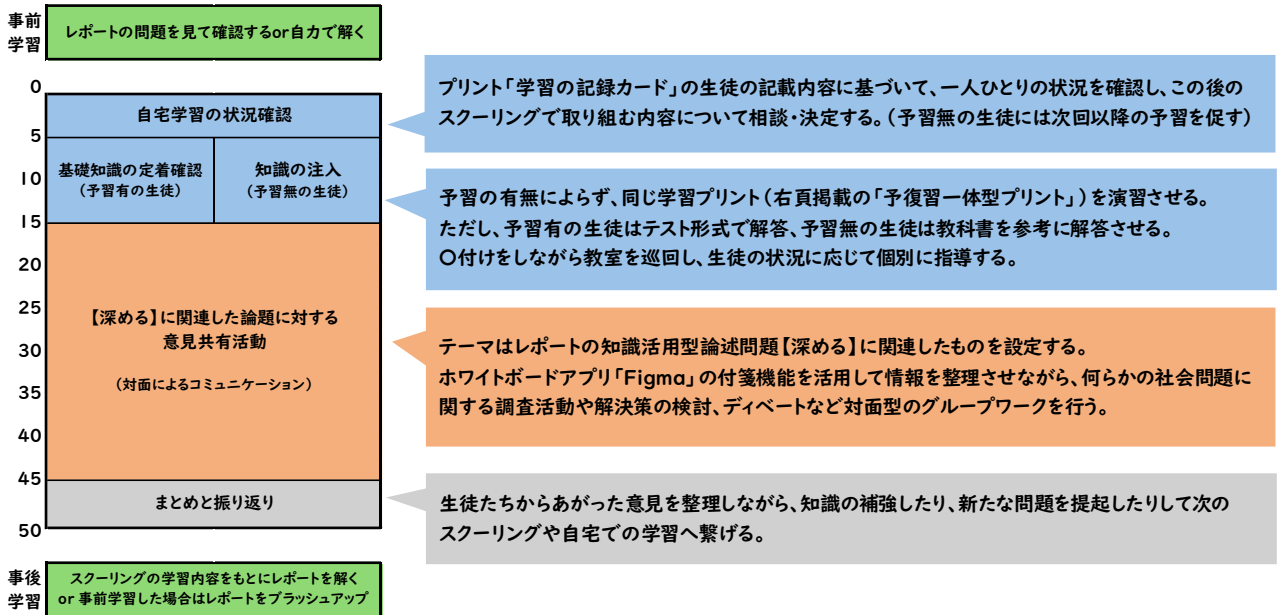
令和7年度は後期から2クラス合同でのスクーリングを行った。最終通の合同スクーリング時点では、生徒はこの形式に相当慣れていたように見受けられた。令和8年度は前期から合同で協働学習を行いたい。教室内で少人数のグループを2つ形成し、それぞれに教員が1人つくことを想定している。それにより、不明点をすぐに教員や周囲の生徒に質問でき、意見共有で大きな声を出さなくても対話が成立する距離を保つなど、生徒にとって安心できる環境を構築する。

・教員間での指導方法の共有

同一科目は複数の教員が担当にあっている場合でも同一内容（指導法）のスクーリングを前提とすることで、お互いの指導法の共有が必然的に意識され、国語科全体の指導力の底上げに繋がると考えている。

◆学習活動全体の組み立て

(1) 概要



(2) ねらい

①個別最適な学び（自学自習とスクーリングの循環）

・ 学習プロセスの可視化とリフレクションの促進

出席票に代わる「学習の記録カード」（右頁参照）を配付し、毎時の事前・事後学習の進捗を生徒自身に記録させた。その後、教員は机間指導を通じて全生徒の記載内容を確認し、押印とともに個別に助言を行った。これにより、生徒は学習の積み上げを視覚的に把握して意欲を高めること、また教員が個々の理解度に応じた課題・活動の提示や自学自習への動機付けを柔軟に図ることをねらいとした。

・ 習得状況に応じた複層的な学習支援

レポート課題の視点を変えて作成した「予復習一体型学習プリント」（右頁参照）を導入した。生徒の事前学習の有無や習熟度に応じ、学習済みの生徒には知識の定着を確認する「復習」として、未着手の生徒には解き方を学び、自学自習へつなげる「予習」として機能させた。これにより、状況の異なる生徒が同一空間にいながら、各自の課題解決に直結する個別最適な学習機会を得ることをねらいとした。

②協働的な学び

・ 毎時の対話機会を核とした協働的な学びのデザイン

公共が掲げる「社会への主体的な参画」の実現に向け、対面指導ならではの価値である協働学習を毎時設定した。自学自習では困難な多角的な視点に基づく合意形成を重視し、具体的な社会課題をテーマとしたディスカッションやディベートなどを実施した。他者の価値観に触れるプロセスを通じ、生徒一人の学びでは到達しえない思考の深化・拡大と、社会の一員として他者と協働する態度の育成をねらいとした。

・ 対話を支える心理的安全性の構築と環境整備

対人不安を抱える生徒が多い実態を踏まえ、安心・安全な学習空間の保障を最優先とした。初回のスクーリングにて、生徒自身が「安心して学べる空間」を検討・定義することで、場づくりへの主体的な参画を促し、毎時のアイスブレイク等で緊張緩和を図った。心理的障壁を最小限に抑え、生徒が自ら対話へと一歩踏み出せる土壌を整えることをねらいとした。

◆実践結果



※掲載されている画像の詳細は2次元コードを読み取って確認してください※

(1) 成果

・事前学習の習慣化と可視化の効果

事前学習を促した次のスクーリングにおいて、7割程度の生徒にレポート課題への着手（閲覧や解答）という行動が見られた。この傾向は出席頻度の多寡に関わらず共通している。特筆すべきは、教員が個別に押印や助言を行う「学習の記録カード」とそれを伴わない「自習を促すアンケート」との間で予習行動の発生率に大きな差異が認められなかった点だ。この結果から、教員による承認の有無以前に、「自学自習を促す」または「自身の学習状況を報告する」という枠組み自体が学習行動を誘発する装置として機能していることが推察される。

・協働学習における役割の多様性と個別最適な参画

全体での主体的な発言や発表を行う生徒は一定の層に固定される傾向があり、「対人関係に課題を抱える生徒が主体的に人前で発言できるようになった」などの劇的な行動変容は確認できなかった。しかし、表舞台に立たない生徒たちが準備段階での資料提供や発表者への後方支援、特定分野の知識共有など、各自の強みを生かした形で協働に寄与する姿が散見された。これにより発表の質も高まり、集団内での相互補完的な学びが実現した。

(2) 令和8年度に向けた課題と展望

・自学自習を促す「事後学習」の定義共有とツールの改善

事後学習の達成率については、事前学習と比較して低い傾向が認められた。しかし、「未実施」と回答した生徒への聞き取り調査の結果、実際には「スクーリング後のレポート解答」に取り組んでいる事例が散見された。何をすれば事後学習とみなせるか、その定義が生徒に十分に浸透していなかったことが要因と考えられる。また、同様の乖離は事前学習においても発生している可能性があるため、事前学習の達成率も上方修正の見込みがある。この結果を踏まえ、令和8年度は「学習の記録カード」における項目名や表現を再考し、どのような具体的な行動が望ましい事前学習・事後学習に該当するかについて、生徒が直感的に理解できる形式へと改善を図る。これにより、自己評価の精度を高めるとともに、自学自習のさらなる質的向上を支援する環境を整えたい。

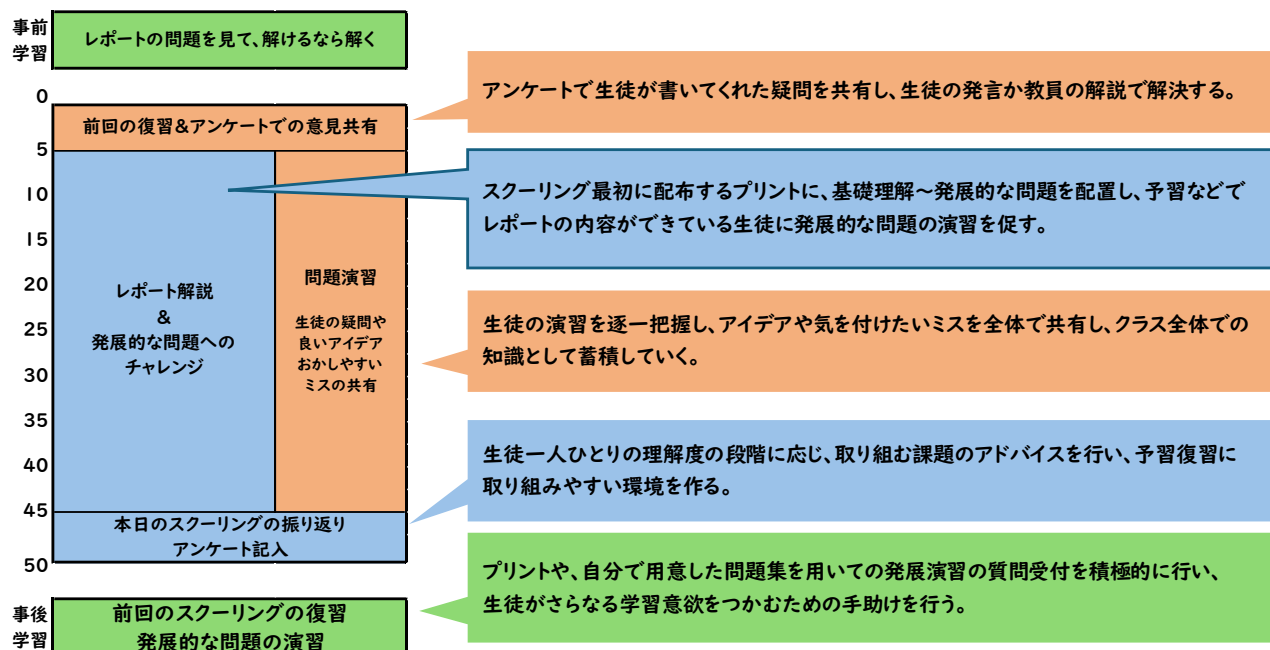
・協働的な学びにおける「目指すべき生徒像」の再定義

令和7年度の実践を振り返ると、「協働的な学び」における目指すべき生徒像を、無自覚のうちに「人前で堂々と意見を述べる」といった特定の姿に限定していた側面があった。多様な背景を持つ生徒が集う通信制高校において、成功体験の形を画一的に設定することはかえって多くの生徒の参画機会を奪う可能性がある。

今後は、成果において述べた多様な貢献の形を「目指すべき生徒像」の一つとして明確に位置づけるため、調査や資料作成、補足、調整など個々の特性に応じて役割を柔軟に選択できる多層的な活動を設計する。あわせて、言語的なアウトプット以外の貢献度を可視化し、承認できる多面的な評価指標の策定を検討したい。個々の生徒がそれぞれの強みを生かして参画できる場面を事前に想定することで、一人ひとりの特性に合致した「協働的な学び」の実現を目指していく。

◆学習活動全体の組み立て

(1) 概要



(2) ねらい

①個別最適な学び

・「自習を促すアンケート」を活用した事前事後学習の定着

生徒それぞれの学習状況に応じた学習方法や学習手段を考えられるよう、「自習を促すアンケート」内にスクーリングでの理解度を振り返る問いを設定した。スクーリングの最後に回答する時間を設け、その後の自学自習へ繋げる環境をつくることをねらいとした。

・自学学習に繋がるプリント

スクーリングで配付するプリントに、レポートで学習した知識を基礎として取り組める発展問題を組み込み、スクーリング内外を問わず取り組めるようにした。また、事前学習で解答した問題も含め、質問しやすい環境を整えることで生徒自らが興味に壁を設けず学習を進められることをねらいとした。

・学習状況に応じて最適な問題を選択できるレポート問題

レポートに生徒が自分の学習状況に応じて教科書・プリント・使用している問題集などから任意の問題を選択して解く形式の問いを設置した。これにより、事前学習でレポートに掲載されている問題を全て終えてきた生徒について、スクーリング中に取り組む学習活動に滞りがないようにすることをねらいとした。

②協働的な学び

・「自習を促すアンケート」を活用した多様な視点の獲得

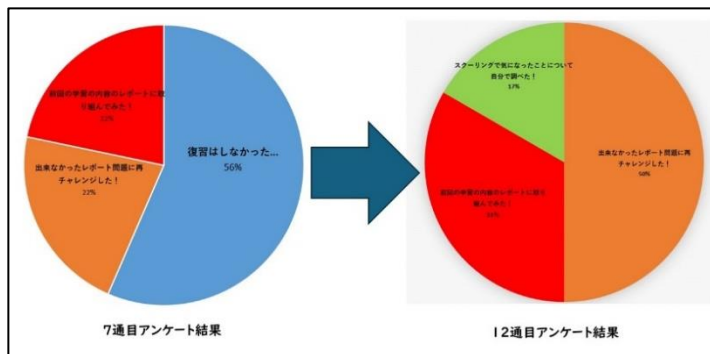
回答としてあがった疑問点や難しいと感じた内容を全体で共有し、復習を兼ねて解説を行ったり、生徒同士で解決を図ったりする機会を設けることで、多様な視点の獲得をねらいとした。

③自学自習とスクーリングの循環

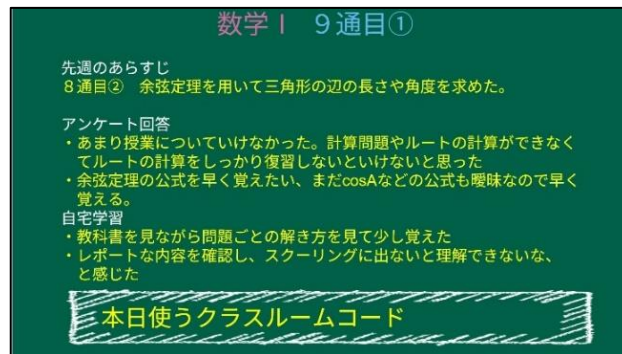
・自習を促すアンケートの活用

回答を取りあげて全体で共有し、他の生徒の学習活動を参考にしながら自分でも取り組める内容を見つけられるよう促すことで、自学自習に取り組みやすい状態を作ることをねらいとした。

◆実践結果



事前事後学習アンケート結果



アンケートを用いた振り返り

(1) 成果

・レポートの自学自習に対する意識の変化

「自習を促すアンケート」開始当初は事前学習や事後学習を行ってスクーリングに参加する生徒は半数に満たなかった。しかし、スクーリングごとに回答結果の共有を行い、事前事後学習の方法を伝えていった結果、最終（12回目）のアンケートでは、最低限スクーリングのレポート内容を確認してくるという回答を全参加者から得られるようになった。数学が苦手な生徒にも自学自習への意識が浸透したことは大きな成果である。

・「自習を促すアンケート」の質問項目調整によるスクーリング改善

「自習を促すアンケート」に「スクーリング内での疑問点・難しかった点」を答える問いを設けたことで、スクーリングの冒頭で効果的に振り返りを行うことができた。通信制では毎回全員が参加するとは限らないため、スクーリング中に復習の時間を設けているが、その導入がよりスムーズになった。このことから、「自習を促すアンケート」の問いを科目特性に応じて改良することで、スクーリングの改善につながることを示唆された。

(2) 課題と令和8年度へ向けた展望

・今後の「自習を促すアンケート」の活用に関する懸念

アンケートはデータ収集の面でも重要だが、運用には明確な見通しが必要である。同じようなスクーリングを繰り返し、アンケートも同様の内容になると、生徒にとって意味を感じにくくなる可能性がある。令和7年度は「自習を促すアンケート」を通して生徒の意識や疑問を共有し、それをスクーリング構成に反映させたことで、生徒が前向きに回答してくれるようになった。令和8年度は全科目でアンケート実施を進めるため、令和7年度に得られたノウハウや経験を教員間で共有するなど、アンケートをより有効に活用する方法を検討する必要があると感じた。

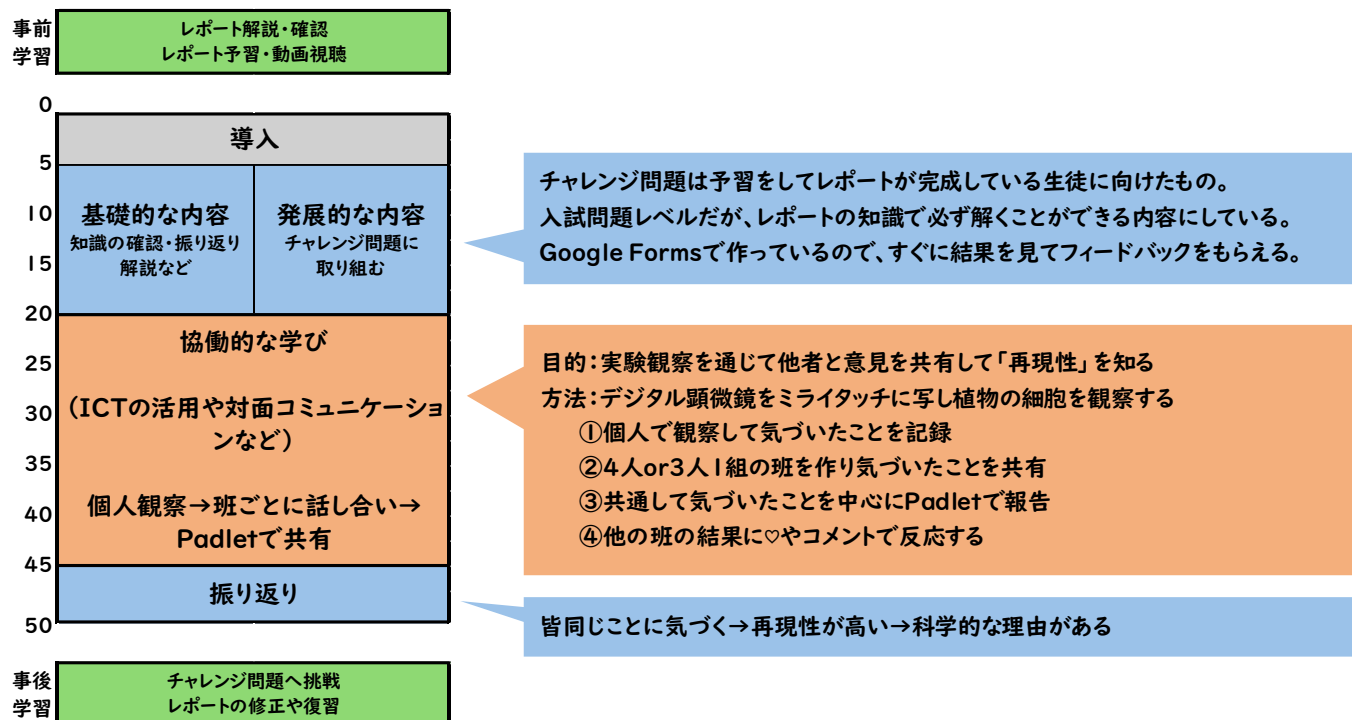
・数学における協働的な活動

数学は生徒ごとに解法が異なることが特徴であり、机間指導で見つけた良い考え方や独自の解法を共有しにくい点が課題であった。また、これまでは教員が黒板に書き出す方法が中心であった。令和7年度からは電子黒板が導入され、教員のタブレット活用は進んだものの、生徒の解法を共有する活用は十分ではなかった。

令和8年度は電子黒板を活用して生徒の解法や疑問を共有することで、スクーリングに参加する生徒同士の理解を深める方策について検討していきたい。

◆学習活動全体の組み立て

(1) 概要



(2) ねらい

①個別最適な学び

・自学自習とスクーリングの循環

学習が順調な生徒向けに追加問題（チャレンジ問題）を提供した。Google Forms を活用して提供することで、スクーリング中のみならず、事後学習にも活用させることをねらいとした。内容は「大学入学共通テスト」程度で、レポートごとに1~2問を設定し、2問の場合はレベル差をつけた。

・自習を促すアンケートの実施

自学自習に対する意識づけを目的に毎回実施した。「個別チーム」から全教科へ向けた共通の質問に加え、協働学習や単元の振り返りを取り入れた。

②協働的な学び

・対面型の協働学習

実施目的は回ごとに变化させた。紹介事例では「再現性の高い現象」をテーマに、個人観察→Padletによる観察結果のグループ共有（右頁資料1）を通して、現象の特徴に気付かせる活動を行った。

別の実施例として、免疫を題材として「すごろく」を行った。他者と協力してゲームを実践し、複雑な適応免疫の仕組みについての理解を深めさせた。

・安心して学べる環境づくり

協働学習に抵抗のある生徒には、対面型の場合は事前周知や当日の流れの丁寧な説明を行った（右頁資料2）。また、コミュニケーションが苦手な生徒も比較的参加しやすいICTを活用した学習機会も同時に設けることで、安心してスクーリングに参加できるよう配慮した。

◆実践結果

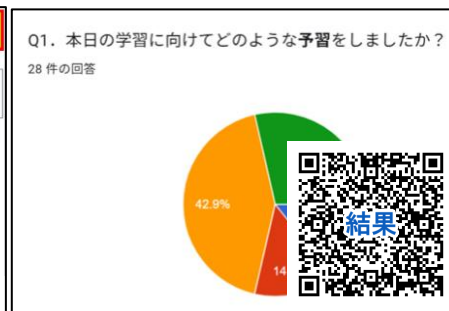
【資料1】観察結果共有



【資料2】協働学習の指示スライド



【資料3】自習を促すアンケート



※掲載されている画像の詳細は2次元コードを読み取って確認してください※

(1) 成果

・主体的選択による学習の自己調整

生徒が自分自身に合った学習手段や学習ペースを主体的に模索し、自学自習へと前向きに取り組む姿が多く見られた(資料3)。特に事前学習については、スクーリングでの学習展開の工夫や、チャレンジ問題へ積極的に取り組むよう促したことが奏功し、学習の質が着実に向上している様子がうかがえた。

・他者と学ぶ価値の実感

協働学習の面でも、生徒が抱えていた不安を徐々に軽減し、他者との関わりに一歩踏み出す場面が見られた。スクーリング終わりに実施した振り返りシート等から、「他者と協力することの楽しさ」や「互いの意見を重ねて学び合う意義」を実感した生徒もおり、協働することの価値が着実に伝わり始めていることが確認できた。

(2) 課題

・きめ細かな状況把握の必要性

個別最適な学びに関しては、生徒一人ひとりの学習状況を把握する機会が十分に確保できなかった。生徒が自学自習を行う上でどのような困難を感じているか、多様な課題が見えてきた。例えば、漢字などを読むことができず、教科書やWeb上の解説文などを十分に生かしていない生徒が一定数いることが分かった。

・安心して参加できる環境づくりと表現機会の不足

協働的な学びに関しては、対面して実施することを予告したことで、参加を避ける生徒が一定数いた。また、全体の前で発表する場面など、学びをアウトプットする場面が不十分であったため、自身の学びを表現する機会が不足した。

(3) 令和8年度に向けた展望

・学習状況を体系的に把握する仕組みづくり

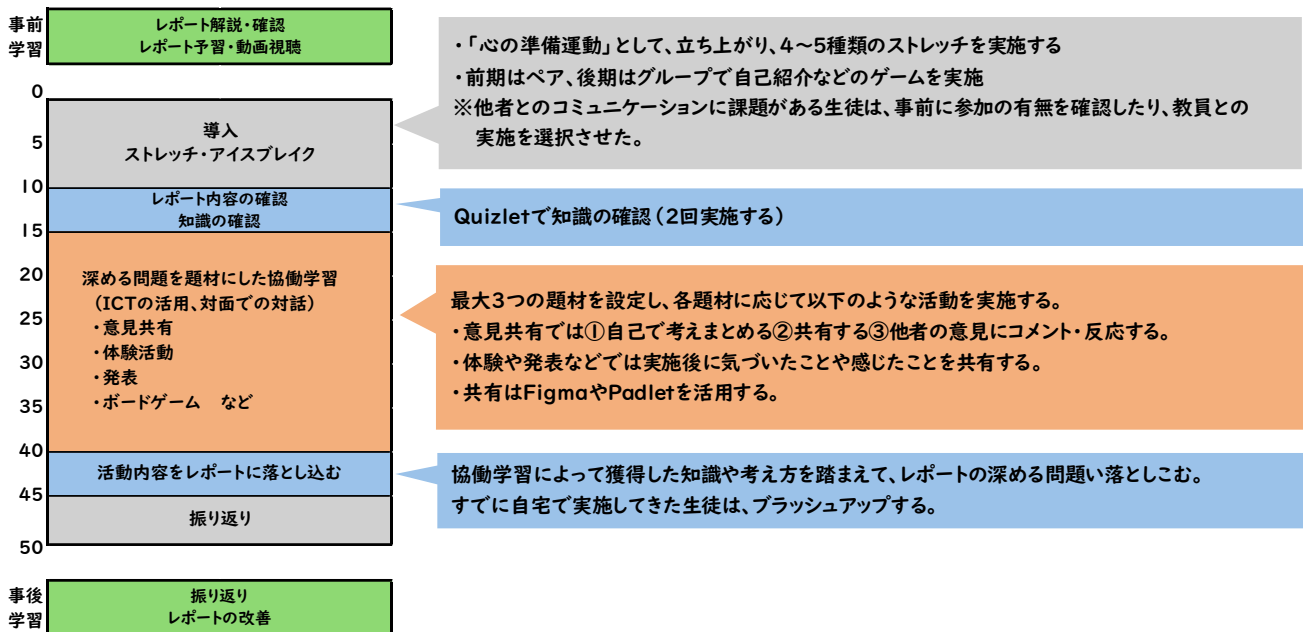
令和7年度は学習手段そのものの選択肢は拡充できたが、各生徒の自学自習の進捗や理解状況を体系的に把握する仕組みまでは整備できなかった。令和8年度は、生徒自身が学習状況を客観的に可視化できるツールを導入することを検討し、スクーリングでの確認や個別支援につなげる仕組みをつくりたい。

・ICTと対面の共存による「多様な協働」の検討

対面での協働学習に抵抗感を持つ生徒への対応として、無理に参加を求めるのではなく、個々の特性に応じた「取り組める形」を柔軟に用意することが重要であると考えている。今後は、教室内において「対面による協働」と「ICTを活用した非対面協働」を併存させ、生徒が安心して学びに参加できる環境を整えていきたい。

◆学習活動全体の組み立て

(1) 概要



(2) ねらい

①個別最適な学び

・活動方法と学び方を選択できる学習環境の構築

スクーリングにおいて、各単元の目標を達成するために、活動方法と学び方を選択できるようにした。

活動方法：他者との直接的な対話に苦手意識を持つ生徒も活動に参加できるようにするために、個人・ペア・グループから選択。（「保健すごろく」では、「生徒対生徒」と「教員対生徒」）

学 び 方：自己の状況に応じて活動方法（他者との意見共有/内省/調べるなど）を選択。

②協働的な学び

・ICT を活用した間接的協働の導入

Figma や Padlet 等を活用し、自分の考えや調べたことをまとめ、他者の意見に触れる機会を設定した。

・体験活動を通じた役割分担と対話の促進

妊婦体験で、体験・補助・記録の役割を分担し、対話をしながら妊婦への配慮事項をまとめた。

・調査・まとめ・発信を通じた協働的探究活動

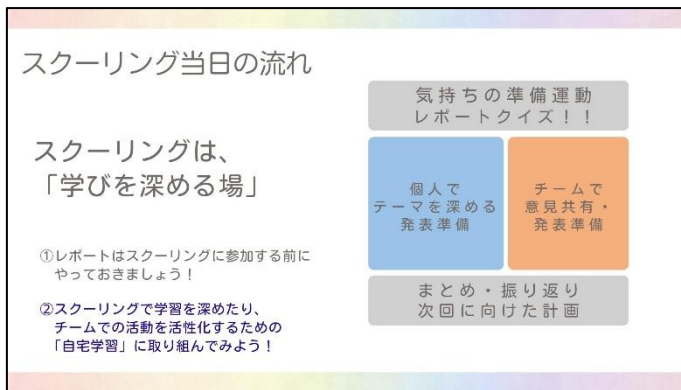
環境問題を題材とし、個人・ペア・グループで「テーマ設定・調査・スライド作成・発表」という一連の流れの中で対話を促した。完成したスライドは Figma 上で共有し、希望者はプレゼンを実施した。

③自学自習とスクーリングの循環

・自学自習を前提としたレポート設計とスクーリング展開

知識・技能の問題を自宅で取り組んだ上でスクーリングに参加するよう指導し、「スクーリングは学びを深める場」と位置づけて協働的な学びや探究学習等を設定した。さらにスクーリングで学んだことをレポートに落としこみ、ブラッシュアップするという循環を目指した。これらを成立させるために、マイページ上のコンテンツや補助資料を充実させた。知識・技能の問題においては、スクーリングの導入時に「Quizlet」を活用し定着を図った。

◆実践結果



(1) 成果

・他者の意見を踏まえた記述内容の深化

他者の意見に触れる時間を設定し、コメントやリアクションを行う活動を取り入れたことで、自身の考えを一度内省したうえで再構成し、レポートに反映できる生徒が増加した。

・体験活動を介した自然な対話の発生

体験活動を介した目的の共有や役割分担によって、自然な対話が生まれた。

・自学自習とスクーリング循環の定着

レポート設計とスクーリング展開の「循環」を意識して行ったことにより、自学自習を前提としてスクーリングに参加する生徒が増加した。

・活動方法の選択による参加の広がり（予期せぬ成果）

他者との関わりに苦手意識を持つ生徒が、まずは個別でICT上での協働的な活動経験を積み、8回目のスクーリングでは対面での活動（すごろく）に挑戦し、積極的に参加する姿も見られた。

(2) 課題

・協働的な学びに対する不安への説明不足

協働的な活動によって得られる効果や、活動方法の選択制についての説明が不十分であったことで、スクーリングへの継続的な参加を断念した生徒がいたことも事実である。この状況を改善するために、毎時間の説明を徹底する。

・活動方法の多様化による時間配分の難しさ

活動方法を個別・グループで選ぶことができる反面、それに対する準備や説明に時間を要し、待ち時間が発生するケースもあった。少なくとも活動の方法を複数用意する場合は、TTでの指導で対応するか、待ち時間も視野に入れた個別の活動内容を準備しておく必要があると感じた。

(3) 令和8年度に向けた展望

・年間を見通した学習内容・活動方法の提示

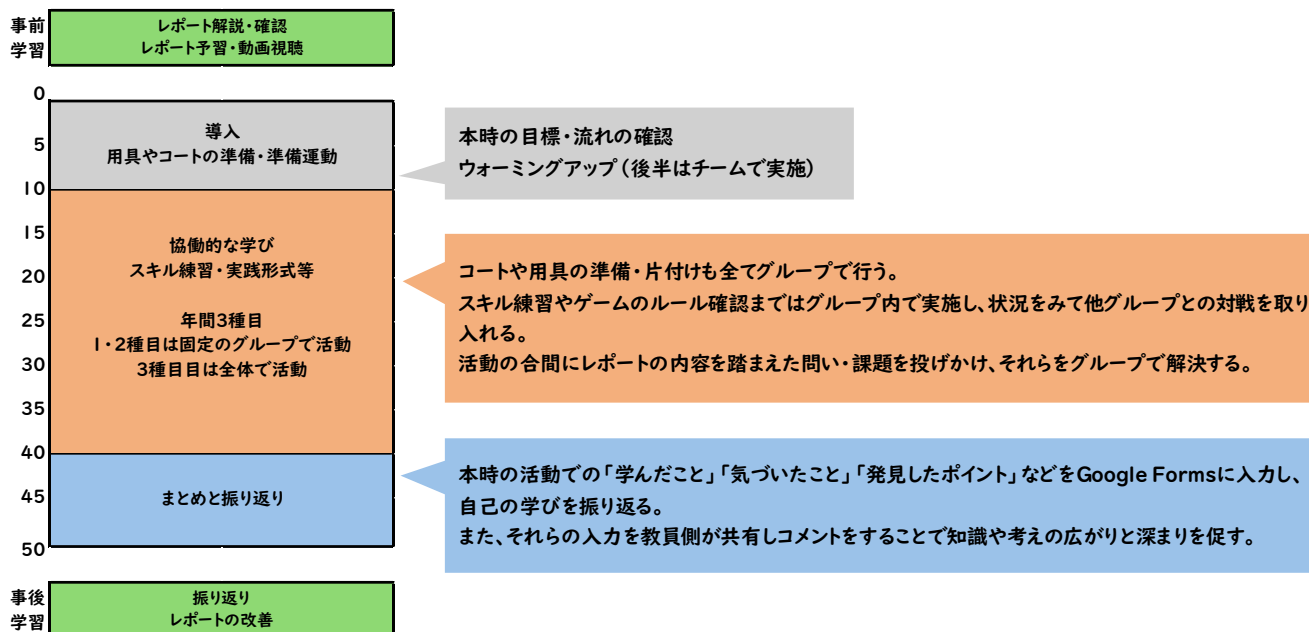
令和7年度はレポートの内容やシステムを変更したため、その都度活動内容を検討し構成したが、令和8年度は今回の活動を軸としてレポートの改定に取り組み、年間を通して活動内容の提示することで、生徒たちが見通しをもってスクーリングや活動に参加できるようにする。

・協働的な学びに安心して参加できる環境づくり

協働的な学びにおける目的や、自己にあった活動方法を選んで学びの次元をステップアップできることを伝え、安心して参加できる環境づくりについて検討する。

◆学習活動全体の組み立て

(1) 概要



(2) ねらい

①個別最適な学び

・経験や関心に基づく「深める問題」の選択

レポートでは、自分の運動経験や観戦体験をもとに「深める問題」の課題項目を選択できるようにした。

・技能差に配慮したチーム編成の工夫

実技の特性上、活動自体の個別化は困難なため、技能レベルに応じて工夫した。

- 1) 教員が技能レベルを分散したチームを編成。(経験者はサポート、初心者は貢献意識の醸成)
- 2) 生徒が技能レベル別のグループを選択。(技能差による不安の軽減と安心できる環境整備)

②協働的な学び (実技科目という特性上、他者との協働は必須であるため、以下の2点を実施した。)

・生徒の心理的安全性を高める環境づくり

他者との関わりに不安を持つ生徒が多いため、チームを固定し、初対面の不安を減らすことで安心して参加できる環境を整備した。

・協働での課題解決を通じた学びの深化

レポート内容を踏まえた「問い」を設定し、それを解決する方法をチームごとに検討し実践した。

例) 「バスケのシュートの成功率を上げるコツは？」 ←これに対してホワイトボードに記入して再挑戦。

③自学自習とスクーリングの循環

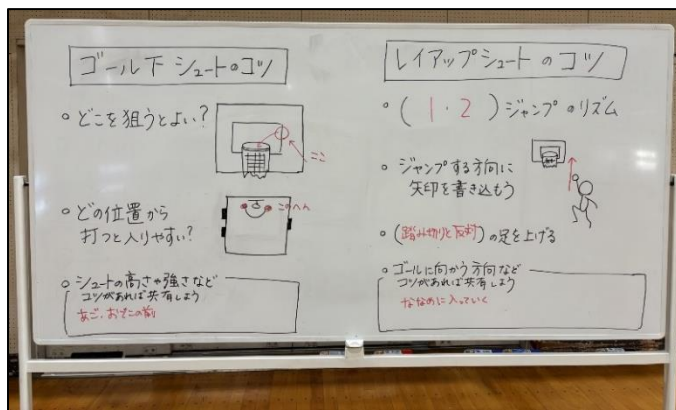
・レポートとスクーリングを往還する学習構造

- 1) レポート内に、スクーリングの活動を起点として思考を深める「問い」を設定 (教員)
- 2) レポートの「問い」を、スクーリングにおける本時の活動目標として位置づけ (教員)
- 3) スクーリング終了時に、活動経験をレポートへどう反映させるかを意識した振り返りの実施 (教員)
- 4) 実体験を通して得た気づきをもとに、レポートの「問い」をブラッシュアップ (生徒)

◆実践結果

協働での課題解決 事例

シュート率を上げるコツ (バスケットボール)




レポート「深める問題」抜粋

※詳細は2次元コードのレポートを参照※

【評価基準】			
	A	B	C
思・判・表	問い①について、観察した運動の動作として良い点と改善点の両方を述べている。 問い② (TRY!!) について、観察した運動をよりよくするための具体的な方法を述べている。	問い①について、観察した運動について自分が感じた良い点が改善点のどちらかを述べている。	問い①について、取り組んでいない。または、観察した運動について自分が感じた良い点が改善点を書けていない。
態	問い①、問い②に取り組む、思・判・表でA評価。	問い①に取り組む、思・判・表でB評価。	問い①に取り組んでいない。

問い①: 自分や周りの人の運動を観察し、「良いところ」と「改善点」を発見 (フ
(1) 誰の運動を観察しましたか? (例: 自分/友人/家族/スポーツ選手など
(



(1) 成果

・安心感の形成による継続的な参加

固定メンバーでの活動により、生徒同士が協力や励ましを経験し、活動の場や他者に慣れることで、安心して参加する様子が見られた。

・体育活動を通じた交友関係の構築

スクーリングを重ねる中で、授業外での談笑・行動を共にする姿が確認された。

・実技経験を踏まえた思考の深化

実技での成功・失敗や気づきをもとに、自己の考えを整理し言語化できる生徒が複数見られた。

今後は、スクーリング時にレポート内容と関連する問いを継続的に提示することが重要だと感じた。

・学習活動への主体的な関与の表れ

単元を通じてグループと活動場所が固定されたことで、スクーリング前にコートや用具を自発的に準備する生徒が現れた。これは講座担当者が着任して以来、初めて確認された変化である。

(2) 令和8年度に向けた課題と展望

・出席変動を前提としたチーム編成の必要性

通信制の特性上、出席が固定されず、技能や人数のバランスが日によって変動する。根本的な解決は難しいため、状況に応じてチーム統合や「1日限定の移籍」など柔軟な再編が必要である。出席変動を前提とした活動設計を検討し、臨機応変な対応を仕組みにする。

・運動技能差への対応と人的支援体制の課題

発達特性により体の使い方に大きな差があり、共通した活動の実施が困難な場合がある。そのような場合には教員が個別支援に入る必要があるが、全体把握が難しくなるため人的資源の確保が課題である。

・スクーリングと自学自習をつなぐ課題設計の改善

これまでは教科書中心のレポート課題であったが、スクーリングで身に付けさせたい資質・能力をレポートに反映し、学びの循環を促す必要がある。そのために次の3点について検討していきたい。

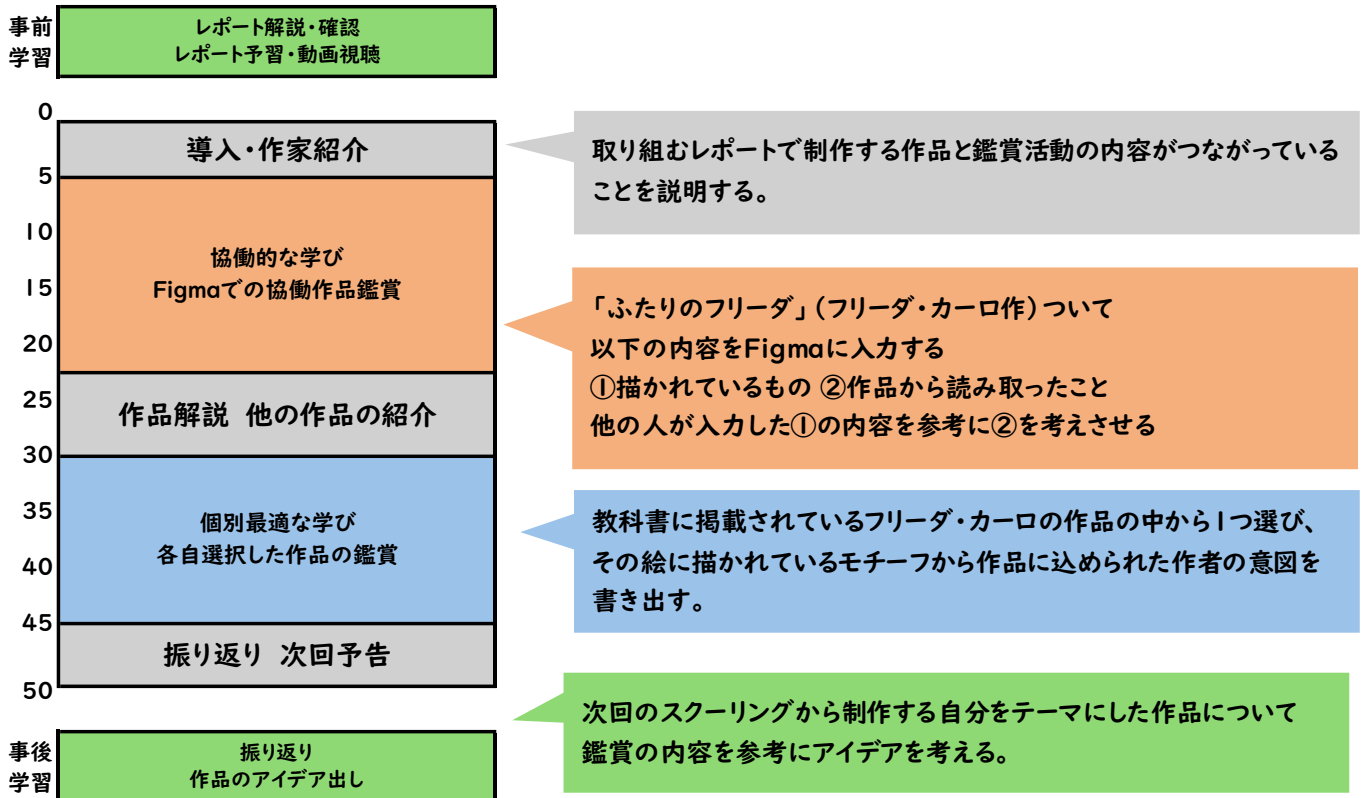
1) 実技で育てたい資質・能力を反映したレポート設計

2) 参加できない生徒への学習補償 (コンテンツ、資料の充実)

3) 事前学習のコンテンツを取り入れた学習効果の向上 (動画を用いたイメージ形成から実践への運動)

◆学習活動全体の組み立て

(1) 概要



(2) ねらい

①個別最適な学び

・選択制の作品鑑賞

教科書に掲載されている作品の中から好きな作品を選び、その作品についてレポートに解答させた。生徒が鑑賞する作品を自分で選ぶという活動を通して主体的な鑑賞活動を促した。また、言語活動が苦手な生徒も、自身にとって言語化しやすい作品を選ぶことで解答へのハードルを下げることを目指した。

②協働的な学び

・Figma を活用した対話型鑑賞

作品から読み取った内容を共有することで、他者の意見や気づきを参考に鑑賞活動を深めることを目的とした。本時ではフリーダ・カーロ「ふたりのフリーダ」についてFigmaを用いて鑑賞した。最初に「描かれているもの」という客観的な事実を入力させ、そののち「作品から読み取ったこと」という個人の意見や感想を入力させた。生徒の入力した付箋を読みあげ、様々な作品の解釈があることを共有した。

③自学自習とスクーリングの循環

・鑑賞活動と作品制作の連携

次回から取り組む作品制作のヒントとなる題材を鑑賞に取りあげ、鑑賞活動の事後学習が次回のスクーリングに役立つように設計した。

◆実践結果



スクリーニング中の様子



生徒が入力した Figma (ぼかしは鑑賞作品)



参考資料：Google Art&Culture
「二人のフリーダ」画像と解説

(1) 成果

・深い鑑賞活動

1つの作品について生徒同士全員で意見共有をすることで、1人で鑑賞した場合に比べて1つの作品から多くの情報を読み取り、作品を深く鑑賞することができた。事前学習において既に鑑賞課題に取り組んでいた生徒も、他の生徒の意見や気づきを参考に自身の解答を修正・改善する姿が見られた。

・作品制作との連動（作品制作に向けての事前学習）

今回取りあげたフリーダ・カーロの鑑賞課題は、「自分を表す作品を作る」という作品制作課題の準備課題でもあった。フリーダ・カーロは自身におきた様々な出来事を作品の題材にしており、彼女の作品のモチーフ選びや表現は生徒の作品制作のヒントになることから鑑賞作品として取りあげた。実際に、生徒は次回以降の作品制作の事前学習として、フリーダ・カーロの作品を見ながら自宅でアイデア出しを行ってきた。

(2) 課題

・付箋に意見を入力できない生徒への対応

Figmaでの協働的な学びにおいて意見が入力しやすいように、アイスブレイクとして簡単な質問を投げかける、教員からこまめな声かけやアドバイスを行う、客観的な事実や発見を入力する、「描いてあるもの」から付箋を入力させる等の工夫を行った。しかし、「作品から読み取ったこと」が入力できない生徒がいた。もともと美術のスクリーニングでは自分の意見を他の生徒に公開するような場面が少ないため、このような活動に対して抵抗感をもつ生徒がいたと思われる。

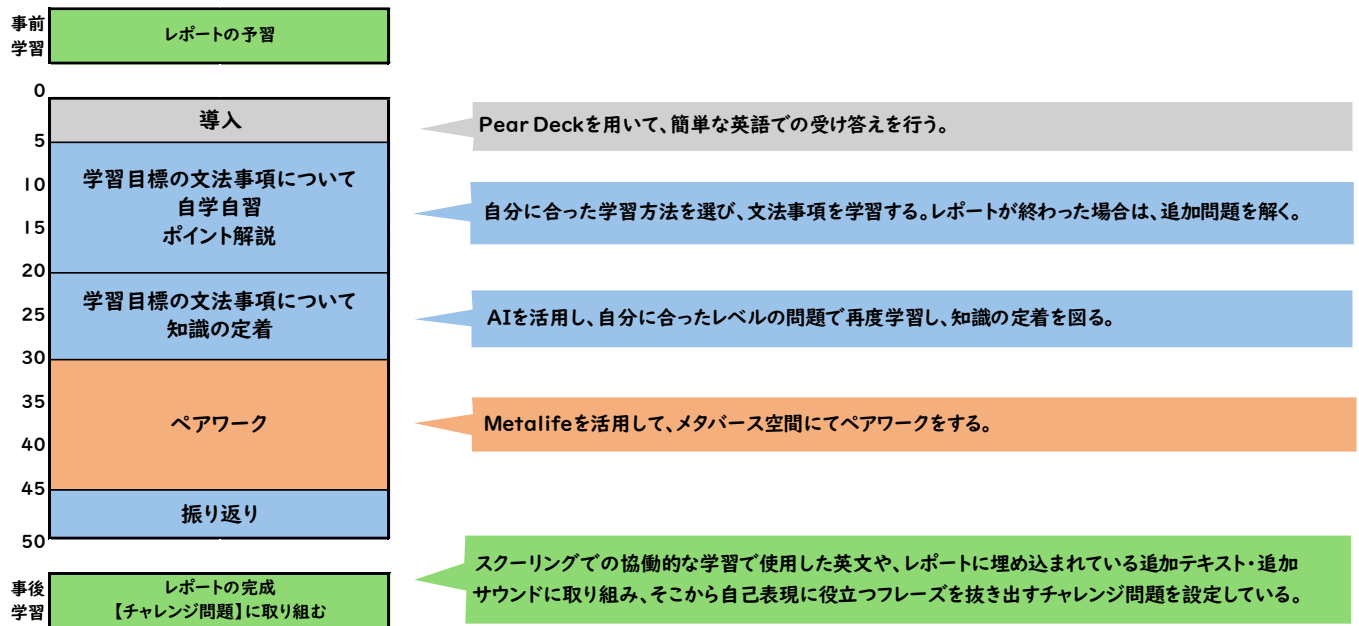
(3) 令和8年度に向けた展望

・協働的な学びの予告と習慣化

美術は作品制作を中心とした教科であるため、Figmaなどを用いた時間を要する協働的な学びは年に数回しか行うことができない。そのため、ほとんどの生徒は協働的な学びがあるとは思わずスクリーニングに参加していた。事前にしっかり告知する、また、鑑賞活動においては必ず協働的な学びを行うようにすることで、生徒の心の準備ができ、事前学習や意見の入力を促すことができると考えられる。令和7年度は上級科目である美術Ⅲでの実施であったため、令和8年度以降は美術Ⅰや美術Ⅱにおいても協働的な学びの習慣をつけ、美術のスクリーニングにおいても他者の視点を取り入れ、表現を深める空気を醸成していきたい。

◆学習活動全体の組み立て

(1) 概要



(2) ねらい

①個別最適な学び

・複線型授業による学習の個別化

文法事項を順序だてて説明をしているスライド、情報がまとまっている教科書、問題を解くためのヒントなどを載せた IT コンテンツ、机間指導をしている教員に聞く、などの学習方法を選べるようにした。通信制高校ということを考慮し、スクーリングに出席しない場合でも学習しレポートを進める方法を学ばせた。

・生成 AI の活用による学習

担当教員が生成 AI の Gemini を用いてゲーミフィケーションの要素を取り入れた Gem を作成し、「Grammar-Duel Master (GDM)」と名付け使用した（右頁の 2 次元コード①）。各生徒が自分の能力に合った難易度を選び、さらに問題への正答率に合わせ難易度が変化するように設定したことによってゲーム感覚で学習できるようにした。また、問題を解くために必要なヒントや、対戦が終わった後に間違えた問題の傾向をまとめるなどの機能を持たせることで、段階的に楽しく学びながら知識を定着させ、学習の振り返りを習慣化させることをねらった。

・学習の自己調整

振り返りを行い、学習方法などについて考えさせることで、次の学習に向けた足がかりとした。

②協働的な学び

・メタバースの活用によるペアワーク

コミュニケーションを取ることが苦手な生徒への配慮、および計画されているオンラインスクーリングにも対応できるようにするため、メタバース（Metalife:右頁の 2 次元コード②）を活用してペアワークを行った。アクティビティを通し目標の文法事項を反復して使うことで学びを深め定着させた。【チャレンジ問題】に取り組む場合は、新たな英文に触れるために追加テキスト・追加サウンドという手段だけでなく、他者の英語表現に触れるためにスクーリング中に使用した英文を選択できるようにした。

◆実践結果


レポート11[4][5]目標

○名詞を後ろから説明する分詞を用いた文の形・意味・用法を理解して使うことができる


POINT

①形とルールを覚える ②2つの意味を覚える

自分にあった学習の方法を選んで学ぼう



- ・スライドを見ながら解く
- ・教科書を見ながら解く
- ・ITコンテンツの資料を見ながら解く
- ・辞書を使う → [Weblio](#)



+わからないところは聞く、このスライドの梨にメモする
→早く終わった人は追加問題を解きましょう

Students, write your response! Please Deck Interactive Slide Do not remove this bar

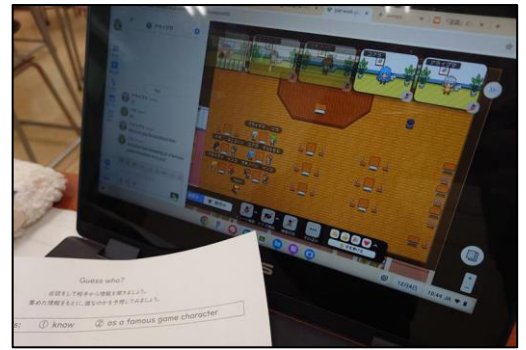
学習方法の選択肢スライド



① Gemini(GDM)



② Metalife



メタバース活用によるペアワーク

(1) 成果

・学習者自身に適合する学習方法の習得

令和6年度までは、全体に向けて文法説明→レポート解答→解答確認という流れで行っていた。大人数に向けた説明を聞くことが苦手な生徒や英語が得意な生徒に対しての効果が薄いと感じ、それぞれの理解度や学習速度に応じて学習できるような仕組みにした。このことで、スクーリング中にわからずに手が止まるということが少なくなり、一つ目の方法でわからなければ次の方法で学ぶという積極的な態度が見られた。また、文法の仕組みや成り立ちから学びたい生徒はスライド、ある程度まとまった状態の情報が見たい生徒は教科書、などそれぞれの教材のメリットを伝えることで学習方法の選び方について学ばせた。さらに、振り返りによってより適切な教材の選択を促した。これらの実践を通し、自学自習でレポートに取り組むことができるようになった。

・段階的に楽しく学ぶ習慣の形成

生成 AI に「GDM」としての人格を持たせヒットポイントを設定することで、文法問題を用いて戦いながら楽しみつつ学ぶことをねらいとした。また Gem を Google Classroom に残すことで、自分のペースに合わせて事後学習ができるようにした。英語をさらに学びたい生徒に向け自分で文法事項を設定できるものを用意した。生徒からは「自分のペースで学習ができた」「AI が相手なので間違いを気にせず挑戦することができた」「レポートより難しい問題に挑戦することができて勉強になった」などの感想があり、ねらいがある程度達成できたと言える。

・段階的なコミュニケーションスキルの醸成

メタバースを使用することで、生徒たちは実際に顔を合わせて喋ることなくペアワークを行った。ペアワークの内容と自体は難しいものでなくとも、ペアワークをさせること自体が難しいとされていた本校生徒に合わせてこの方法を展開した。人と関わりたいという想いを持つが実際に喋ることが苦手という生徒の中には、「他の生徒と交流することができて嬉しかった」という感想を持った生徒もいた。そのような生徒に対しては一定の効果がある方法である。

(2) 課題と次年度に向けた展望

・生成 AI の適切な使用の指導

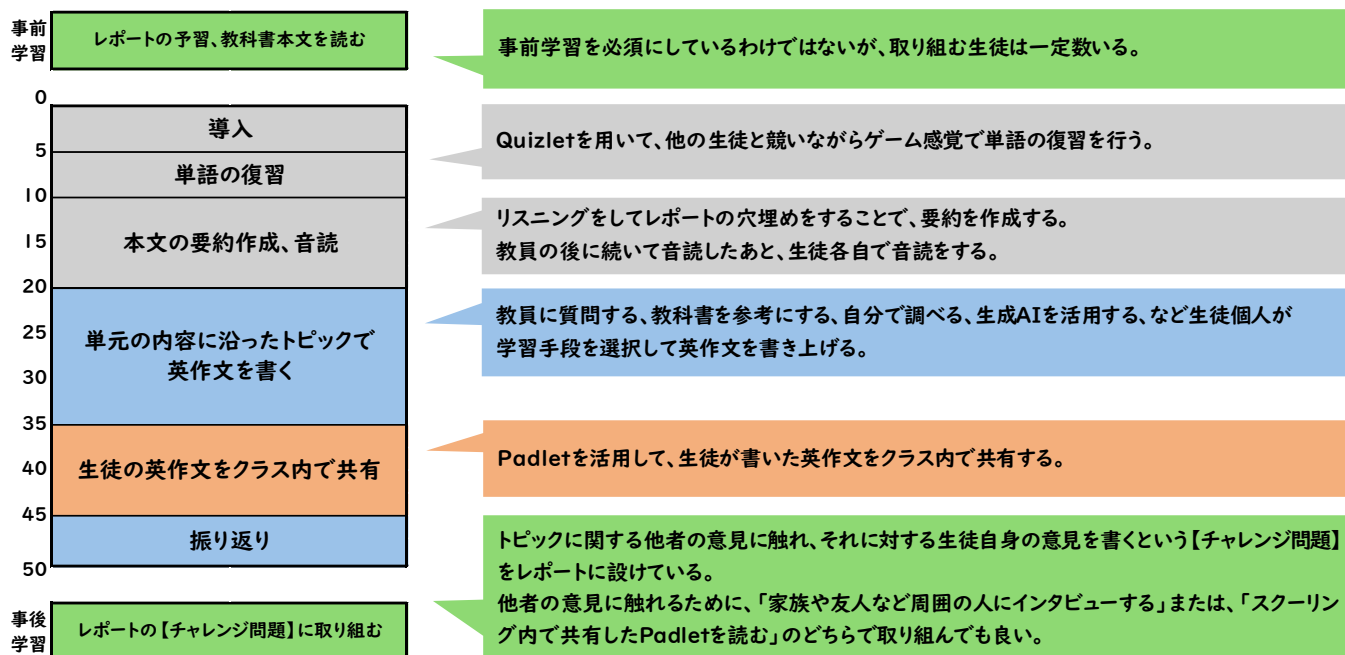
スクーリングの様々な場面で生成 AI を使用させ、継続的にスクーリングに出席している生徒には生成 AI の危険性やハルシネーションについて時間をかけて指導をすることができた。しかし、断続的に出席し生成 AI が使えるということだけを学んでしまった生徒は、英作文で単純に翻訳機能として使っている場面が見受けられた。生成 AI の使用自体は悪ではないと考えているが、対話を重ねて自分の言いたいことを英文にしていこうなどメリットを生かした適切な使用方法について指導していく。

・メタバースから対面でのペアワークへの移行

メタバースでのペアワークや生成 AI との音声対話などを行うことで対面でのペアワークへの足場掛けになると考えていたが、実現には至らなかった。アイスブレイクなども取り入れつつ、実現していく。

◆学習活動全体の組み立て

(1) 概要



(2) ねらい

①個別最適な学び

・学習手段の選択

教科書の本文を読解して内容を理解するスクーリングを実施した後に、単元の内容に沿ったトピックについて生徒一人ひとりが意見等を書く活動を行った。英作文を書く際は、教員に質問する、教科書を参考にする、インターネットで調べる、生成AIを活用する、など生徒自身が学習手段を選択できるようにした。また、単元の内容に沿ったトピックの範囲内であれば、書く内容は生徒自身が自由に選択できるようにした。学習手段と記述内容を選択できるようにしたことで、生徒が主体的に学習することをねらいとした。

②協働的な学び

・他者の意見に触れる学び

Padletを活用して、生徒が書いた英作文を教室内で共有する活動（右頁参照）を行った。また、意見共有だけで終わらずに、他者の意見に対してさらに生徒自身の意見を書くという【チャレンジ問題】（右頁参照）を令和7年度のレポートに設けた。事後学習としてこの課題に取り組むかどうかは生徒自身が選択することができ、取り組む際には「家族や友人など周囲の人にインタビューする」または「スクーリング内で共有したPadletを読む」などの手段も選択できるようにした。他者の意見や考え、また、様々な英語の表現に触れることで、学びを深めることをねらいとした。

③自学自習とスクーリングの循環

・学習目的の明確化

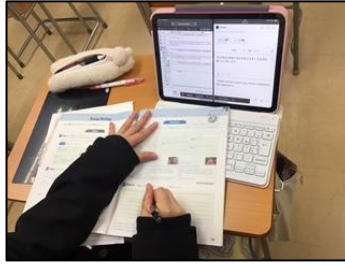
事前学習では、新出単語の確認や調べ学習、課題の仕上げなど、生徒が1人で取り組むことができる学習を促した。一方、スクーリングと事後学習では、意見の共有など他者との関わりを通して学ぶ学習を重視した。このような学習の目的を生徒にも明示することで、自学自習とスクーリングの循環を目指した。

◆実践結果

スクーリングの様子



英作文を書くときの様子



詳細は以下の2次元コードを読み取る



Padlet を活用した意見共有



【チャレンジ問題】と生徒の解答

(1) 成果

・主体的な学習姿勢の定着

生徒が学習手段や記述内容を選択できるようにしたことで、英作文の課題に主体的に取り組む様子が見られた。事前学習として英作文を書いてくる生徒や、スクーリング内の決められた時間内でできる限り集中して取り組む生徒、事後学習でさらに完成度を高める生徒など、様々な取り組み方が見られた。

・意見共有による学びの深化

「自習を促すアンケート」の「本日のスクーリングでは具体的にどのような学びがあったか」という質問に対して、「自分では思いつかなかった反対意見をもらえてとても勉強になった」「色々な意見を聞くと自分に無い考えや視点があり、良い発見だった」といった感想が寄せられた。これらの記述から、Padlet を用いた意見共有によって他者との考えの違いに気付いたり様々な英語表現に触れたりしながら、学びを深める様子を確認することができた。また、生徒同士の直接的な対話を目指すことに越したことはないが、高度な英語を用いて自分自身の考えを表現する場合は必ずしも直接的な対話による意見共有ではなく、ICT を活用した方が生徒も落ち着いて考えをまとめることができた。

・自学自習への取組

「自習を促すアンケート」の「予習をしたか」という質問に対して、「レポートの確認」や「レポートの作成に取り組む」と答えた生徒が平均 6 割以上おり、事前学習がある程度定着していることが確認できた。また、事後学習として「自学自習で何をするか」という質問に対して、「出来なかった問題に再チャレンジする」と答えた生徒が平均約 6 割と最も多く、学習の補完に取り組む様子が伺えた。

(2) 令和 8 年度に向けた課題と展望

・適切な学習支援の必要性

学習手段の選択肢を複数提示しても十分に活用できない生徒がいたり、生成 AI や翻訳サイトに示された生徒の理解を超えた英語表現をそのまま書き写したりする様子も見られた。生徒の理解度や習熟度は様々なので、学習手段の選択肢を示すだけでなく生成 AI や翻訳サイトの適切な活用例を提示し、「英語を理解したうえで書く」という姿勢を育てたい。

・意見共有だけで終わらせない工夫

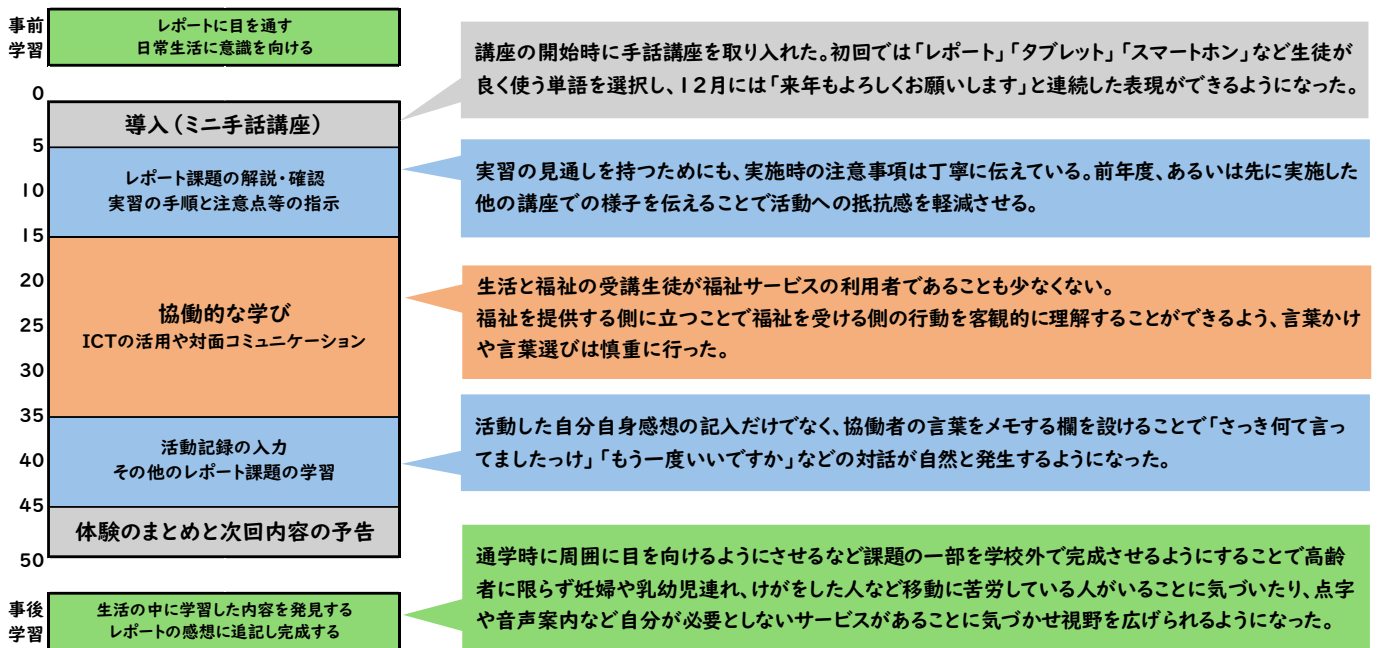
スクーリング時の Padlet を活用した意見の共有には多くの生徒が積極的に参加したものの、事後学習としてレポートの【チャレンジ問題】に取り組む生徒は半数ほどだった。他者の意見をふまえてさらに自分の意見を書く段階まで到達しない生徒が約半数いることになり、協働的な学びの質にばらつきがあると感じた。令和 8 年度は、意見共有だけでなく、共有した他者の意見に生徒自身がコメントをする時間をスクーリング時に少しでも設けるなど、協働的な学びを段階的に強化していく。

・取組状況の可視化

「自習を促すアンケート」では自学自習への生徒の意欲は感じられたものの、実際に行ったのかどうかはわからなかった。令和 8 年度は、事前学習と事後学習の取組状況を可視化する仕組みを検討していく。

◆学習活動全体の組み立て

(1) 概要



(2) ねらい

①個別最適な学び

- ・各自の生活体験における福祉的なつながりをもとに調査・考察に取り組む。
- ・スクーリング中は実習への興味関心、家庭学習ができる環境の有無に応じて個別学習時間を確保できるようにする。

②協働的な学び

- ・高齢者の移動や生活全般の支援、視覚特性の違いによる行動上の不安など、当事者と支援者の双方の体験を行うことで自分の役割が他者の視点からどのように見えるのか体感させ、理解を促した。
- ・スクーリング教室に実習用品を常備し、スクーリング以外の時間（レポート完成講座、空き時間、放課後等）にも実習も可能とした。その際は2名以上で活動できるよう調整し、生徒同士の体験を促した。
- ・廊下に学習内容に関連する掲示物を配置し、待ち時間や教室へ立ち寄った際に課題へ参加できるようにすることで、時間差のある協働的な学びを試みた。

③自学自習とスクーリングの循環

- ・日常生活や通学路にある支援やサポート（福祉）と学習内容を隣接させ、自分の経験が生かせるようにした。
- ・学習した内容が日常生活の中でどのように活用されているか気づくことができるよう、スクーリングの終わりに補足説明を行った。

◆実践結果



クロックポジションで指示を出す体験



身近な道具でケリーパット作り



磁石を使用した点字学習

(1) 成果

・レポート提出のタイミング変化と学習時間の確保

令和7年度からスタートしたレポート課題のオンライン化に関わらず、提出のタイミングは登校時やスクーリング終了後に集中した。生徒へのアンケートにおいて「家庭学習をしない」と回答する生徒が見られることから、自学自習の意欲を維持することの困難さが判明した。そのため、スクーリング時間内にレポートに取り組む時間を確保することの必要性が再確認された。また、同アンケートの回答からは知識の定着を中心とするスクーリングへの期待の高さとともに、学校外で学習することへの心理的負担感が読み取れた。

・生徒間の関係性および対人活動の変容

本年度は他教科・科目でも対面でのコミュニケーション活動が行われ、生徒会の有志活動等も活性化していたため、活動の開始は大変順調であった。単科での実践では生徒の教科への興味・関心もあり継続は難しかったと思われるが、他教科での活動を楽しんでいる生徒がアーリーアダプターとなり、消極的な生徒も様子を見ながらおずおずと立ち上がる様子が確認された。回を重ねるごとに相互の応対が円滑になり、実習が早く終わった生徒が指導者役となるリトルティーチャーのような姿も見られた。失敗を共に笑い合ったり、体験後に挨拶を交わすようになったりするなど、対人関係における肯定的な変化には大きな衝撃と手ごたえを感じた。

・廊下掲示物の活用

廊下の掲示物が時々置き換わる様子から、時間差があっても生徒が学習に参加している事実が確認できた。例えば、点字の磁石掲示では、生徒が点字表を見ながら「あいうえお」「しゅーゆーかん」といった言葉を実際につくった跡が見られ、遊び心を持ちながら実践に取り組んでいる様子がうかがえた。

(2) 課題

・レポート完成に向けた多角的な支援

基礎的な内容であっても、入力操作や該当箇所探索に苦慮するなど、生徒の抱える課題は多岐にわたる。必要な時間さえあれば到達可能な生徒も多いため、限られた時間内で状況を把握し、活動時間を調整する教員の采配が重要となる。

・人間関係の構築と継続的な観察

協働的な学びが直ちに安定した人間関係の構築に結びつくわけではない。特に「仲良くなったような気がする雰囲気」で終了したスクーリングの後は注意が必要である。活動後の孤独感や、逆に極端に近い距離感を持つ生徒がいないか、校内巡回等を通じて常に観察し、丁寧な言葉かけを継続していく必要がある。

(3) 令和8年度に向けた展望

特別支援教育の視点や特性理解を深めるため、校内研修や教科会等を通じて教員の資質・能力のさらなる向上を目指す。

○2班 多様な背景を有する生徒への校内指導・支援体制の改善・普及

(横浜修悠館高校の学びのコミュニティプログラムの検証・改善・普及)

Ⅰ 全体概要

本校は令和5年度までの16年間の研究事業で、多様な背景の生徒を支援するため、外部の教育的人材を活用した「学びのコミュニティ」を形成し、文科5期でその成果の検証と課題の設定、効果的な運営方法についての研究を行った。

・トライ教室	学び直し、補習
・悠ルーム	カームダウン・クールダウンスペース ※令和6年度より
・Hanataba Cafe	校内居場所カフェ ※令和7年度より
・架け橋教室	外国につながるのがある生徒への学習支援、生活支援
・キャリア・ポート	高校における通級指導教室（自校通級、他校通級）
・キャリア活動C	進路体験活動

研究にあたって

多様な背景を持つ生徒に対して構築した上記の「学びのコミュニティ」をはじめとする、校内の支援・指導体制をさらに充実、改善することを主な研究目的とする。不登校経験のある生徒を数多く受け入れている本校において、生徒が社会的自立のために必要な資質や能力を身に付けていくことができる支援体制の整備は、開校以来のテーマである。

1年目の令和6年度には下記の学校生活アンケート（以下、「生活アンケート」と表記する）を、検討委員の助言・指導のもと、2班員で作成し初めて実施した。

2年目の令和7年度には、以前からの支援体制をさらに充実させるという大目標のもと、在籍する生徒が抱える多様な背景や状況をふまえた「具体的な」本校の学びのコミュニティ等のプログラムの検証・改善・普及に着手した。

「生活アンケート」の定点観測的实施によって、上記の6つのコミュニティにつながっている生徒の様子のみならず、実活動生の全体像とその実態の把握に努めた。生活アンケートの概要は本報告書の終盤に掲載した。

2班の研究は、①学びのコミュニティにすでにつながっている生徒の学校満足度や充実度がどのようなものかを明らかにすること、②学びのコミュニティにつながっていないが潜在的なニーズのある生徒が活動生のなかにもどの程度いるのかを探ること。加えての努力目標として、③そういった生徒がどのような状況にあり、どのようなアプローチが可能かを検証することである。

①については、1年目同様にまとめている。②についても、生活アンケートから読み取れることに言及する。③についてはこの2年間の記録の一部を掲載する。2年間の成果と課題をまとめて、3年目につなげる所存である。

学校生活アンケート（生活アンケート、2年目）について

- ・調査テーマ 本校生徒の学校満足度や学校生活充実度、その他の学習や対人の不安等の意識と実態の把握
- ・調査時期 令和7年10月5日～10月12日
- ・調査方法 「履修ガイダンス（※2）」時にアンケート（Google Forms）上で入力
- ・調査対象 活動生（令和8年3月卒業予定者および令和7年10月1日付転編入学者を除く）約1300名
- ・調査項目 学習面のつまずきに関する質問（先生に学習上の困ったことを言える、スクーリングが自分の学習ペースに合っている等）、学校生活に関する質問（学校で楽しく過ごしている、人間関係のストレスがある等）、入学満足度等。
- ・特記事項 回答数630名。質問のうち、学習に関する質問（14点満点）と対人に関する質問（14点満点）を集計。支援が必要な生徒を各「6点以下」とした。その結果、学習面で支援が必要な生徒は70名（約11%）、対人面で支援が必要な生徒は47名（約7.5%）であった（両方に入る生徒は4.3%）。

※2 履修ガイダンス…令和8年度の履修科目を生徒が考えるための指導時間のこと

2 各コミュニティの概要、令和7年度の実践と今後の課題等

トライ教室

(1) 概要

トライ教室は、レポート作成に取り組む生徒のうち、スクーリングの時間内や、職員作成の動画コンテンツだけでは思うように学習を進めることが難しい生徒、または義務教育段階の学習の学びなおしを必要とする生徒の「個別最適な学習」を支援するための、本校独自の支援体制である。

スクーリングがある週の月・水・木曜日の週3回、放課後相当の5・6校時の2時間開室する。トライ教室では本校職員に加えて、YSK サポーターと呼ばれる教員経験者を中心とするボランティアが指導に携わっている。

令和6年度の実践として、「初めての場所へ入ることに抵抗がある」「一人で行くのは怖い」等、利用する前の段階でトライ教室に入りにくいという生徒へ向けたトライ教室ツアーや、令和7年度からのレポートのオンライン化に伴い、ICT機器の操作に精通する大学生のYSK サポーターの参加を大学ゼミと連携して行った。また、令和7年2月に実施した生活アンケートに基づいてトライ教室での支援が必要と見られる生徒を抽出し、令和7年度4月からトライ教室へとつなげる準備をした。

令和7年度は、令和6年度の実践状況や生活アンケートの結果から新たな取組を拡充した。また、それらの取組によって、支援が必要だと思われる生徒がトライ教室を利用し始めたか否か、そしてその生徒も含めた利用生徒の目標達成度やレポートへの取組具合を振り返りアンケート（以下：振り返りアンケート）で評価した。12月には、新たな取組を始めたことによる効果をYSK サポーターの意見をアンケートで聞き取った。



トライ教室の普段の様子

(2) 令和7年度の実践

① ゾーニングと意志表示カードの導入

・実施に至る経緯

トライ教室は、レポートの提出締切日が近い7月・12月に特に多くの生徒が利用する。しかし、令和6年度、ある生徒がトライ教室に来室し着席したことを当番中の教員が気づけず対応ができない事例があり、生徒が孤立するという課題が表出した。トライ教室は基本的に1対1での指導を行うが、生徒が自力でレポートを進めている時間もあるため、支援が必要なタイミングを教員も判断しづらいときがある。そこで令和7年度からは、令和5年度にYSK サポーターから要望のあった、教科ごとに座席を分けるゾーニングと太陽の面で「誰かの指導を受けたい」、月の面で「今は自分でレポートに取り組む」ことを周りに示すことができる意志表示カードの導入を行った。



教科の場所を指定するゾーニングを行った。



両面刷りにして、簡単に意思表示をできるようにした。

・成果と課題

教員としては、入口で生徒を受け入れる際、ゾーニングすることで生徒に着席する座席を指定しやすくなり、生徒が来室して着席したことに気づかないということを防げた。また、生徒は来室回数が増えるにつれて、徐々にどこに行けば良いかを学び、途中で移動することもできていた。移動するという動作で一度リフレッシュし、次の科目に頭を切り替えることができていたように感じられる様子も見受けられた。YSK サポーターからは、ゾーニングに関して賛否両論があった。効果を感じたという教員からは、「生徒が増えても、同じ科目に取り組む生徒が同じ長机にいると教えやすい」等の意見があり、効果が感じられないという意見の中で最も多かったのは、「入口で生徒とサポーターをマッチングさせ、個別対応しているので場所を分ける必要が無いのではないか」というものだった。ただ、後述するがトライ教室を利用する生徒の取り組みたいレポートには偏りがある。レポートの提出締め切り間際など YSK サポーターの数に対して生徒数が大幅に多い繁忙期では、一人で複数人を指導する場面が多いため、ゾーニングによる効果が高かったと言える。

意思表示カードについては、あまり活用が進まなかった。基本的に、生徒はわからないレポートを YSK サポーターとともに取り組むために来ており、裏面（今は自分でレポートに取り組む）を示す生徒がほとんどいなかったからである。ただ、少数ながらも裏面を向けた生徒については、教員が当番を交代してもその生徒がどういう状態であるか一目でわかるので引き継ぎがスムーズに行えた。

②生活アンケートを活用した「プッシュ型支援」の開始

・実施に至る経緯

令和6年度にはトライ教室に担当グループ教員が引率する「トライ教室ツアー」等を行い、生徒の利用率が上昇した。令和7年度はさらに一歩進め、教員側から生徒をトライ教室へとより積極的につなげようと試みた。これまでも担任教員や教科担当者は生徒への声かけを行ってきたが、生活アンケートを活用して今まで見えてこなかった生徒の困り感を可視化できれば、より積極的な言葉かけを行えると考えた。生活アンケートの結果からその生徒に必要なと考えられるサポートを一覧化し、「プッシュ型支援シート」として担任教員に配付した。なお、トライ教室が必要と認定した生徒は「今までにトライ教室を利用していない」と回答しながらも、「学習のつまずき」を感じていると答えた生徒である。

・成果と課題

通信制であるため接触回数が少なく状況把握が困難だった生徒が、生活アンケートにより支援につながる事例も見られた。プッシュ型支援シートは校内の研修会で活用し、担任教員間の生徒への支援策を共有したことで、令和7年度新着任の担任教員から「対人関係に不安がある生徒がクラスにいと事前に聞いていたので話しかけ方などに迷っていたが、積極的にサポートしていこうと思った」という声もあった。

また、生活アンケートから「学校には来ているが学習が進んでいない生徒」を複数人ピックアップし担任教員を集め対象生徒への支援方策とその結果を記録してもらった。その中の支援策の一つとして、トライ教室につなげるという手段を設けた。担任教員が1回目声をかけた時は、生徒本人があまり学習に困り感を抱えておらず反応がなかったが、レポート提出締め切りの間近で声をかけると反応が違った。そこで、担任教員がトライ教室の日程を案内するだけでなく、日時を決め一緒にトライ教室まで連れていくことで学習が進んでいった例も見られた。各生徒によって支援につながりたいという気持ちが出るタイミングは違うと考えられるので、担任教員や教科担当者による継続的な声かけは大切であることが再確認できた。このような担任教員によるトライへの繋ぎ方が効果的だった事例を蓄積でき、生活アンケートの回答等をきっかけとしたトライ教室を促す方法を担任間で共有できれば、更なる成果があがりうる。

課題として、そもそも生活アンケートに回答する生徒は在校生のうち、活動生のさらに半分程度であるということがある。YSK サポーターからも、「生活アンケートに答えられない、うまく意思表示ができない生徒の中にもトライ教室が必要な生徒がいるはずだ」という意見があった。

今後の展望として、活動生の生活アンケートの回答率の増加を図り、活動生の状況をより適切に掴みたい。その上で、学習上の支援の必要のある生徒がさらにトライ教室に繋がっていくために、プッシュ型支援シートを改良したりその活用法をさらに検討したりして、担任教員がさらに生徒の声などをしっかり拾える仕組みにしたい。

③トライ教室での振り返りアンケート

・実施に至る経緯

これまでの研究では、利用回数や生徒の満足度にフォーカスをした振り返りを行っていた。令和7年度は、トライ教室があることでレポートの取組状況にどのくらい成果を出しているかを、振り返りアンケートを新たに作成して見取ろうと試みた。

・経過

振り返りアンケートの項目は、以下の通りである。

- 1【はじめに】 今日のはじめの目的は何ですか。※複数選択可
- 2【はじめに】 今日トライ教室で取り組もうと思っているレポートを選びましょう。※複数選択可
- 3【終わりに】 目的は達成されましたか？
- 4【終わりに】 今日は何通のレポートに取り組めましたか？※レポート以外に取り組んだ人はその他を選んでください。

項目を【はじめに】と【終わりに】を分けたのは、生徒の来室時に今日の目的、取り組む予定のレポートを答えさせることで計画を立てて学習する練習になると考えたからである。退室時には自分の立てた目標が達成されたか、レポートに何通取り組めたかを答えてもらうことで、具体的にトライ教室の効果を定量的に測定することを目的とした。

・成果と課題

生徒の振り返りアンケートの回答について、項目1の「利用目的」を聞く質問（複数選択可）への回答（次頁の表1）は、「レポートに取り組む」ことだとする生徒が97.2%と最も多い。次いで各科目・各レポートの随所に組み込まれた、本校独自の探究的な問いかけである「深める問題に取り組む」生徒が17.3%、少ないながらも「これまでの学び直しをしに来た」が1.8%であった。ほか、少数ながらも多様な利用目的があることがわかった。

項目2の「取り組みたい科目」の回答（複数選択可、次頁の表2）では、数学Iが30.4%と高い割合を占めており、次いで地理総合14.8%、歴史総合12.7%、言語文化10.2%、公共9.5%と多い。計算が必要なレポートや、深める問題において自由記述で自分の意見を記述する問題がある科目の割合が高くなっている。このように来室する生徒の目的の科目に偏りがあることは、前述のゾーニングを継続して行うべき理由の1つである。一方で家庭基礎・保健は、必履修科目であり履修者の生徒数も多いはずだが来室人数は少ない。どちらのレポートも自由記述課題はあれども、両科目とも自分の身の回りの話題が多くイメージしやすいという共通点がある。必履修科目ではない上位科目は、トライ教室の開室時間帯に一部重なっているレポート完成講座（各教科の教員が当番で対応する自習時間及びその教室のこと。レポートに関する質問ができる）への案内を優先しているためか割合は少ない。

レポートに取り組むことを目的として来た生徒が、1回の来室当たりで取り組んだレポートの通数は、1通が41.7%、2通が30%、3通以上が22%と、平均して1.9通のレポートに取り組んでいた（表3）。来室時に生徒自身が立てた目標は91.2%と高い割合で達成されていた（表4）。このことから、学習の進みが遅い生徒や特性のある生徒であっても、トライ教室で丁寧な指導を受けることでレポートに順調に取り組んでいることが裏付けられた。また、自己の学力を認識し学習計画を立てる練習の場としても機能したと言える。レポートに取り組む場所としての役割だけではなくYSKサポーターと安心して話をできること自体が目的になっている生徒がいるなど、学びなおしも含めた多様な目的でトライ教室へ来校する生徒がいることが、分散した数値からも見て取れる。

表1

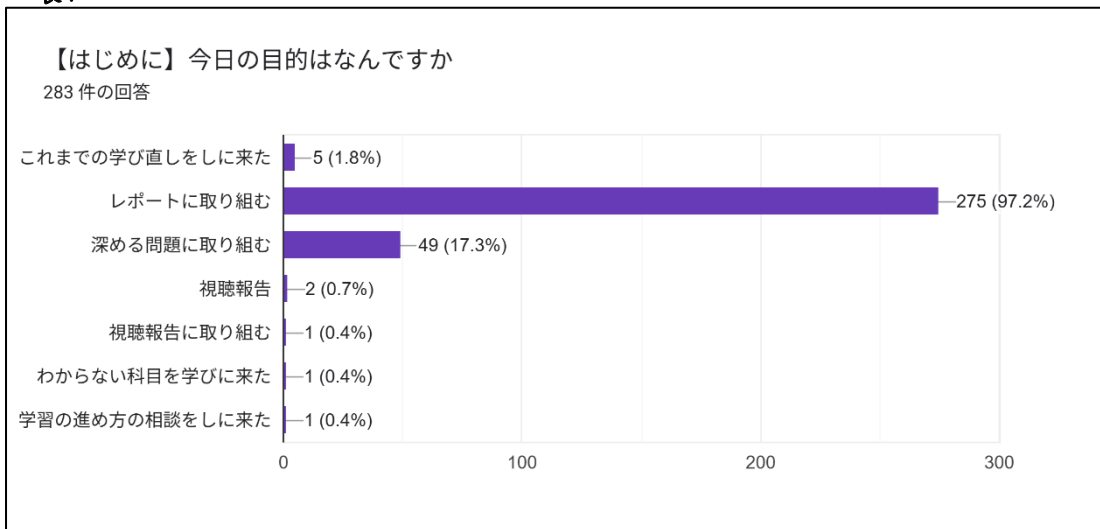


表2 (アンケート結果の抜粋)

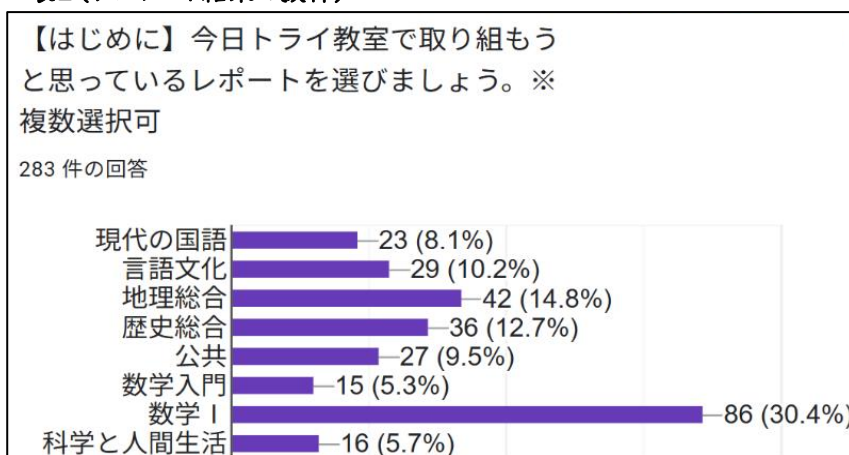


表3

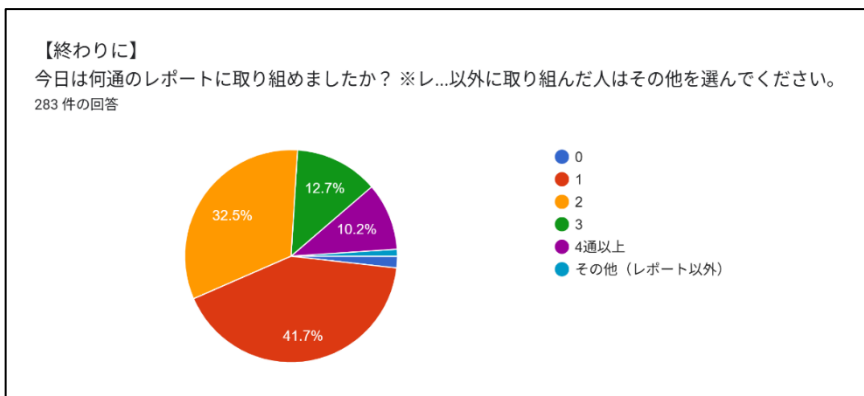
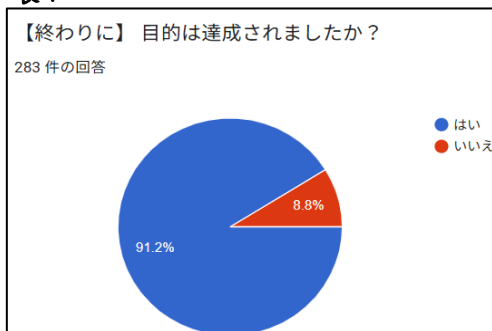


表4



(3) トライ教室の効果と役割

トライ教室に来室する生徒たちは、学力的な理由でレポートの進みが遅れがちな生徒や、特性があり学習することに何らかの困難を抱えている生徒が多い。しかし、前述の振り返りアンケートの通り、生徒はレポートに関してはじめに立てた目標を9割以上の生徒が達成し、着実な学習進展が見られた。集団での学びでは難しい生徒にとっては、このような個別指導を受けられる環境が有効な支援となっていることがわかる。

トライ教室の根幹を担うYSKサポーターに、特に継続して関わった生徒の成長について尋ねた回答の内容を一部紹介する。

(原文ママ)

- ・最初はすべて受け身の姿勢であったが現在は自己表現も多様となり、学習を楽しみ積極的に取り組む様子が見られるようになった。
- ・とにかく自己評価が低いことが問題であったが、様々な声かけと背中を押すことで学習はもちろん自信を持って、学校生活全体を充実して過ごすようになった。
- ・継続してくる習慣がつきレポートを完成できないと思っていた生徒が完成できた。
- ・紙に書くと、自分なりに考えて修正しながら答えている。

アンケートの数字に加えて、長時間、直に生徒の指導にあたっているYSKサポーターの言葉からも生徒の成長が伝わった。生徒の中には、大人とのコミュニケーションを取ることができなかった、後述するキャリア・ポートを履修中の生徒もいた。キャリア・ポートだけではなく、トライ教室で一对一の指導を受けることは学校への心理的安全性が高める一因になっていると思われ、コミュニケーション面で大きな成長にもつながっていると考えている。

トライ教室は、本校の生徒を支援し、学習面のみならず必要な場所である。学校の教員だけでは不十分であり、YSKサポーターの力は大きく、連携は大事なことである。

トライ教室の校内での需要は依然と高く、5月：75名、6月：124名、7月：143名、10月：49名（開室日数が少ない）、11月：137名、12月：223名と、特にレポートの締め切り間際になるとその需要はさらに上がる。令和7年度は生徒のレポートの状況も踏まえ、本来、年末は12月15日までの開室予定だったのを、17日・18日・22日と3日間増やして開室した。年間を通して平均15名程度の来室であったが、増設した3日間は22名・26名・34名といずれの日も多くの生徒が来室した。担当者として年間の開室予定について令和7年度の参考に令和8年度も検討していきたい。

(4) 令和8年度への展望

生徒のニーズや教員・YSKサポーターの負担も踏まえて、ゾーニングを継続したい。また、多くの教職員にプッシュ型支援シートを効率よく活用してもらうために、生徒の状況をより分かりやすく可視化する変更を加えたい。

(5) トライ教室利用者の令和7年度の生活アンケート結果について

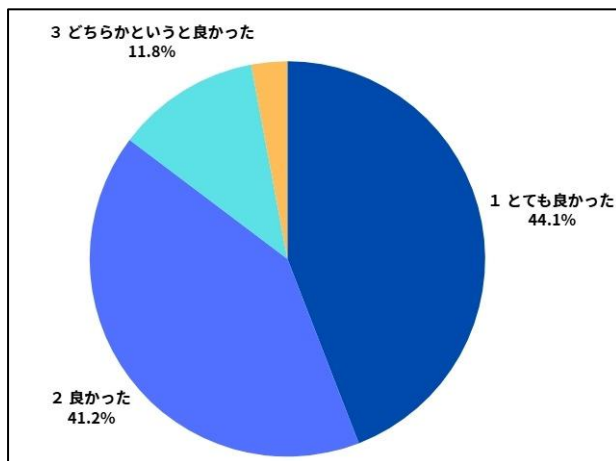
- ・630名のうち、34名(5.4%)が利用していると回答。(実際の利用生徒であることは確認済)
- ・利用者の内33名(97.1%)が「問2 横浜修悠館高校に入学して良かったと思いますか」という質問に対して「良かった」と回答(左側の円グラフ)。トライ教室利用者の入学満足度は非常に高いといえる。

【内訳: ①とても良かった 15件、②良かった 14件、③どちらかという良かった 4件】

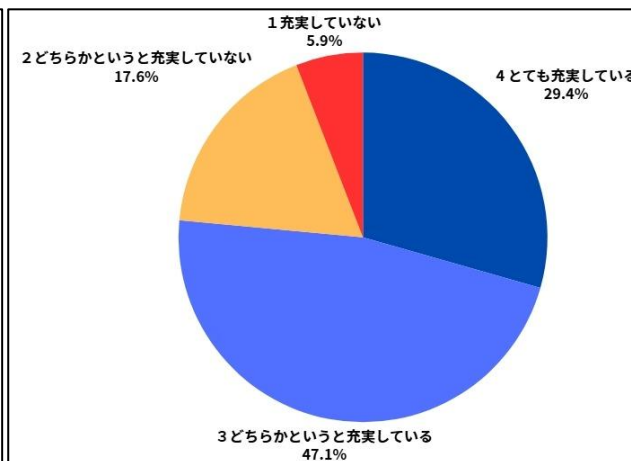
- ・利用者の内、26名(76.5%)が「問10 横浜修悠館高校に入学し、学校生活は充実しているか」という質問に対して、「充実している」と回答(右側の円グラフ)。入学満足度と比べて充実度は7名分下がり、かつ、全体630名のときの78.6%と比べてもやや下回っており、充実していないと答えた生徒の割合の増加がみられた。

[まとめ]

- ・この結果からトライ教室につながっている生徒の入学満足度は高く、学習が進んでいること＝入学満足度に直結していることが分かる一方で、それが学校生活の充実度とイコールの関係ではないことがわかった。
- ・利用者満足度について令和7年度も高い数値であるため、2班は次の目標を掲げている。
 - ①令和8年度も、既知の利用者生徒の生活アンケート等の高水準な数値をキープしていくこと。
 - ②令和8年度新入生を含めて、新規利用者の利用者満足度の高水準な数値をキープしていくこと。



問2 入学満足度を聞く質問 (6件法)



問10 学校生活の充実度を聞く質問 (4件法)

悠ルーム

(1) プログラムの概要

悠ルームとは、横浜修悠館高校内に設置されたカームダウン・クールダウンを目的とするスペースである。パニックを起こした生徒が落ち着く場所であるほか、スクーリング出席に疲れたり本校一階の公共空間であるラウンジで過ごすことに抵抗を感じる生徒が利用する、静かな場所であることが主目的である。平日の午前中は YSK サポーターが受付として常駐し、入退室の管理を行う。

令和6年度の報告では、生徒の協力により内装を大幅にリニューアルしたこと、GROOVE X 社が開発したコミュニケーションロボットである LOVOT を導入したことを記載した。

(2) 令和7年度の取組

令和6年度の課題は「悠ルームの利用生徒の利用目的を把握すること」、そのなかで「本来の目的である、静かな空間として利用されているか」を探ることであった。その調査を含め、令和7年度は以下の3点に取り組んだ。

①悠ルームの周知

場所、用途、LOVOT (AIロボット) がある旨を記載した教室掲示物を作成し、新入生も含めた生徒に改めて周知した。

②悠ルームプロジェクションマッピングコンテスト

悠ルームで生徒が取り組める新たなイベントを企画した。令和6年度生徒が描いた「鯨」の絵の周りに海の生き物を泳がせるプロジェクションマッピングの作品提出の募集を呼びかけた。令和7年7月に周知し、意欲のある生徒が夏季休業期間に制作することを想定し10月を提出締め切りとした。

③来場者の利用分析

令和6年度まで集計していなかった来室目的を入室の際に調査した。

(3) 成果

①悠ルームの周知

令和6年度の利用者数73名に対して、令和7年度の利用者数は435名であった。周知を行ったことが利用者の大幅増加に影響したと考えられる。

②悠ルームプロジェクションマッピングコンテスト(図1)

1名の生徒が夏休みに自主的に作品を制作し、提出した。プロジェクションマッピングの放映は、その後の毎週月曜日に行なった。

③来場者の利用分析(図2)

LOVOT 目的で来室する生徒の割合が高いことがわかった。実際に一人で LOVOT と対話している生徒や、LOVOT と交流するために早めに登校する生徒も見られる。次点で「静かに休むため」の需要が高いことが分かり、生徒全体に周知したことで静かな空間での休息を求める生徒の需要に応えられているのだと受け止められる。

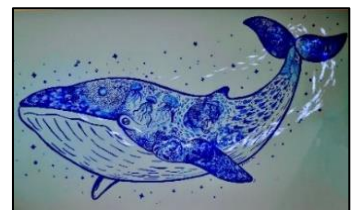


図1

利用目的	人数
静かに休むため	169
悠ルームの本を読むため	7
ラボットとふれあうため	171
自習するため	126
その他	10
合計	483

※複数選択可

図2

(4) 課題

悠ルームの認知度が上がったためか、日曜日など YSK サポーターがいないタイミングでも開室の依頼があり、受け入れている。しかし教員に常に監督する時間的余裕はないため、騒がしくなる時もあった。「静かに安心して過ごしたい」と本来の目的を目当てに来室している生徒にとって心理的負担になっていないかが懸念事項となっている。

(5) 令和8年度への展望

常時の大人の監督がなくても、多くの生徒が安心して使える空間にするための、ルールの見直しや運用を検討する。

Hanataba Cafe

(1) 概要

Hanataba Cafe とは、令和6年12月から本校でスタートしたプロジェクトである。空間デザインに興味がある生徒からあがった要望をきっかけに立ち上がり、静かで安心でき、リラックスして過ごせる空間 Hanataba Cafe を創り出した。令和7年4月からは、同空間を使用した校内居場所カフェ「Hanataba cafe+」を毎週火曜日の放課後に開いている。他の曜日には同空間の創設メンバーを中心に生徒同士の活動をつなぐ「コラボ企画」の実施場所となっている。なお、この空間を「Hanataba Cafe」、居場所カフェを「Hanataba cafe+」と呼び分けている。

(2) 令和7年度の取組み

立ち上げ 生徒が主体となった校内居場所カフェづくりプロジェクトについて

ねらい 「生徒が主体的に構想・協働・実現していくこと」

本プロジェクトは一人の生徒の「校内で空間デザインをやってみよう」という声から始まった。

この生徒の声を生かす形で、担当教員が校内で空間デザインに興味がある生徒を募集した。初回は12人の生徒が集まり、最終的に7人の生徒が定着した。担当は前述したねらいを達成するために、フェーズを3期に分けて生徒主体での校内居場所カフェづくりを促進した。

フェーズ1：教員が設定した仕組みの中で、主体的な発想を育む（令和6年12月～令和7年1月初め/計3回）

このフェーズでは教員から事前に、生徒が空間について考えていく上でのテーマや方法を設定し、その枠の中で生徒が主体的に考える段階とした。コミュニケーションを取ろうとする生徒が創設メンバーのほとんどを占めていたため、グループ活動およびグループごとの発表もスムーズに進んだ。

初回に発案生徒が空間デザインのコンセプトにあげた「ひなたぼっこしたくなるように心が和む空間」をテーマとし、2回目に「カフェのターゲット層を考えよう」、3回目には「カフェの5W1Hを考えよう」というテーマに取り組んだ。3回を通して、つくりあげたいカフェのイメージ像を参加メンバーで共有していった。



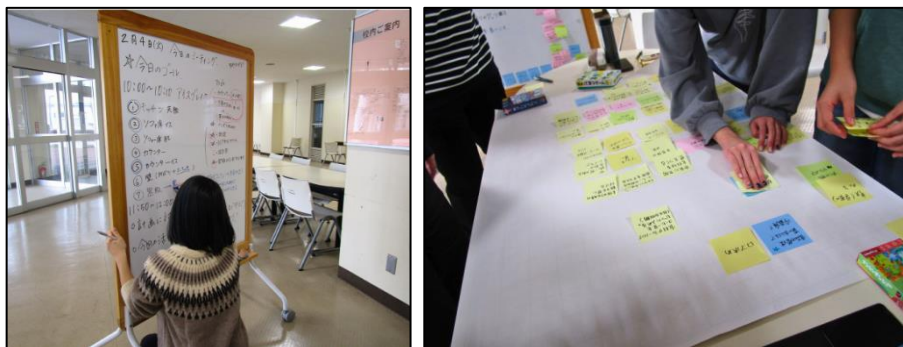
上2枚：教員が作成したスライド

左下・中央下：生徒がブレインストーミングに使用した記録 右下：活動の様子

フェーズ2：時間設定や進行などの枠を教員側で設定し、枠の中で生徒が主体的に考え実施する。(1~2月/約8回)

このフェーズでは、教員は①活動のはじめにアイスブレイクをすること、②今日の計画(目標やTodoリスト)を立てること、③最後に振り返りの時間を設けること、④今日の司会と書記を決めること、を指示した。その設定の中でどのように活動するかは司会の生徒を中心に決めていくこととした。アイスブレイクは参加生徒の中から「メンバー間の距離を縮めるために活動内容に入れてほしい」とあがった案である。また、状況を整理したいときには参加生徒がブレインストーミングを自発的に始めていた。このように段々と、生徒たちが自走していく様子が見られた。

この時期に居場所カフェの名前も決定した。生徒たちのプレゼンと協議により、一人の生徒から出た「Hanataba Cafe」を採用した。この名称を発案した生徒は、「今年度(令和6年度)の生徒会のスローガンがたんぼぼであり、生徒をみんな花に見立てて、その花が集まる場所なので【花束】としました。その花束のローマ字表記の Hanataba のなかには、anata がいたので、【あなたのための居場所】という意味が込められると考えました。」と語ってくれた。



左：司会となった生徒を中心にその日の計画を立てる様子

右：生徒が自発的に今の状況を整理し、今後の計画を立てた様子

<h3>1/8 活動報告</h3> <ul style="list-style-type: none"> ●営業日：(火)14時-16時に決定 営業時間外も場所は開放されることになりました ●メニューと店名の案出しをしました ●カフェの仕組みやルールを具体的に考えました <p>【疑問点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●募金システムを導入するなら、どんな形が良いか ●注文は1人何個まで頼めるか 	<h3>案の要約</h3> <p>【メニュー】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●ドリンク 常時：コーヒー/カフェオレ/ノンカフェ/ティー/ジュース 日替わり：ココア or ミルクティー ●フード おにぎり/サンドウィッチ/みそ汁(インスタント)/お菓子(チョコやクッキーなど) <p>【ルール】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●混雑時は時間制限を設ける(基本1回1時間の利用) ●プライバシーに配慮した写真撮影のみ可(SNSへの投稿は禁止) ●ワンドリンクオーダー制 ●ゴミはセルフで片付けてもらう ●店内の会話は小さめの声で ●通話は店外で 	<p>【店名の案】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●ha na ta ba cafe ●h anata bacafe = あなたのカフェ ●Dande lion 英：たんぼぼの意味 <p>【その他の案】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●整理券のようなチケットを配る ●募金システム/返礼品のマグカップ ●カフェの公式SNSの作成 ●ロゴとオリキャラの作成 <p>◎1/21(火)10時-12時トライ教室</p> <ol style="list-style-type: none"> ①具体的な内装品や費用について考えてきてくれると助かります ②店名の案を持ってきてください ③基調とする2色を考えておいてください 	<h3>次回の話し合いについて</h3> <ul style="list-style-type: none"> ○ リフォームの優先順位を明確にする ○ 費用の分配を具体的に考える ○ 購入物を絞り込む ○ 内装の図面作り ○ ロゴの構想・改変など ○ 空間の仕切り方の決定 <p>●内装や仕様などのカフェに関するアイデアや提案を広げてきてください</p>
---	---	--	--

※生徒が作成したその日の活動のまとめ(生徒がスマートフォンのメモ機能で作成したもののスクリーンショットを教員・生徒で共有した)

フェーズ3 生徒から自然発生する希望を関係機関と協議し実現(2月末~3月/約6回)

フェーズ2も回を重ねると、教員からのリードがなくとも生徒の中から、「こんなことやりたい」「こうしたい」という希望があがってくるようになった。教員はそのような生徒の希望によっては、別の職員と相談したり、必要であれば生徒と関係機関の直接の協議の場を設けてその実現の可否を判断したりした。生徒の手で実行可能なことは、生徒が主体となって進んでいくことを重視した。

例えば、壁のペンキ装飾や、カフェのカウンターづくりを自分たちの手で行いたいという希望があり、生徒の手で1からペンキ塗りなどを含む作業を行い内装が出来上がった。またカフェづくりに必要な家具等も自分たちで探し下見に出かけ、購入の交渉を教員と行った。ルールを示すための方法も実際の飲食店でとられている手法などを調べる

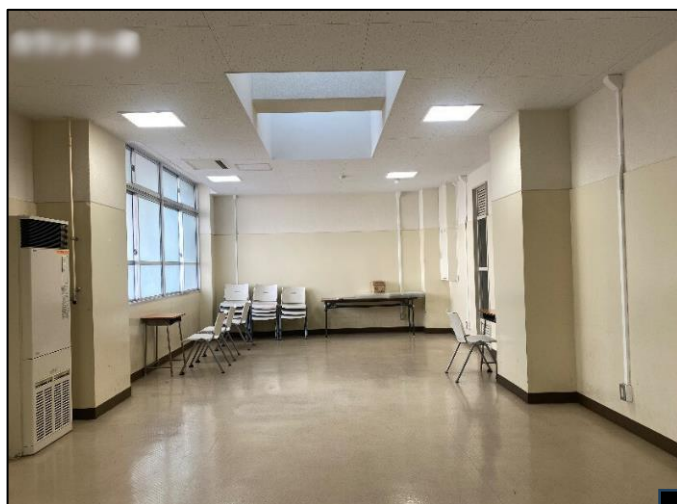
などして模索し、利用生徒に押しつけがましいと感じさせることのない、浸透しやすいルールを示すためのデザインなども作成した。さらに、創り上げたいカフェの構想案をもって、居場所カフェの運営をお願いするソーシャルワーカー事務所ランプのスタッフと直接協議を行い、自分たちの構想している案と実際に実現できる方策のすり合わせを行った。



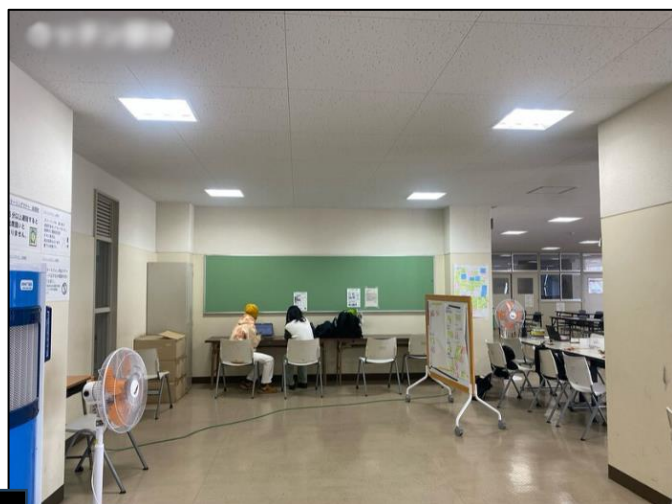
左：生徒が壁のペンキ塗装を行う様子

中央：生徒がカウンターを自ら設計・製作する様子

右：生徒が壁にカフェのロゴを描く様子



〈改修前〉



〈改修後〉

《生徒の活動によって決定・実施した事項》

- 12/18 ターゲット層：①騒がしいところが苦手な人 ②居場所に困っている人 ③落ち着きたい人
- 12/18 コンセプト：「静かで安心できる空間でリラックスして過ごす場所」
- 1/8 運用：毎週火曜日の放課後に校内居場所カフェを開催。その他の曜日は空間を開放しバーコードシールを貼って入場すれば誰でも使って良いことにした。

- 1/21 ネーミング： **Hanataba Cafe…空間の名称**
Hanataba cafe+…火曜日の校内居場所カフェの名称



- 1/21 コンセプトを守るための工夫・ルール
 - ①ラウンジ内で生徒が通常自由に過ごしている空間と内装や BGM を変えることで過ごす生徒の気持ちを切り替える。
 - ②ルール「～してはならない」のように否定文ではなく肯定的な文章で示す。

「3つの Hana」

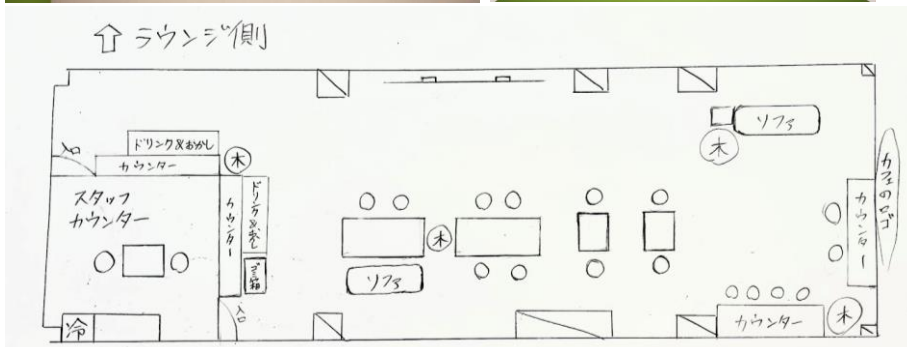
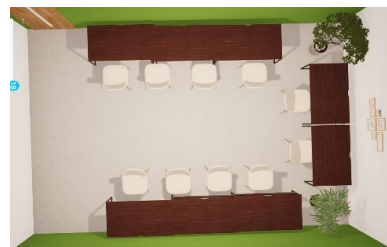
1. 来たときよりも美しく
2. 日なたぼっこのようにあたたかく
3. 和やかな場所で静かなひとときを

→右図の案内をカフェ各所に配置することにより、カフェや空間を使用する生徒たちも主体的にその雰囲気をつくりあげていくことを狙いとした。

- 1/28 ロゴ (下図)



- 1/28 予算の分配・購入物品・購入先
- 2/5 内装デザイン ※前ページの〈改修後〉の写真は運用の様子を鑑みて改装を行っている



- 4/17 コラボ企画 校内の部活動や有志団体などの活動をつなぐ場としてコラボ企画を校内で募集する。

なおプロジェクトを通じたこの活動の様子は、令和6年度3月に開催された横浜市中地区探究学習発表会にてポスターセッションを行った。下がその際に生徒が作成し発表に使用した実際のポスターである。



だれもが自分の居場所と思える空間とは？

横浜修悠館高等学校 発表者：●●●、●●●、●●●



① なぜ居場所というテーマにしたのか

人にとって「ここにいて良いんだ」と安心して過ごせる居場所はとても重要です。

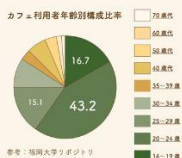
現在、私たちの学校には生徒が落ち着ける空間がありません。

先生、生徒という役割にとらわれることが多い学校では誰もが「一人の人」として心休まる場所が必要です。そんな中、「ほっ」と一息つける空間を提供している校内居場所カフェの存在を知り、私たちの学校にもそういった環境を作ることに決めました。



② カフェの利点と実用例

カフェでの休息はストレスを緩和させる効果やエネルギーの回復、集中力を向上させる効果があります。



従来の校内カフェ



カフェイメージ図



学校内のカフェは単なる飲食の場ではなく、生徒の学習や成長をサポートするものとして、重要な役割を果たしていると言えます。



③ カフェオープンまでの道のり

1. 「Hanataba cafe」の店名の由来



2. カフェを落ち着く空間にするために内装の基調となる色を決めました。

テーマカラー

① 白（落ち着きや安心感を与える効果）

② 茶（癒し効果のある木の色をイメージ）

③ 緑（リラックス効果やストレス軽減の効果）

④ 黄（たんぽぽをイメージ）

3. カフェ利用者に守ってほしいルールを考えました。
「3つのhana」

- 🌻 来たときよりも美しく
 - 🌻 日向ぼっこのように暖かく
 - 🌻 和やかな場所で静かなひと時を
- これらは、大切な **anata** の居場所のためのものです。



④ 「Hanataba cafe」の強み

- ① 先生以外の大人のスタッフや生徒同士で交流できる
- ② おいしいハンドドリップコーヒーが飲める
- ③ 生徒の理想を詰め込んだオシャレな空間でくつろげる



結論

このように多くのニーズを兼ね備えていることから、私たちは「だれもが自分の居場所だと思える空間とは？」という問いに対して「カフェ」という答えを導き出しました。しかし、制作途中で実際に試行できていないことから **居場所=カフェ** が正解とは言い切れません。今後の活動でも、探究的発表会までに培ってきた力を活かし、カフェの利用者に寄り添った「だれもが自分の居場所と思える空間」を目指していきたいです。



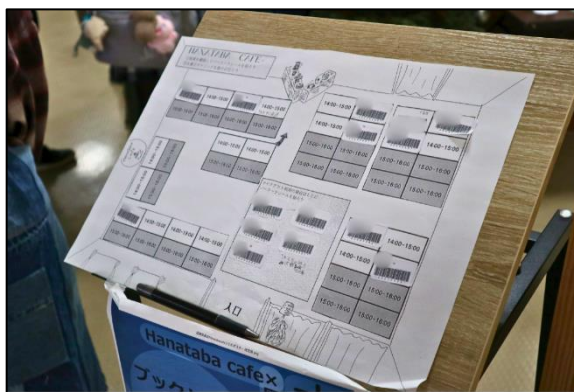
校内居場所カフェ Hanataba cafe+

(1) 概要

生徒が創設した Hanataba Cafe のスペースを活用して、校内居場所カフェ Hanataba cafe+が令和7年5月からスタートした。毎週火曜日 14-16 時（スクーリングが少ない週・長期休業期間は除く）に開催。運営はソーシャルワーカー事務所ランプ（代表 小川杏子氏）に委託。生徒には無料でお菓子や飲み物を提供する。生徒はバーコードシールを貼ることで誰でも入場ができる。受付時やお菓子を選ぶとき、着席しているときなどにスタッフとコミュニケーションをとっている。



左：Hanataba cafe+入口 右：ソーシャルワーカー事務所ランプスタッフと、カフェ利用生徒の交流の様子



左：提供しているお菓子 右：どの生徒が利用したかについてはバーコードシールで管理している

(2) 令和7年度の取組

①Hanataba cafe+始動の際に設定した目的

支援につながっていない生徒の発見・支援につなげること。

本校には様々な支援の資源があるが、支援が届くべき生徒全員に届いているとは言えない。特に、担任教員等との交流が薄い生徒は困難を抱えていても、相談できる相手がいない等の理由で支援の窓口につながらない場合が考えられる。特に、Hanataba Cafe が開設されたラウンジスペースは生徒のたまり場になる傾向があり、友人と過ごしていて毎日のホームルームに参加しないなど教員との関わりが薄い生徒が多くいる。そこで、校内居場所カフェのスタッフという、教員ではない人物が生徒と世間話等を通じた交流を行うことで、生徒の状況や友人と過ごす様子を把握し、教員と情報共有を図り、支援にもつながることを目的とした。

生徒が挑戦のはじめの一步を踏み出すフィールド

Hanataba Cafe 創設時に生徒から「生徒がつくったカフェではスタッフも生徒が担いたい」との声があった。この声と本校の生徒の状況を鑑みて、Hanataba cafe+では、アルバイトに興味はあるが校外でのアルバイトには力が達していない生徒を対象とした職場体験の場として活用することにした。

②経過

1つ目の「支援につながっていない生徒の発見・支援につなげること」については、毎回のカフェ終了後にソーシャルワーカー事務所ランプと各日の報告書で情報共有を行うことによって、利用生徒の状況把握に努めていた。報告書の中では Hanataba cafe+ 全体の様子に加えて、ソーシャルワーカー事務所ランプスタッフとの会話や観察の中からスタッフが気になった生徒がいれば、その詳細を共有している。こうした報告書は、本校の教育相談・学習支援グループの教員、報告にあがった生徒の担任、管理職、SC・SSW で回覧と共有を行っている。

+Hanataba cafe+ 業務日報		2025年度	
開催日時	2025年12月2日(火曜日)	天気	晴れ
日時	14:00 ~ 16:00	開催場所	Hanataba cafe+(ラウンジ)
記録者	ソーシャルワーカー事務所ランプ ■■■		
来店生徒数	23名+バーコードなし2名(開店や閉店時)		
講師	2名(氏名 ■■■さん、■■■さん)		
1日の流れ	12:30~14:00 開店準備 ※職員体験13:30~ 14:00~14:10 朝礼 14:10~16:00 Hanataba cafe+ ※15:00 職員体験 16:00~16:40 片付け 16:40~17:00 先生への引継ぎ、振り返り		
職員体験生徒の様子	■■■■■ ■■■■■ ■■■■■ ■■■■■ ■■■■■		
カフェの様子	開店前からカフェプラス空間利用とラウンジで課題に取り組み生徒が多くまったりした雰囲気であった。 店内でイベントがあり一時、人が少なかったが断続的に来店。個人利用が中心、2人組やグループが多い印象。常連生徒にはスタバで飲んじゃったと言いながら友人やスタッフと軽く会話してバーコードを貼らずにイベントへ行く生徒。閉店後の片付け時に来てスタッフに声をかけた生徒もいた。 写真部の常連生徒2人組に課題の進捗を聞く。「キリギリ間に合う感じ」と言、進捗の遅い時期である事が伺えた。 テーブルいっぱいにてキーストなど抱げて各自課題に取り組み、息抜きをしたり、友人に相談したり、スタッフに話しかけたりして最後まで滞在した		
先生との打ち合わせ事項	グループもあった。 「卒業しちゃうよー淋しいよー」と嘆く生徒も。昔にはクールな様子に見えた生徒が、昔に甘えたり頼っていた様子も印象的であった。 終盤にセルフサービスで提供したメロンソーダ(先生から文化祭の余りのシロップと炭酸水の提供あり)は生徒に好評。炭酸が苦手な生徒も多い。 後半にはラウンジに集まっていたグループに声かけ、グループが来店して飲み物やお菓子をとって帰っている様子も見られた。ラウンジに飲み残しやゴミもカフェへ運搬しているという様子も見られた。ラウンジに飲み残しにならないように各自捨ててもらう等の声かけを機動的にするなど、まだまだ新規生徒の来店もあるので空間の利用についても丁寧に伝えていく必要があるように感じた。 空間デザインの生徒より翌日の図書委員会のイベント告知の依頼があり、カフェ+に来店した生徒に紹介した。 空間デザインの生徒よりクリスマスツリーも設置された。華やかな雰囲気にも来店生徒も驚きや期待を感じている。		
Hanataba cafe+ 業務日報(動画)			
学校への引継ぎ事項	■■■■■ ■■■■■ ■■■■■		
その他	今回の職場体験の作業として、お菓子の袋詰めという作業を行ったため、次回、今学期は回はクリスマス仕様にして、可愛い袋に詰めたいお菓子を提供予定です。 持ち帰らずその場で食べてもらうよう促していく形を取ればと思います。 また、備品等の片付けを楽々でできればと思っています。事前に、冷蔵庫の電源を切っておくか、備品はその場に置いておく方が良いか?等、開催している期間の管理について確認させていただければと思います。		

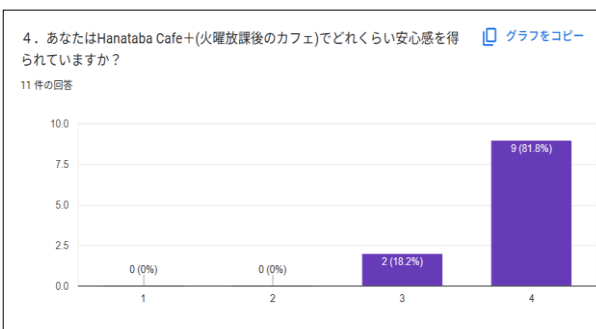
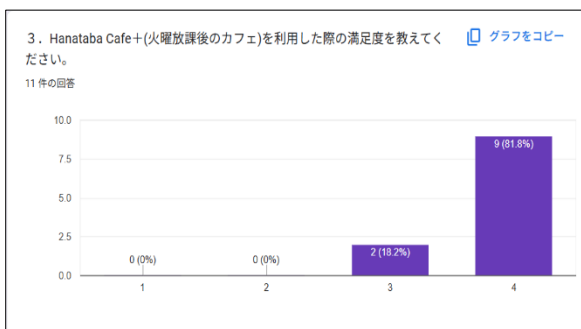
各回後にソーシャルワーカー事務所ランプと本校で共有している報告書

2つ目の職場体験については、2名の生徒が参加した。後述の「キャリアIC」で本校と既に連携している、湘南・横浜サポートステーションに協力をお願いし、「アルバイトに興味があるが、まだその力が達していない生徒」を紹介してもらった。ソーシャルワーカー事務所ランプの協力も得て、アルバイトの練習として、Hanataba cafe+でスモールステップを踏んで働く練習を積めるようにした。以下がそのステップの表である。

(3) 成果

令和7年度を初年度とする計18回のHanataba cafe+の開催で、のべ367名の利用があった。その副次的効果として毎年利用者数過多となっていた保健室の利用人数が前期だけで約100名減少しており、校内の支援場所の分散という点で成果をあげた。利用者(11名)を対象にしたアンケートでも以下のような、満足度および安心感を得た生徒が多いという回答を得ており、生徒にとって安心できる「居場所」としての役割を果たしていると言える。目標とした「支援につながっていない生徒の発見・支援につなげること」については、様子に変化が見られた生徒がいたかをソーシャルワーカー事務所ランプと共有した。その中で、常連の生徒の様子に変化があったとして担任伝いでSC面談を紹介した生徒が1名いた。実際の利用にはつながらなかったが、毎週共有される報告書を通して、担任教員の目からだけでは見えてこない友人と過ごす際の様子や、スクーリングや面談などのかしまった場ではないリラックスした場の様子、世間話から見えてくる学校外の日常の様子が共有されることで、今までは見られなかった生徒の様子を知ることができ、教員全体でより深い生徒理解につながられた。

もう一つの目標とした「生徒が挑戦のはじめの一步を踏み出すフィールド」に伴う職場体験については、ソーシャルワーカー事務所ランプの協力により、アルバイト的な対外的な経験がない生徒も安心できる場で働くことの基礎を学ぶ機会となった。職場体験に参加した2人のうちの1名は、初回(10/30)の報告書で「対人への苦手意識や対象が多いことが壁になっているかもしれない」や衛生面の心配について記載があったが、令和7年度最後の回(12/2)等は「表情も明るく、白い清潔な洋服を新調し、体調も良く意欲的」「わからない点は自発的にスタッフに確認、助言を受けて対応できた」と衛生面、コミュニケーション面共に成長する姿がみられた。もう1名は、以前からアルバイトに意欲があるが、複数回面接を受けても受からない生徒だった。職場体験を通して「当初に比べて、分からなくなったときにスタッフに相談できるようになっている。自分の苦手や人に相談することの大切さを確認できた。」と成長が見られた一方で、スタッフから「話をする際の距離感が近くなってきており、本人のニーズとして仕事をできるようになりたいという以上に、話を聞いてほしい等の別の欲求を感じる。来年は居場所として利用者に戻った方が本人にとっても遠慮なく話ができる場になるかもしれない。学校の進路指導と足並みをそろえていきたい。」とのことであった。職場体験を通して生徒の理解が深まり、支援の方向性もより明確にすることもできた。



左：Hanataba cafe+でくつろぐ生徒の様子



右：スタッフとコミュニケーションをとりながら職場体験に取り組む生徒の様子

(4) 令和8年度のへの課題

生徒が主体的に生み出した空間である Hanataba Cafe という空間において生徒が主体的に活動する機会であるコラボ活動をさらに活発化させていきたい。

架け橋教室

(1) プログラムの概要

架け橋教室とは、外国につながりを持つ生徒の学習支援、および居場所づくりを目的とした支援体制である。学習言語として日本語が十分に身につけていないことによる学習の停滞や、将来や友人関係の不安のある生徒に対し、平日の11時～14時に校内の一教室を使って教員や学習支援員の個別指導を通じて組織的に学習や生活に対する支援を行っている。また、この教室は生徒同士の穏やかな人間関係を育む学びのコミュニティの側面も持っている。



架け橋教室の様子

(2) 令和7年度の取組

①利用者数の集計と利用者アンケートの実施

令和7年度の利用者に対して、「架け橋教室を利用する目的」「前期/後期にどの程度架け橋教室を利用したか、およびその理由」などの質問項目でアンケートを実施した。

②ホームルーム後の引率

令和7年度は新たに、入学直後の段階で架け橋教室の存在を知ってもらうことを目的として、スクーリングが始まる5月および10月に、外国につながる生徒が多く在籍する7組・8組の新生入生・転編入生を対象に、担当の教員が昼のホームルーム後に架け橋教室へ直接引率する期間を設けた。

③生活体験発表会

生活体験発表会は、神奈川県高等学校定通教育振興会文化部が主催する、定時制・通信制に学ぶ生徒が、学校生活を通して得た貴重な体験を発表する場である。本校からは例年、架け橋教室を利用する生徒が、自分の来歴、本校での学校生活、架け橋教室での仲間との交流などについて発表を行い、自己肯定感を高める機会となっている。

(3) 成果

①利用者数の集計と利用者アンケートの実施

令和7年度、本校に在籍する外国につながる生徒は約135人で、そのうち利用実績のあった生徒数は37名、利用率は約27%である。令和7年度の架け橋教室の利用状況は図1、2のとおりである。スクーリングのある期間(5～7月および10～12月)には1日あたり平均して4件前後の利用があった。これは過去5年間で最も低い値である。

利用者アンケートでは、8名の生徒から回答を得ることができた。この8名は令和7年度の総利用件数の約6割を占めており、令和6年度から架け橋をよく利用していた生徒と、令和7年度の新入生が含まれている。架け橋教室の利用目的としては、表1のとおり、自習あるいはサポーターの先生に教えてもらいながら学習に取り組む場という側面と、居場所および交流の場としての側面が見られる。

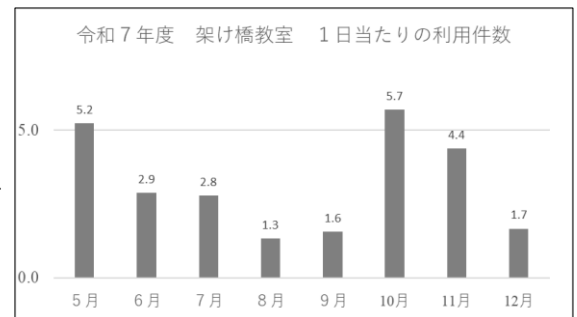


図1 月別1日あたりの利用者推移

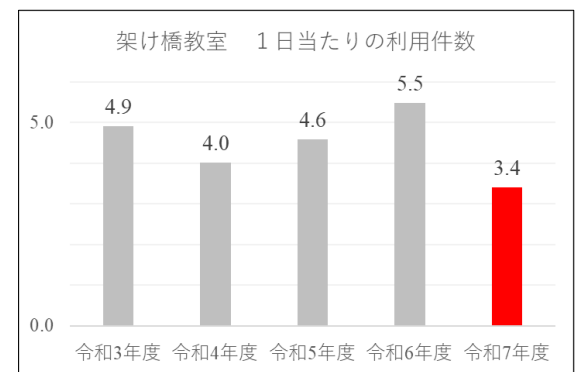


図2 年度ごとの1日あたりの利用者推移

架け橋教室の利用状況に関する質問では、前期・後期も「かなり利用した」「まあまあ利用した」が大多数を占めていた。このように回答した生徒は、実際には令和6年度よりも利用回数が大幅に減少しているが、本人にとってはその実感はなかったようである。また、利用回数が減った理由として、「個人的な事情や家庭の事情などで学校にあまり来ていなかったため」「ラウンジなど、架け橋教室以外に校内で過ごせる場所があったため」「スクーリングの空き時間もあまりなく、終わったらすぐに帰宅するため」などの回答があった。令和7年度は架け橋教室をよく利用する生徒が、ラウンジや Hanataba Cafe など、校内の他のスペースで過ごしている姿を見る機会が多かった。このような環境の充実も架け橋教室の利用者数に影響している可能性がある。また、令和7年度からレポートがオンライン化したことにより、自宅からでもレポート提出が可能になったことが学校への滞在時間の短縮につながった可能性もある。

架け橋を利用する目的(複数回答可)	回答数(件)
自習するため	6
昼食をとったり、校内での居場所として利用するため	6
先生にレポートなどの勉強を教えてもらうため	5
友人と話したりするため	5
なんとなく暇な時に来ている	2
先生に日本語を教えてもらうため	1
先生に日常生活の中で困っていることなどを相談するため	1

表1 架け橋教室を利用する目的

利用状況	前期	後期
①かなり利用した	3	3
②まあまあ利用した	3	4
③あまり利用しなかった	1	1
④ほとんど利用しなかった	1	0

表2 架け橋教室の利用状況

②ホームルーム後の引率

5月には生徒A～Eの5名、10月には生徒F、Gの2名に声をかけ、架け橋教室まで引率し、利用を促した。5月に引率した生徒は、しばらく利用がない時期が続いたが、10月に入ると、再び自ら架け橋教室を利用するようになった。教員視点ではしばらく利用がなかったことを心配していたが、生徒自身は架け橋教室の存在を知っており、各々が必要な時に利用可能な場所として認識していると考えられる。

生徒	引率時期	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
A	5月	2	0	0	0	0	8	4	1	10
B	5月	4	3	0	0	0	4	1	0	11
C	5月	3	0	0	0	0	7	0	0	10
D	5月	0	1	0	0	0	0	0	0	1
E	5月	0	0	0	0	1	1	0	0	1
F	10月	-	-	-	-	-	2	0	0	2
G	10月	-	-	-	-	-	8	4	0	8

表3 引率した新入生・転編入生の月別利用回数

③生活体験発表会

令和7年度は、介護職とタガログ語の外国人教育相談窓口で働きながら、主に日曜スクーリングで学習を進めている生徒が、自身の仕事と学校生活について発表した。結果として、最優秀賞を受賞し、全国大会へ駒を進めることができた。

発表練習の際には、本校教職員だけでなく、架け橋教室を利用する後輩生徒も参加し、その様子を見学した。このような上級生と下級生の縦のつながりも架け橋教室の強みといえる。



生活体験発表会の様子

(4) 令和8年度に向けての課題

令和6年度の報告書では、外国につながるの生徒と一般の生徒が交流できる場としての側面を提示したが、令和7年度、校内で見られた動きとしては、他の居場所が充実することで、それらの場所が結果的に交流の場としての役割も担うようになったといえる。サポーターからも「指導する内容によっては外国につながる生徒を一般の生徒ときちんと分けたほうが行きやすいこともある」という声もあったため、架け橋教室の位置づけについては引き続き見直していく必要がある。生徒を架け橋教室に直接引率する試みに関しては、教員が生徒に教室を紹介・案内したこと自体に意義を見出せた。ポスター掲示や招待状等をただ渡して「こういう場所がある」と連絡するよりも、直接の引率は教室利用に対する生徒の心理的ハードルを下げると考えられるため、令和8年度も継続して実施し、必要な生徒が定着していく様子など変わらず見守りたい。

(5) 架け橋教室利用者の令和7年度の生活アンケート結果について

- ・630件の回答のうち、7名(1.1%)が利用している。(実際の利用生徒であることは確認済)
- ・7名中、6名が「問2 横浜修悠館高校に入学して良かったと思いますか」という質問に対して「良かった」と回答。

7名中、5名が「問10 横浜修悠館高校に入学し、学校生活は充実している」という質問に対して、「充実している」と回答。

【学校生活充実の理由に関する記述の一部】

- ・自分の設定通りの履修で規則正しく動けるから
- ・楽しいと感じれていない(原文ママ)

【学習に対する記述の一部】

- ・後回しにしている

【卒業への不安に対する記述の一部】

- ・諸々あまり定まってないから
- ・学力に不安があるから

[まとめ]

- ・学習のみならず日常的な会話等で、支援員や職員、校内の友人と結びつく居場所であり、それが入学満足度や学校充実度に表れたと推察される。入学について不満足(「4 どちらかというとなかなか」)と回答した1名については令和7年度新入生である。修得単位はあり学校は継続予定なので今後もサポートしていく。架け橋教室は今後も校内で【外国つながりなどの多様な背景を持つ】生徒に第一に勤める教室となっている。
- ・令和7年度の結果を受けて、2班は次の目標を掲げている。
 - ①令和8年度も、利用生徒の生活アンケートから生徒の具体的な困り感等を把握していくこと。
 - ②令和8年度も、利用生徒の12月時の学習状況等の好転に向けて努めていくこと。

キャリア・ポート

(1) 概要

キャリア・ポートは、横浜修悠館高校における通級による指導講座の名称である。この名称は、生徒にとってこの講座が、自立した生活を送るために準備をし、将来に向けて旅立つ場所（港：port）になってほしいという本校教員の願いから決められた。

講座の内容は、通級による指導の目的である、生徒個々の実態に応じ学習や生活上の困難を克服することを目指した活動を行っているが、本校では特に以下の3点を重視している。

- ・生徒が安心できる環境を整え、安心して過ごせる居場所となること
 - ・小集団でのチームティーチングを行い、コミュニケーション力を養うこと
- (例：令和7年度の「キャリア・ポート（木曜4校時）」では生徒14名に対して教員14名が担当した)
- ・将来の自立と社会参加を目標に、「働くこと」をテーマにした活動を含むこと

これらを達成する活動をキャリア・ポートとして「月曜1校時」と「木曜4校時」、「日曜（隔週・毎時2コマ）」の3展開で開講している。スクーリングとして前期に9時間、後期に9時間の18時間を設定し、その他に外部機関への見学や校内外での作業体験、就労移行支援事業所等のスタッフによる講演会等の多角的プログラムを展開している。

受講前に生徒が回答したアンケート内の「受講しようときめた理由を教えてください(複数回答可)」という質問には、「いろいろな経験ができそうだから」(12人中8人)、「コミュニケーションの練習になりそうだから」(12人中7人)、「進路や仕事について考える機会になりそうだから」(12人中7人)という回答が上位3位を占め、多くの生徒が経験やコミュニケーション能力の涵養の場として捉えており、次いで卒業後の進路を意識して受講に臨む生徒が多い。

キャリア・ポート（木曜）では、卒業予定生徒を対象にしたAクラスとその他の生徒のBクラスでクラス分けをしている。今回の報告書では、主にBクラスの取組を紹介する。

(2) 令和7年度の取組

令和7年度の活動の柱は次の2本である。

- ①「コミュニケーションがとれる相手を増やし、キャリア・ポートを居場所と感じ、安心と思える場所で自己理解・自己受容を進める」
- ②「一人ひとりの特性に応じた個別最適な目標設定・支援」

キャリアポート（木曜）のBクラスは、入学は2年目以降、キャリア・ポート受講は1年目の生徒が大半を占める。令和6年度の様子から担任教員が推薦、もしくは本人が希望して受講に繋がっており、「怖くて教室に入れずに校内で硬直していた」生徒や、「教員から声をかけられたり人が多いところにいたりするとパニックになってしまう」生徒、発達障害の診断を受けている生徒など、8名が登録している。

学校という場所に緊張感を持っていたり、他者とのコミュニケーションに恐怖心を持っていたりする生徒も多いため、担当者の目標として、段々とコミュニケーションができる範囲を拡大していき、キャリア・ポートを安心できる居場所と感じさせることを目指した。また自分ができること、難しいことを自分で理解し受容することを「自立と社会参加」の観点から特に目標とした。そして、多様な生徒が在籍することから、参加することは促しつつも、それぞれの生徒の状況に応じた必要な支援を意識した。

次頁からその取組を紹介する。

ア. コミュニケーションがとれる相手を増やし、キャリア・ポートを居場所と感じ、安心と思える場所で
自己理解・自己受容を進める

①教員の積極的関わり

・スクーリング担当の輪番制

キャリア・ポート（木曜）Bクラスの担当教員は9名である。各時のスクーリングにおける指示出しの担当を輪番制とした。各時全体に指示を出す教員と、生徒の横に立って声をかける教員が毎時替わることによって、生徒たちが9名全員をキャリア・ポートの担当教員であることを認識し、生徒が「信頼して安心して話せる相手」を教員の中から選べるようにした。

・教員による各回の、生徒の振り返りへのコメント

キャリア・ポートでは毎時生徒に今回の活動の振り返りをさせている。令和7年度のBクラスでは各生徒の振り返りに対して、担当教員がコメントをした。教員から生徒自身が意識できていないかもしれない「今日できていたこと」をコメントすることで、活動の柱でもある「自己理解・自己受容」のヒントとなるようにした。

★先生からのコメント
率先に、役割の立候補してくれありがとう！ 自分の気持ちや考えを周りの人に
伝えられることがキャリアポートの目標だから、成長が感じられるね！
good!

★先生からのコメント
いつものように集中して課題に取り組んでいましたね
Figmaというアプリの使い方を自分から質問することができました。
最後にファイルを預ける時もお礼を言ってくれた。お願いしてよかった。
いろいろなこと上手にできるようになっていきます。

★先生からのコメント
とっつぱおぼろしく丁寧でした！
相手とやりとりする際、きちんとお礼を言う子もいるのが
特に良いなと思いました！

★先生からのコメント
プリントにある文章をそのまま使うのではなく、
状況に合ったオリジナルの文章を作ることができていましたね！
中には独創性があるんですね！

担当教員による各生徒への振り返りコメントの例

イ. 段階的なコミュニケーションの拡大

生徒が安心して他者とコミュニケーションをとることができるように、「①まず教員と話してみる→②つぎに生徒同士で会話する→③それから全体に対して発表する」という段階を踏んでコミュニケーションの範囲を拡大していった。

以下に、その具体的な活動と時期を紹介する。

5月：教員とコミュニケーションをとる

○ボードゲーム『佐藤です。好きなおにぎりの具は梅です。』

…株式会社幻冬舎より発売。自己紹介が盛り込まれたボードゲーム。初回では、生徒は教員が前でゲームを行う様子を見たあと、教員が何を答えていたかをホワイトボードを使って回答。次時では、生徒2人に対して教員3人の計5人のグループを作り、そのグループ内でゲームを実施した。

生徒の取組 (原文ママ)

〈担当教員振り返り 一例〉…毎時各生徒について気が付いたことを担当教員が入力。

- ・自分のビンゴを作成する際に「好きなアイス」「つつい買ってしまうもの」等の答えのない質問には「なし」と回答。「星座」など答えが決まり切っているものについては回答することができていた。
- ・人の話を聞くことや、自分の話をすることもできた。とても楽しそうだった。

〈生徒振り返り 一例〉…スクーリングの終わりに生徒が入力。

- Q. 今の気分と理由を書こう：とても良い、面白くて楽しかった。
- Q. 今日「できた」と思うことを書こう：メモをせずに覚えて答えられた！

6月：生徒同士のコミュニケーションをとる

○共通点ビンゴ…自分についてのビンゴを作成し、生徒同士で指定された挨拶を交わしたあと、互いの共通点を見つける。これを繰り返し、ビンゴを達成する。

共通点ビンゴ ★準備しよう！

①シールに書かれたお題から9個選んで、記入します
(食べ物、お菓子、飲み物、コンビニ、おにぎりの具、ゲーム、数字(0~9)、動物、色、キャラクター、アイス、ミスト)

②ビンゴシートに、記入したシールを貼ります

★貼る順番は自由です

例 私の好きな
食べ物は
桃

共通点ビンゴ ★Let's BINGO!

①まずは自己紹介と挨拶
「私の名前は〇〇です。よろしくお願いします」

②お互いのビンゴシートを確認して、共通点があったら、〇を書こう

③終わったら、「ありがとうございました」

★ルール★
1. 一度〇を付けたら、それ以外の共通点を探しましょう
2. 同じ人と2個以上共通点がある場合は、どれか1つ選ぼう



左・中央：ルールの説明および挨拶の指定を示したスライド 右：生徒同士でビンゴを確認しあう様子

生徒の取組

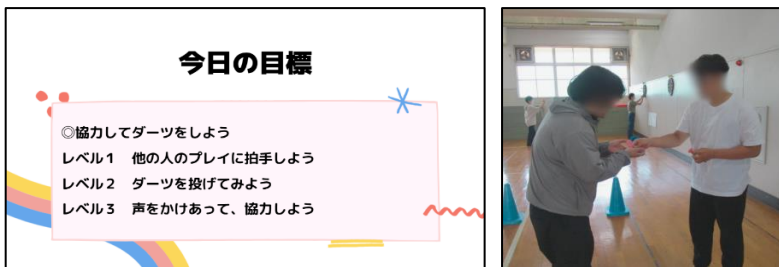
〈担当教員振り返り 一例〉

- ・事前情報に会話が苦手とあったが、他の生徒にも自分から挨拶やコミュニケーションをとっている様子が見られた。
- ・自分から動くことはできなかったものの、他の子が来ると挨拶やコミュニケーションをとることができていた。

〈生徒振り返り 一例〉

- Q. 今日「できた」と思うことを書こう：自己紹介をすることができた

○ダーツ…やり方は通常のダーツのルールに則る。ダーツで得点を競い合うこと自体は目的ではなく、他の生徒のプレー（ファインプレーや、逆に外れたとき）に拍手を送ることや、矢を渡す際に声を掛け合うことなど協力して取り組むことをスクーリング全体の活動目標とした。



左：協力し合うことを中心に目標を示したスライド 右：生徒同士で矢を渡す際、声をかけあう様子

生徒の取組

〈担当教員振り返り 一例〉

- ・他の生徒のファインプレーに喜び大きく反応できたほか、矢の受渡し時に相手に聞こえる声でお礼を言っていた。
- ・(上記生徒)の影響からか、会釈して、小さな声ではあるが、「ありがとうございます。」が言っていた。

〈生徒振り返り 一例〉

Q. 今日「できた」と思うことを書こう：ほかの人へのこえがけができた

7月：全体に向けた発信・表現を短時間行う

○ブラインド・ドローイング…説明役(1名)に複雑な図形が描かれた紙を渡す。説明役となった生徒は、前に立ち、他の生徒たちにその図形はどのように描けば良いかを口頭のみで説明する。他者を意識したコミュニケーションを活動目標としつつ、全体に対する発表機会となった。



左：説明する様子 中央：発表生徒の説明を受けて図形を描く生徒 右：出来上がった図形は見せあった。

生徒の取組

〈担当教員振り返り 一例〉

- ・頭を使って説明できており、全体の前で説明することは本人の能力的にも適正レベルの内容だったと思います。
- ・説明役となった生徒の一人が、説明役に任命され驚いてはいたが、発言すること自体はためらいがなかった。前に出て声を出すことが苦手ではないのだと感じた。

〈生徒振り返り 一例〉

Q. 今の気分と理由を書こう：良い、自分の説明が伝わったから。

後期：アイスブレイクの導入

後期は高校卒業後を見据えて、職業理解を促すための職業インタビューや、将来を考えるための自己理解・自己受容を促す取組を行った。段階的なコミュニケーションスキル拡大の一環として、生徒・教員同士で交流するアイスブレイクを毎時の各活動の前に導入した。



アイスブレイクの際に示したスライド



上記スライドにある活動中の様子

生徒の取組み

〈担当教員振返り 一例〉

- ・楽しそうにアイスブレイクに参加した。他の生徒のポーズを真似する場面もあった。
- ・アイスブレイクでもその後のレクチャーでも笑顔が見られた。アイスブレイクでクラス全体の温度が上がったように思う。

※この項目の〈生徒振り返り〉について、アイスブレイクは後期のほぼ毎時で取り入れたものであるため割愛する。

11月：校外の人とコミュニケーションをとる

○職業インタビュー…将来「社会に出る」ことを意識するための取組として、校外に出かけ、働く社会人に「職業インタビュー」を行った。生徒が安心して臨めるように、準備を丹念に行うためインタビューの練習を含め3時間構成とし、その後本番に臨んだ。

★職業インタビューに向けて

【事前準備】

(1) 面接する人 (GS) 3人 (100シネマズ) 3人
「面接当日服装から来ました。本日はよろしくお願ひします。」

(2) 面接の質問する人 (GS) 3人 (100シネマズ) 3人
「聞いていて感じるやりのことを教えてください。」
「この仕事にはどんな人が向いているとおもいますか？」

(3) メモする人 3人 () 3人

(4) 質問する順番 (GS)

質問内容	質問する人
① どの仕事にしたいですか？	3人
② 売っているものは他の店の取りまわがいでいいですか？	3人
③ 日にどれくらい売れていますか？	3人
④ 服はどのくらい売れていますか？	3人
⑤ 働いて大変なことを教えてください。	3人

(5) 質問する順番 (100シネマズ)

質問内容	質問する人
① 映画館はいつお休みになりますか？	3人
② 掃除を何回に一回おこなっていますか？	3人
③ エキストラのアルバイトはありますか？	3人
④ 働いている間は映画を見られますか？	3人
⑤ 働いて大変なことを教えてください。	3人

★インタビューの練習をしよう！

① あいづつ
「面接当日服装から来ました。本日はよろしくお願ひします。」
「こちらこそ、よろしくお願ひします。」

② 面接の質問をする
「お仕事について教えてください。」
「聞いていて感じるやりのことを教えてください。」
「この仕事にはどんな人が向いているとおもいますか？」

質問に対する回答
① 「ありがとうございます。」
② 「お礼を言おう」「本日はありがとうございました。」



100 CINEMAS

インタビューして分かったこと

サブスクがあるなかで映画館に足を運んでくれるか。座席の隙間にポップコーンが落ちてくることを掃除をするときに気づいている。映画館は週一回きれいにしている。またこの仕事には100名来ていて働いている間は映画が見れない。働いていて感じるやりのことはまた来ますと言われるのがやりの。

考えたこと・感想

_____さん
映画館の裏側が見れて嬉しかった。

_____さん
思ったよりメモがでなかつた。

左上：練習の際に使用したワークシート 右上：本番一週前に教室で教員に対してリハーサルを行った様子

左下：インタビュー本番の様子 右下：参加生徒が作成した振り返りスライド

生徒の取組

〈担当教員振り返り 一例〉

- ・外部での活動だからか、いつもと違い母に頼ることが少なかった。インタビュー中は今まで聞いたことのない素晴らしい声量でインタビューをし、お礼や、挨拶も言っていた。今日はインタビュー後の用紙の記入の時くらいしか母と一緒に光景は見られなかったのが素晴らしかった。
- ・欠席した生徒の役割を買って出て、質問ができた。インタビュー中は自然と自分がリーダーであるという自覚を持っていることが感じられた。質問も大きな声で伝わるように話せた。特に印象的だったのは相手の顔を見て会話することができていたところだ。
- ・「校外の人と話すのは緊張するため欠席したい」と表明。コミュニケーションがとれる範囲が明らかになったと思う。

〈生徒振り返り 一例〉

- Q. 今日「できた」と思うことを書こう：質問したこと・お礼を言ったこと
- Q. 今の気分と理由を書こう：とても良い、なんか手ごたえがあったから。

12月：対外的な発表会を実施する。

○キャリア・ポート発表会

例年行っている本校キャリア・ポート全クラス合同の発表会である。校内で行い、保護者や県職員など20名前後の前で一年間の取組を発表する。スモールステップを踏みながら本番に向かうための準備・練習を行った。これまでの活動から自分自身について振り返り、「自分が得意なこと・できるようになったこと」「苦手だと気が付いたこと」「将来の考え」をテーマにスライド作成を行った。担当教員から、事前に実践を用いて伝わりやすい話し方をレクチャーした。リハーサルでは履修中の生徒8人のうち、出席した6人が発表練習を行った。発表会本番もひとり一人が自信を持って発表する様子を見ることができ、振り返りの文章からも達成感が伝わった。



左：リハーサルの前に生徒間で練習する様子 中央：リハーサル時の様子 右：発表時の様子

生徒の取組

〈担当教員振り返り 一例〉

・リハーサルのときよりもたくさんの方がいる前で、大きな声で聴衆に向けて素晴らしい発表ができました。スライドも当日の朝に修正を加えるなど、意欲も見られました。

〈生徒振り返り 一例〉

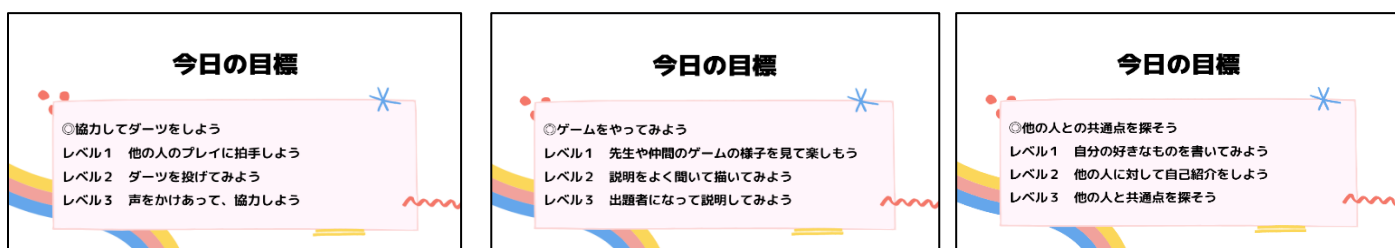
Q. 今日「できた」と思うことを書こう：先生たちのまえではびょうができた

Q. 今の気分と理由を書こう：とても良い、足が震えるくらい緊張したけど発表して先生たちにほめてもらえたから

(3) それぞれの生徒に合わせた個別最適な目標設定・支援

①目標のレベル設定（3レベル）

前述のとおり、キャリア・ポートに在籍する生徒には多様な生徒がおり、活動の参加は原則としつつも、生徒自身が自分に合った目標を選択できるように、毎時の活動に対する目標は3つのレベルで示した。また生徒が振り返りをする際にも、自分が今回到達したと思う目標を選べるようにした。



左:ダーツの際に示したスライド 中央:ブラインド・ドローイングの際のスライド 右:共通点ビンゴの際のスライド

1. 今日の目標はどこまで達成できましたか？（複数選んでOK）

レベル1 アクティビティを見てプレゼンテーションするのに大切なことを考えよう

レベル2 みんなでやるアクティビティに挑戦しよう

レベル3 ひとりでやるアクティビティに挑戦しよう

7. 気分の理由を書いてみよう

とても楽しくプレゼンテーションを考えることができたからです。でも、レベル3をクリアできなかったのが悔しかったです。

上：生徒が振り返りの中で今回自分が到達した目標を選択した一例。

下：上と同日同生徒の記述部分の一例。目標を意識して活動に取り組んでいる様子が伝わる。

②個々に合わせたサポート

各活動を行う中で、生徒の特性によっては活動への十分な参加が難しい生徒もいる。その際には以下の2点に留意しながら、生徒自身が参加しやすい方法を選択できるように工夫した。

- ・原則は活動に参加する。
- ・基本の方法では参加が難しい場合は、生徒自身に合った形の方法に変えて参加するようにする。

例えば、全体の前に立つことや、全体に聞こえるような声での発声が難しい生徒には教員が近くに行って本人の声を聞き代わりに全体に伝えた。また、外部の人と話すのが緊張するとの理由で職業インタビューに参加できなかった生徒には、同様の質問で本校の教員に職業インタビューを行うことで、職業インタビューの参加をしたことと認めた。



左:ブラインド・ドローイングにて。

全体の前での発声が難しい生徒(右)が話した説明を教員(左)が代わりに教室全体に伝えている様子。

右:職業インタビューにて。

外部の人と話すことには抵抗がある生徒が本校教員にインタビューしている様子。

(4) 個別生徒の年間を通した変化(具体的な事例)について

◆ケース A(以下、生徒 A と表記する)

① 本人の特性・キャリア・ポート受講前の状況

この生徒は令和6年度の報告書のキャリア・ポート内の「個別生徒の年間を通した変化(具体的な事例)」内で同じくケース A として紹介した生徒である。

〈令和6年度報告書内 本人の特性・キャリア・ポート受講前の状況〉

生徒 A は、自閉スペクトラム症の診断を受けており、非常にこだわりが強い。学校では担任教員に単語一言を伝えるのが精一杯な様子。(略)レポートの回答では自由回答の問題に困難を感じている。保護者からの自立のためにも校内資源である「トライ教室」への参加を何度も呼び掛けるが、首を振る一方であった。教科スクーリングの中では、協働学習には参加しなかった。

〈令和6年度報告書内 キャリア・ポート受講後の変化〉

令和7年度からのオンラインレポート化に困惑した様子だったが、キャリア・ポート内の ICT 機器を活用した活動を通して一年間で、最大 20 文字程度の入力ができるようになった。担任教員以外の教員とも簡単なコミュニケーションが可能になった。

生徒 A は令和7年度の卒業予定者であったため、キャリア・ポート木曜日 A クラスに参加した。

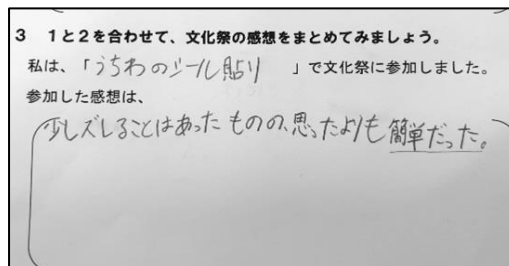
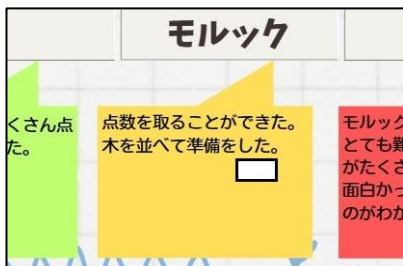
② キャリア・ポート受講後の変化

前期から、ダーツ等のゲームに前向きに参加する姿が見られた。ただし、考えをまとめる課題では、教員の支援があっても記入はほとんどできなかった。

後期(10月～)は、まず文化祭準備(オリジナルうちわ作成)に熱心に取り組み、丁寧かつスムーズに作業を進め、困った時には自ら担当教員に声をかける行動が見られた。文化祭後の振り返りでは、自分の気持ちを文章化し、周囲に聞こえる声で発表することができた。後期に導入したアイスブレイクのゲームでは笑顔が増えて、特に「文字取りゲーム」では積極的に言葉を伝えてチームに貢献した。コミュニケーション面での大きな成長が見られた。

また、学習も順調に進み、令和7年度卒業への意識が強まっていった。そこで、キャリア・ポートの一環として、障がい者福祉サービス事業所の見学に参加した。保護者とも話し合い、卒業後には自分で選択した自立訓練(生活訓練)事業所への通所を予定している。キャリア・ポートが確かな自立へつながった。

生徒 A は、キャリア・ポートに参加することで学校を居場所と感じ、活動などを通じて自分に合ったペースで成長を遂げ、卒業後の進路決定にもつながった好例と言える。



左：令和6年度に本人が作成したスライド 中央：令和7年度に本人が記入したプリント
右：文字取りゲームの様子

〈担当教員による生徒 A 振り返り 一部〉

前期

- ・5/8【初日】 自由記述で抵抗が起き、その後記述から選択肢に変更しても活動に乗れなかった。初発から取り組めるものが提示されていないとその後の活動すべてが低迷することがわかった。
- ・6/19 今までより活動に対する反応が良くなってきた。先生方のちょっとした声掛けから時間内に自分の中で考えて答えを出すことができるようになってきた。帰る際には、「バイバイ」の挨拶に手を振って応えてくれた！！

後期

- ・10/30 文化祭の振り返りでは、教員のサポートを受けながらまとめることができていた。言葉を参考にしながらも自分の表現にアレンジしながらしっかりとまとめることができていた。また、発表時は誰よりも大きく、はっきりした声で発表することができていた。
- ・11/13 堂々とした態度。これまでの活動が自信につながっているように見えます。表情が柔らかくなったことが一段と目立つ回だった。

次のケースとしてあげる生徒 B と生徒 C は二人とも、キャリア・ポート（木4）B クラスを令和7年度から受講した生徒である。「コミュニケーションがとれる相手を増やし、キャリア・ポートを居場所と感じられて、安心と思える場所で自己理解・自己受容を進める」ことをコンセプトに行った一年間の活動でどのような成長が見られたかについて、具体例として記載する。

◆ケース B（以下、生徒 B と表記する）

①本人の特性・キャリア・ポート受講前の状況

生徒 B は、新入学した5月の間は通常教室でのスクーリングに参加することができていた。しかし、6月に入りスクーリングに参加しなくなっていった。家庭に事情を聞いたところ、中学生の時からパニック障害、対人恐怖症を持っているとのことであった。本人と担任との面談の後、まずはスクーリング参加ではなく、トライ教室に通いながらレポート完成を目指す形を指導した。トライ教室の参加は当初は週に1回程度だったが、やがて週に複数回の参加ができるようになった（スクーリングに再び出席することも試みたが、うまくいかなかった）。ASDの診断を受けているが個別の対応、既知の教員や YSK サポーターのボランティアの方とは順調に接している。ただ、生徒 B には ADHD の傾向もあり、書字や、所有物の管理が散漫である。

②キャリア・ポート受講後の変化

初回のはじめの生徒 B の振り返りアンケートでは、「今日の気分は？」という問いに対して「少し良い」、気分の理由に「緊張する」と入力していた。回を重ねるごとに、安心感を覚えることができたのか活動の中で笑顔が見られるようになった。後期には「他の生徒とコミュニケーションをとりたい」「外部の人と話すのは苦手」など、自分のやりたいことや苦手なことを言葉にできるようになった。全体の前に出たの発表をする場面でも「B さんもできる？」という担当教員の呼びかけに応じ、しっかりとできていた。

〈担当教員による生徒 B 振り返り 一部〉

前期

- ・5/8【初回】 人数に対して苦しくないかを先生に聞かれて、「これくらいなら大丈夫です」と答えられた。
- ・6/5【ダーツ】 余った時間に教員3名が鏡に向かってボディビルのポージングをしていると生徒 B が興味をもって寄ってきました。結構意外でしたが、割と活発な性格なのかもしれないですね。

後期

- ・10/30【職業インタビュー準備】 最後に生徒 B に「今日「できた」と思うことを書こう」の他の生徒に向けての発表をお願いしたところ快諾し、全体に聞こえる声でしっかりと発表ができた。
- ・11/6【職業インタビュー準備】 教員とのコミュニケーションは前期と比べてかなり自然にできるようになったように思える。芋ほりでは他の生徒との会話ができた様子。

◆ケース C (以下、生徒 C と表記する)

①本人の特性・キャリア・ポート受講前の状況

中学時代はほぼ不登校。本校入学時は自分から質問ができず、やることがわからなくなると、手が震えたり勝手に教科書を閉じたりしていた。教室の前まで行っても、これまでの学習の遅れや他の生徒の視線が気になり中に入れず、その後に廊下や中庭を何時間も徘徊していることもあった。生徒 C と担任教員は保護者同席のもと少しずつコミュニケーションを取ることができるようになっていたが、担任教員以外とのコミュニケーションは難しかった。

②キャリア・ポート受講後の変化

生徒 C は最初にキャリア・ポート教員と趣味であるゲームの話をしたからか初回から楽しそうに参加でき、担任教員とはコミュニケーションがとれるようになった。活動の中で積極的に参加できることと、納得がいかずうまく進められないことがある等、こだわりの強さが見られる場面があった。職業インタビューでは「最初の挨拶」担当であったが、当日急遽欠席した生徒の役割も自ら引き受けた。相手の目を見て相槌を打ちながらコミュニケーションをとることができ、他の生徒2名を率いる活躍を見せた。

〈担当教員による生徒 C の振り返り 一部〉

前期

- ・6/5【ダーツ】 「先週休みだったから、先生たちが前回の話の続きを楽しみにしていたよ」と言うと生徒 C は嬉しそうな様子。キャリア・ポートに慣れてきたと感じた。ダーツでは、なかなか的に当たらない時に他の生徒の待ち時間を気遣って譲る様子も見られた。普段校内で見かけるときとは別人のように表情が明るい。
- ・7/10【ボードゲーム『短所を長所に変えたいやき』】 生徒 C は言葉で発することはできることでも、文章で書くことは苦手なようだった。文章で書く場合は考える時間が長くなるので色々なことを考えてまとまらないのだと思われる。ゲームのルールにあまり納得がいかないでもあった。

後期

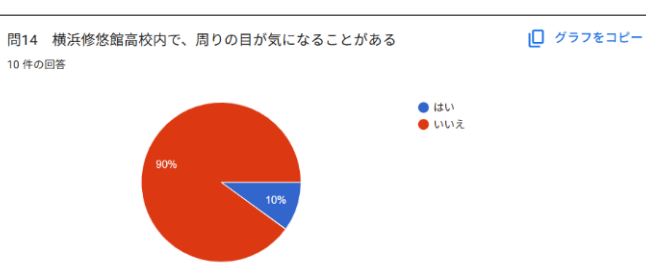
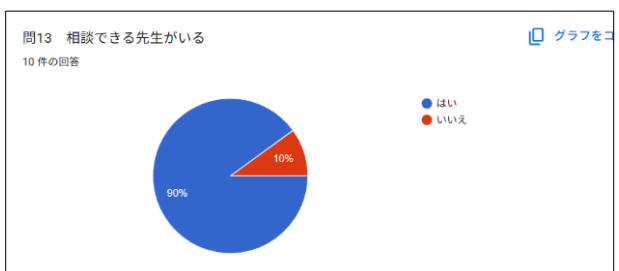
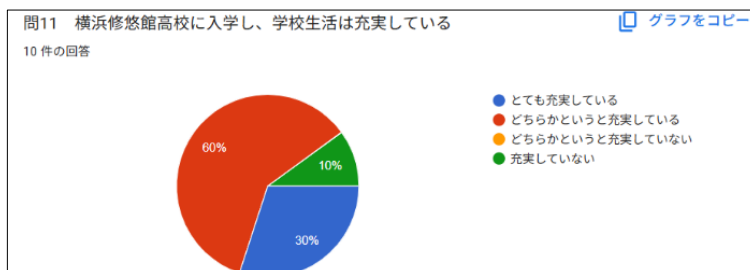
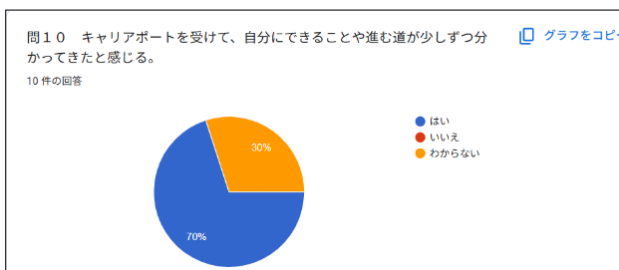
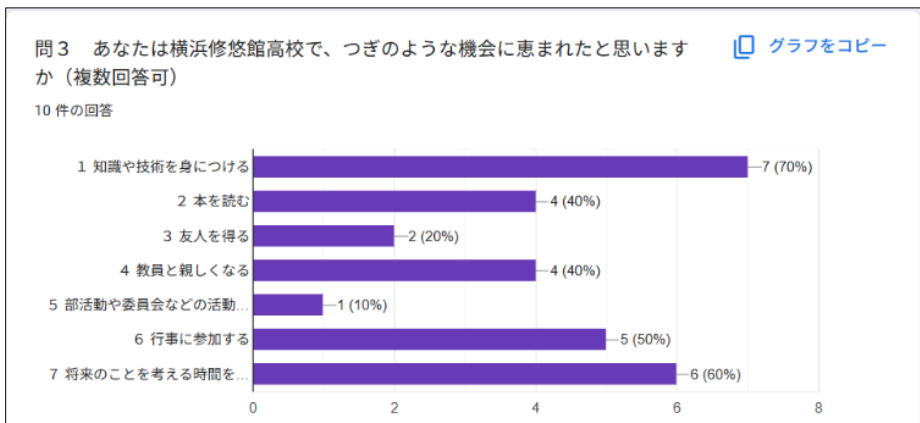
- ・11/13【職業インタビュー準備】 インタビューの役割分担決めで生徒 C は積極的にあいさつに名乗り出てくれた。また、質問練習をするときに生徒 C は相手の目を見て話し、お礼を言うこともできていた！
- ・11/20【職業インタビュー本番】 生徒 C は大活躍でした。欠席生徒の分の役割も率先して引き受けてくれました。移動時には本校の旗をもってみんな(生徒3名、教員5名)を先導しました。インタビュー中も生徒 Cからは自分がリーダーだという自覚が感じられました。質問もとてもハキハキと話せて良かったです。特に印象的だったのは初対面の相手の顔を見ながらの会話ができていたところです。全体を通して素晴らしい活躍が見られました！

(5) 来年度への展望

キャリア・ポートは毎年生徒が入れ替わり、生徒の特性や抱える困難も異なるため、活動内容に関する展望を事前につくりあげることが難しい。一方で、その状況下でも横浜修悠館高校のキャリア・ポートは毎年の参加生徒に合わせた様々な活動内容を考案、検討、実施してきた。令和7年度以前の活動内容とともに、個別支援の方策等についてアーカイブ化していきたい。報告書を通しては通級等を実施している他の学校との実践共有も行いたいと考えている。

(6) 修正版の生活アンケートの実施および結果

キャリア・ポート木曜日Aクラス・Bクラスを受講している生徒10名を対象に、生活アンケートの一部回答をお願いした。キャリア・ポートの受講生に応じて（学習面の質問を一部削除し、自己理解度を聞く項目を加えた）変更を加えたものであり、キャリア・ポートの通年の振り返りを兼ねた。



令和7年度の活動の柱として「コミュニケーションがとれる相手を増やし、キャリア・ポートを居場所と感じ、安心と思える場所で自己理解・自己受容を進める」と設定した。問3の複数選択可のなかで「教員と親しくなる」を4名が選択していること、問13「相談できる先生がいる」に9名が「はい」と回答したことから、教員とコミュニケーションをとることで「安心できる居場所」と感じさせるねらいに関しては達成しているように思える。

問11「横浜修悠館高校に入学し、学校生活は充実している」では9割が「充実している」と回答。問14「横浜修悠館高校内で周りの目が気になることがある」にも9割が「いいえ」と回答。キャリア・ポート受講者は、本人・保護者ないし担任教員などの関わりのある教員が、学校生活に困難を感じて受講を希望、推薦した生徒が多くを占める。そのような生徒の9割の前向きな回答は、キャリア・ポートが「安心できる居場所」の一定の目標達成といえる。

加えて、問3の「将来のことを考える時間を持てる」と6割の生徒が回答したことはキャリア・ポートで重視している「将来の自立と社会参加を目標に「働くこと」をテーマにした活動を行うこと」と一致する。今後も1つの指標としたい。キャリア・ポートは生徒の社会的自立を支援する取組として、令和8年度も充実しようと考えている。

(7) キャリア・ポート受講生徒の令和7年度の生活アンケート結果について

- ・令和7年度にまだ学校に在籍する予定の11名のうち、3名が回答。(実際の利用生徒であることは確認済)
- ・3名中、3名が「問2 横浜修悠館高校に入学して良かったと思いますか」という質問に対して「良かった」「とても良かった」1名、「良かった」2名)と回答。受講生徒の入学満足度は100%であった。
- ・3名中、1名が「問10 横浜修悠館高校に入学し、学校生活は充実している」という質問に対して、「充実している」と回答。2名が「やや充実していない」と回答。

【不充実の理由に関する2名の記述】

- ・週一だから(※原文ママ。おそらく、「(学校に通う頻度がおおよそ)週一だから。)
- ・勉強が上手くいっていない。

【学習に対する2名の記述】

- ・英語や数学など苦手なのが少し溜まっている
- ・分からないことは聞いた方がいいのは山々だけど聞きづらくて分からないとこだらけ。

【卒業への不安に対する2名の記述】

- ・レポートだけじゃ身につけてないと思うから
- ・勉強が進んでいないため、卒業がいつできるのか分からない。

[まとめ]

- ・生活アンケートは10月に回答したものであり、かつ、令和7年度はキャリア・ポート履修生徒の回答率が低かった。そこでキャリア・ポート生徒に向けて、一部修正した生活アンケートを12月に追実施し、概ね良い結果を得られた。(前述)
- ・一方で、学習や高校卒業後に対する生徒の不安は、技能面などを含めて、切なるものがある。10月の時点の生徒の不安の解消に向けて、担当は後期の残り期間も向き合っている。キャリア・ポートは今後も校内で【就労支援や特別な支援を必要とするかもしれない】生徒に第一に勧める教室となっている。
- ・令和7年度の結果を受けて、2班は次の目標を掲げている。
 - ①令和8年度も、履修生徒の生活アンケートから生徒の具体的な困り感等を把握していくこと。
 - ②令和8年度も、履修生徒の12月時点のアンケート内容の好転に向けて努めていくこと。

キャリア活動

(1) 概要

本校では、多様な背景を持つ生徒一人ひとりに対する働きかけとして、学習のみならず、卒業後の進路決定、進学や就職の不安を共に乗り越えていく支援をするべく、校内体制を構築し、充実することを常に課題としている。

(2) 令和7年度の取組（特記事項）

○進路探究映像講座を用いた集合ワークの機会について

・実施経緯

令和6年度は経済産業省との連携で無料となった城南推薦塾（総合型・学校推薦型選抜対策塾である。以下、城南）と、4月に担当者間で打合せを行い、生徒への説明会を5月に実施した。このため、生徒への企画の周知が遅れ、潜在的に必要なある生徒でも、説明会で急に提示された日程感に応じられなかった生徒が多くいた。

令和7年度はこの反省を生かし、継続性を重視した。

生徒への説明会は4月のスクーリング開始前に実施した（以降の日程は下記掲載の表参照）。

※ 動画視聴IDを付与した生徒数はのべ33名（令和6年度26名）。

・経過

城南の担当者が来校するのは月曜日の5・6校時（14:10～16:00）とし、「自分で動画をみて取り組むよりも、学校の教室で進めたい生徒」を対象として集合ワークと題して計7回設定した。令和6年度と異なり、前期のスケジュール感が分かっていたため説明会を前倒しでき、集合機会は3回増やした。参加生徒は平均11名（令和6年度は平均9名）程度で、全7回出席の生徒は3名（令和6年度と同数）であった。（※6月2日は進路行事後に4月に行ったオリエンテーション的な説明を行う回とし、31名が参加した）。

7月14日を期限とした「(志望校への提出を想定した)志望理由書」の下書きを提出できた（集合ワークのゴールと位置付けている）のは13名である（令和6年度は10名）。下書きの添削は7月中旬に生徒へ返却した。

・まとめ

令和6年度よりも集合回数を増やしたところ、ID付与生徒数や志望理由書提出者数は微増した。また、令和7年12月時点において卒業後の進路を5・6月から模索していた23名のうち、16名が指定校制度や総合型選抜入試等で進路決定した。以下の表に、集合ワークに4回以上参加した生徒10名の参加日と進学先（方式）をまとめた。よく出席した生徒が着実に進学先を決める等の結果をあげ、指導に一定の成果があったといえる。

一方で、令和6年度より1か月早い「4月」に最初の説明会をうった成果は、実感できなかった。4月説明会に出席した生徒9名のうち、最後まで定期的に参加したのは2名である。スクーリング開始後（5月以降）の参加生徒が主なメンバーに入った。8月以降は担任を中心に各生徒の進学活動のサポートにあたった。関係生徒の進学結果は量・質とも令和6年度より少し上がったといえる。同様の指導は今後も継続する予定である。



城南推薦塾の方（写真中央）を招いての
放課後集合ワークの様子

4/21 説明会 参加9名	いつから の加わりか	① 5/12 17名	② 5/26 11名	③ 6/2 31名	④ 6/16 11名	⑤ 6/30 14名	⑥ 7/7 8名	⑦ 7/14 11名	志望理由書 提出 13名	受験先
○		○	○	○	○	○	○	○	◎	相模女子大学 学芸学部 メディア情報学科（指定校）
○		○	○	○	○	○	○	○	◎	相模女子大学 学芸学部 日本語日文学科（指定校）
	5月5日	○	○	○	○	○	○	○	◎	帝京大学 理工学部 情報科学科（通信教育課程）
	5月12日	○	○	○	○	○	○	○	◎	小田原短期大学 食物栄養学科（総合型）
	5月12日	○	○	○	○	○	○	○	◎	立正大学 心理学部 臨床心理学科（公募制）
	5月12日	○	○	○	○	○	○	○	◎	國學院大学 人間開発学部（公募制型自己推薦）
	5月12日	○	○	○	○	○	○	○	◎	関東学院大学または帝京平成大学 栄養系（一般）未決
	5月22日		○	○	○	○	○	○	◎	日本大学文理学部または慶応文学部（どちらも通信教育課程）未決
	5月22日		○	○	○	○	○	○	◎	桜美林大学 芸術文化学群 演劇・ダンス専修（AO）
	6月16日			○	○	○	○	○	◎	文教大学 健康栄養学部 管理栄養学科（AO）

表：出席4回以上の生徒10名の「出席日と進学先」（関係生徒の抜粋）※うち、2名が未決定（12月中）。

○「キャリア活動C」（特別講座「キャリアIC」と「キャリアIIC」）について

・キャリアIC

湘南・横浜若者サポートステーションの関連施設である、K2インターナショナルジャパンとの連携講座である。毎時、外部講師としてその職員や関係者を迎えて、本校職員はサポートする形で運営している。講義のみならず、校内外の作業実習、職場見学・職場実習・インターンシップなどを通じて、将来の社会的自立に向けて必要な基礎力を身に付けていくことを目的としている。



令和7年度のキャリアICの様子

令和7年度の年度当初の履修登録者16名のうち、年度末に単位修得するまで活動したのは12名であった。年度当初は人前での発表やグループワークに戸惑っていたような生徒も、段々と自信をもつ様子がみられた。

夏に例年通り、インターンシップを実施し7名が参加した。生徒の振返りの文章からは達成感が感じられた。本校の文化祭（10月）では、6名がK2インターナショナルジャパンの出店・販売を手伝った。

・キャリアIIC

卒業年次の就職希望生徒を対象にひらく就職対策講座である（例年の開講）。キャリア教育推進グループが担当。令和7年度の履修登録者は11名で、8名が単位を修得した。単位修得者8名のうち7名が内定を獲得した。1名は内定を獲得したが、卒業の見込みが立たず内定を辞退した。就職や社会的自立を目指す教養講座である。



令和7年度のキャリアIICの様子

前期は就職試験に関わることを主として行った。担当教員による講義だけでなく、外部講師によるスーツの着こなし講座やコミュニケーション講座、模擬面接講座を行った。他にもハローワーク訪問や施設見学など行った。

後期からは、基本的に外部講師に講演を依頼。生徒は本校の教室で、社会人として必要なマナーリテラシーや、労働法、心身の健康維持に関する講義を受けた。最終スクーリングでは、就職先の決まった履修生徒とその担任を交えた座談会を行った。

○就職前職業体験（卒業予定者対象）実施について

就職希望であるがアルバイト経験がない、または事情を抱えている生徒を中心に、就職後の自分を具体的にイメージするために令和6年度に引き続き実施した（2年目）。令和7年度は16名が希望し、職業体験に至った。

協力企業（例）：株式会社ロピア【小売】、谷口運送株式会社、日本トラック株式会社、ロジット株式会社【物流】
さくら児童デイサービス【放課後等デイサービス】、株式会社はれコーポレーション【介護】

3 2班のおすび

オンラインレポート導入年である令和7年度について、生徒が困り感を表明する機会が令和6年度よりも増えて、トライ教室をはじめ、教職員の負担が増えることも考えられた。しかし、生徒の適応能力が教職員の想定を上回ってスムーズに進み、オンラインレポート導入による大きな混乱はみられないという成果を得られた（後述の「学校生活アンケート」の結果報告にも掲載）。

「学びのコミュニティ」のそれぞれのプログラムにおいては、各担当者を含む教職員や関係者の協力により、さらに充実を見せた。新入学の生徒数が増加傾向にある中で、基本的に各コミュニティに関係する生徒数も増加しながらも、生徒の学校満足度・学校生活充実度も高い傾向を維持することができている。

3年目の令和8年度も、多様な生徒に可能な限りの必要な支援と各コミュニティの改善と普及に努めていく。

「学校生活アンケート」について

横浜修悠館高校では、次年度も活動する予定の在校生を対象に、令和6年度10月6日～13日の間と、令和7年度10月5日～12日の間の2年間で2回、「学校生活アンケート」と称したアンケート調査を実施しました（以下、生活アンケートと表記）。

今般、その結果を取りまとめましたので公表します。

1. 趣旨目的

本校の「生活アンケート」は、文部科学省「多様性に応じた新時代の学び充実支援事業」の目標達成に至る取組の一環として、毎年共通の質問項目により、生徒目線から本校の教育や学びの実態を把握し、本校の教育内容の改善や新たな方策の立案など、校内の報告のみならず様々な用途に活用することを目的とする。

本調査は令和6年度（2024年度）の第1回に引き続き、令和7年度（2025年度）を第2回として実施した。

2. 調査内容

（1）調査対象

在校生のうち、活動生（※5～12月にかけてスクーリング出席、レポート作成・提出に取り組む生徒のこと）のうち、同年度3月卒業予定者および同年度の10月1日付転編入学生をのぞく、約1200～1300名の生徒。対象者は次年度も本校に在籍している生徒とした。10月付転編入学生は学校生活を開始直後のため、除いた。

（2）調査方法

生徒が以下の調査方法①～③から選択（※令和6年度は②と③、令和7年度は①と②の方法から選択）

①所属クラスのGoogle Classroomから「課題」形式で発信された生活アンケートに直接入力、回答。

②10月履修ガイダンスを行うホームルーム教室で、黒板等に掲示の2次元コードの読み取りから生活アンケートに直接入力、回答。

③10月履修ガイダンスを行うホームルーム教室で、生活アンケート用紙に記入し提出（入力は教員が代行）。

（3）質問項目

本校への入学満足度、本校での学習面の成長の実感や協働的な取組ができてきているかの実感、1日あたりの平均的な学習時間やスクーリングが自分の学習ペースに合っているか等、全25問。

（その他、自由記述（任意） 1問）

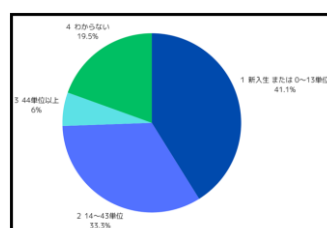
3. 回答状況 ※2年間のうち、生徒は着実に入れ替わっているが、回答者生徒の単位数による内訳はほぼ変化なし。

令和6年度 810件（※そのうち、令和6年度の新入学者は290名（35.8%））

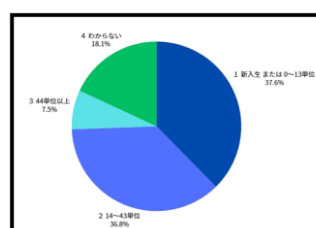
令和7年度 630件（※そのうち、令和7年度の新入学者は243名（38.5%））

問1 現在の修得単位数はいくつですか（今年度の科目は含みません。今年度の新入生は「1」を教えてください。）

	【令和6年度】	【令和7年度】
1 新入生 または 0～13 単位	41.1% (333人)	37.6% (237人)
2 14～43 単位	33.3% (270人)	36.8% (232人)
3 44 単位以上	6% (49人)	7.5% (47人)
4 わからない	19.5% (158人)	18.1% (114人)



令和6年度



令和7年度

4. 質問項目ごとの回答内容

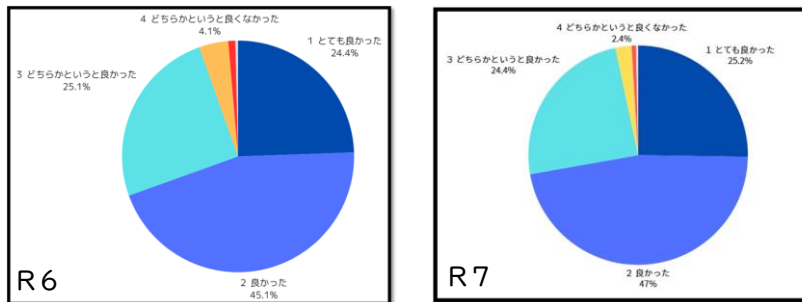
※ 円グラフを並べているところは、左（令和6年度）・右（令和7年度）とする。

※ 割合の計算上、数字の合計が100%になっていないところがある。

以下、質問は生活アンケートからの抜粋である。入学者と卒業生で4割程度回答生徒が入れ替わっているなかでも、2年間で見えた一定の傾向や、有意な変化のあった部分を中心にまとめている。

問2 横浜修悠館高校に入学して良かったと思いますか。（6件法）

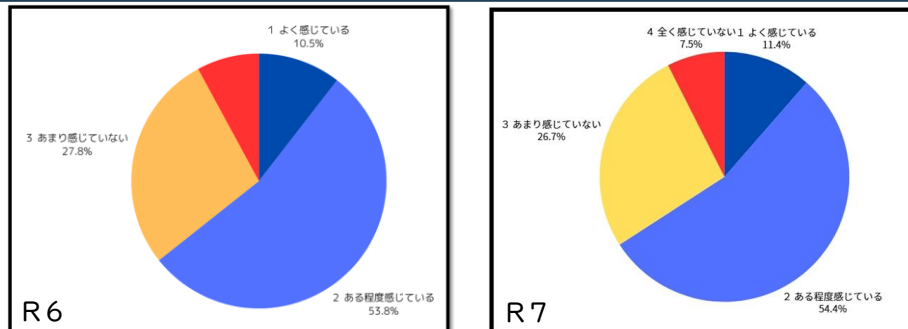
1～3までの比較的「良かった」の合計が、令和7年度「96.7%（766名）」であり、令和6年度の「94.6%（609名）」との有意差はなかったが、微増した。なお、令和7年度は、日曜生のほうが平日生よりわずかに「良かった」が多い。



両側検定で $Z=-1.75$ の p 値は 約 0.08 「わずかな差」

問3 横浜修悠館高校でこの半年、あなたは学習面の成長を感じていますか。（4件法）

1～2までの「感じている」の合計が、令和7年度「65.8%（415名）」であり、令和6年度の「64.3%（521名）」との有意差はなかったが、微増した。なお、令和7年度の「感じている」の割合は、平日生のほうが日曜生より 4.7%多い。



2年間比較の p 値 ≈ 0.57 、有意差はなく、統計量的な差はない。

令和7年度の平日生と日曜生の内訳はつぎの表のとおりである。有意差は認められない程度であった。

（左側：平日生、右側：日曜生 を選択した生徒の問3に対する回答別人数および、合計を100%としたときの割合）

1 よく感じている	46	11.0%
2 ある程度感じている	236	56.5%
3 あまり感じていない	110	26.3%
4 全く感じていない	26	6.2%
	418	

R7 平日生

1 よく感じている	26	12.3%
2 ある程度感じている	107	50.5%
3 あまり感じていない	58	27.4%
4 全く感じていない	21	9.9%
	212	

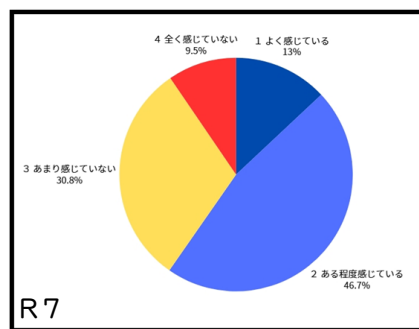
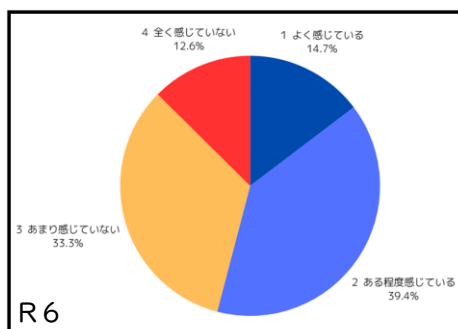
R7 日曜生

※カイニ乗統計量：3.7399 $p=0.2910$ 、有意差は認められない

問5 あなたは横浜修悠館高校で他の人と同じことに協力して取り組むことができていると感じていますか。

(4件法)

1～2までの「感じている」の合計が、令和7年度「59.7%」であり、令和6年度の「54.1%」と有意な差がみられた。なお、令和7年度、「感じている」の割合は平日生のほうが日曜生より34%多く、顕著な差がみられた。



p 値 ≈ 0.038

令和7年度の平日生と日曜生の内訳はつぎの表のとおりである。回答者の割合に顕著な差がみられた。

Category	Count	Percentage
1 よく感じている	135	32.3%
2 ある程度感じている	224	53.6%
3 あまり感じている	48	11.5%
4 全く感じている	11	2.6%
	418	

R7 平日生

Category	Count	Percentage
1 よく感じている	24	11.3%
2 ある程度感じている	86	40.6%
3 あまり感じている	76	35.8%
4 全く感じている	26	12.3%
	212	

R7 日曜生

問8 スクーリング期間中、あなたはスクーリングに出席する時間以外で「1日あたりどれくらい」勉強していますか。

(6件法)

令和6年度（左側）と令和7年度（右側）に有意差はなく、ほとんど変わっていない結果となった。

Category	Count	Percentage
1 5時間以上	10	1.2%
2 4～5時間	17	2.1%
3 3～4時間	39	4.8%
4 2～3時間	113	14%
5 1～2時間	279	34%
6 1時間未満	352	43.5%
	810	

R6

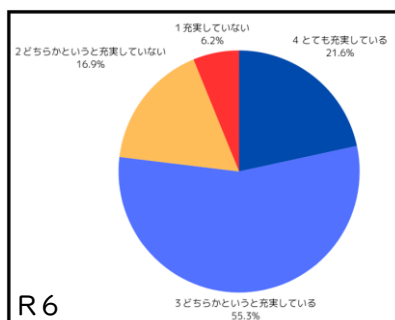
Category	Count	Percentage
1 5時間以上	6	1%
2 4～5時間	15	2.4%
3 3～4時間	35	5.6%
4 2～3時間	97	15.4%
5 1～2時間	200	31.7%
6 1時間未満	277	44%
	630	

R7

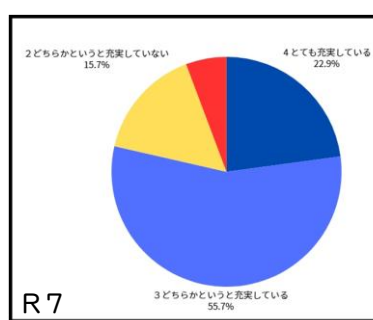
カイニ乗統計量：2.0645 p=0.8401、有意差は認められない

問10 横浜修悠館高校に入学し、学校生活は充実している。(4件法)

3～4までの「充実している」の合計が、令和7年度「78.6% (496名)」であり、令和6年度の「76.9% (623名)」との有意差はなかったが、微増した。なお、令和7年度「充実している」の平日日曜の内訳は平日生 82.1%に対して、日曜生が71.4%で平日生が10.4%多い (p 値 ≈ 0.005 有意差あり)。



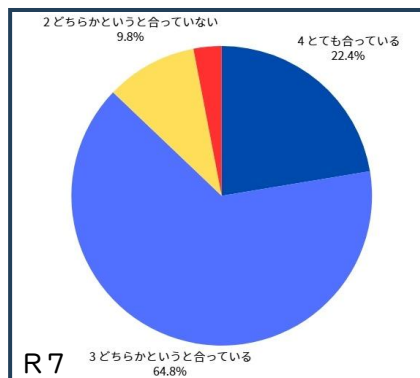
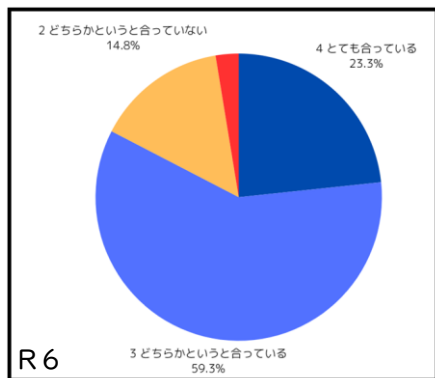
R6



R7

問 16 スクーリング（授業内容）が自分の学習ペースに合っている。（4件法）

3～4までの「合っている」の合計が、令和7年度「87.2%」であり、令和6年度「82.6%」より4.6%上昇し、統計上の有意差がみられた。



p 値 ≈ 0.021

平日生と日曜生の令和7年度の内訳は、次の表のとおりである。回答の割合に有意差はなかった。

4 とても合っている	105	25.1%
3 どちらかという合っている	266	63.6%
2 どちらかという合っていない	35	8.4%
1 合っていない	12	2.9%
	418	

R7 平日生

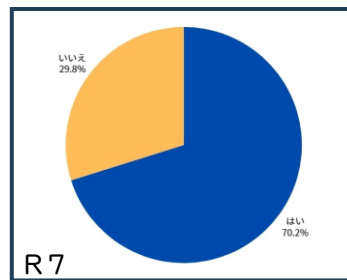
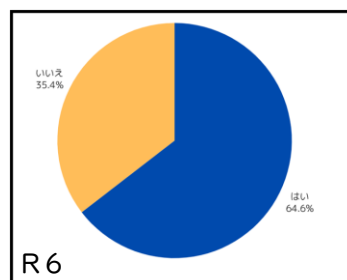
4 とても合っている	36	17.0%
3 どちらかという合っている	142	67.0%
2 どちらかという合っていない	27	12.7%
1 合っていない	7	3.3%
	212	

R7 日曜生

問 20 スクーリングでわからなかったところについて、担当の先生に、そのあとの質問や相談ができる。

(2件法)

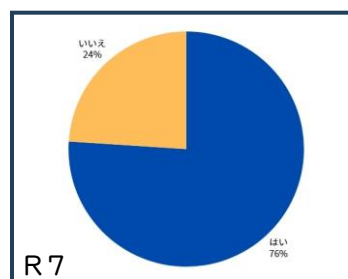
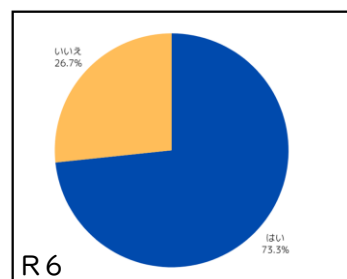
「はい」の割合が、令和7年度「70.2%」に対して、令和6年度「64.6%」より5.6%上昇し、有意な差がみられた。



p 値 ≈ 0.038

問 21 スクーリングに緊張しないで出席できる。（2件法）

「はい」の割合が、令和6年度「76%」に対して、令和6年度「73.3%」より2.7%上昇した（有意な差とはいえない）。



5. 結果を踏まえた課題等

(1) 調査対象・時期・回答率について

調査対象に卒業予定者を含まないことについて、令和8年度は継続し、その後は要検討としたい。時期については、10月履修ガイダンスの時期(10月上旬)としたことで、生活アンケート結果を受けてから2か月間は生徒へレポート提出やスクーリング出席等のアドバイスが可能であるため、良い時期であると捉えている。

しかしながら、更なる回答率の向上に向けての方策は検討する必要がある。自宅での回答を促す、自宅での回答のしやすい方法を増やすことが考えられるが、一方で生活アンケートの主旨が伝わらず、生徒の回答が「やつつけ」のようになっていくことは避けたい。いつ、どこでも回答可にすることは難しいが、多くの生徒が現状を素直に答える生活アンケートにしたい。

(2) 回答方法について

オンラインレポートが令和7年度から本校で全面導入されたことを受けて、新規で科目履修する生徒のほとんどはノートパソコンもしくはタブレット端末を購入し、「1人1台端末」の状況となった。

この状況を受けて、第1回(令和6年度)は、個人のスマートフォン等による端末での回答だけでは、生徒個々の状況に対応できないことを想定し、用紙への直接記入を可としていたものを、第2回(令和6年度)は完全な端末上での直接入力とした。用紙記入でないと困るという生徒はほとんどいなかったが、「入力したつもり」、「あとで入力するつもりだったが忘れた」、「入力したフリをしてその場を過ぎた」生徒が若干はいたようで、回答数に影響があった。回答数は第1回と第2回で180件の差がついたため、回答方法について方策を検討する必要がある。

(3) 質問項目について

質問数を25問とし、生徒の回答負担、回答率に及ぼす影響を最小限にするようにし、また、生徒にわかりやすい簡潔な文言を意識した。回答に必要な時間は5分程度であり、生徒の素直な回答を多く集めることができた点は評価できる。

(4) 各項目の回答状況について

令和6年度に比べて令和7年度の回答件数は減ってしまったが、生活アンケート内容自体は、ほとんどの質問項目において、前年度比で、微増もふくめれば「上がっている」結果となった。

(令和7年度の、令和6年度に対する割合の差)	(肯定的回答、「はい」の合計)
【問2 横浜修悠館高校に入学して良かったと思いますか。(6件法)】	1～3の合計: <u>2.1%上昇</u>
【問3 横浜修悠館高校でこの半年、あなたは学習面の成長を感じていますか。(4件法)】	1・2の合計: <u>1.5%上昇</u>
【問5 あなたは横浜修悠館高校で他の人と同じことに協力して取り組むことができていると感じていますか。(4件法)】	1・2の合計: <u>5.6%上昇</u>
【問10 横浜修悠館高校に入学し、学校生活は充実している。(4件法)】	3・4の合計: <u>1.7%上昇</u>
【問16 スクーリング(授業内容)が自分の学習ペースに合っている。(4件法)】	3・4の合計: <u>4.6%上昇</u>
【問20 スクーリングでわからなかったところについて、担当の先生に、そのあとの質問や相談ができる。(2件法)】	「はい」の合計: <u>5.6%上昇</u>
【問21 スクーリングに緊張しないで出席できる。(2件法)】	「はい」の合計: <u>2.7%上昇</u>

一方で、次の項目について、課題として受け止めている。

【問8 スクーリング期間中、あなたはスクーリングに出席する時間以外で「1日あたりどれくらい」勉強していますか。(6件法)】
生徒の自己申告ではあるが、令和7年度・令和6年度ともに、1日あたり1時間未満が約44%であった。

通信制高校の本校において、スクーリングへの生徒の出席時間は、全日制の生徒と比較して非常に限られたものである。問8の、質問項目としてのこの数値に向上の見込みがあるか定かではないが、指標の1つとは捉えられる。生徒に自学自習の姿勢が身についていくことは、生徒の社会的自立をサポートしていこうという学校としての方針に合致し、教職員全体の目標の1つでもある。

7の項目で後述するが、令和8年度の調査に向けて、必要な手立てを検討したい。

6. 学校生活アンケートから生徒への学習指導（助言等）を進める2年間の試みについて

令和6年度および令和7年度の2年間において、それぞれの生活アンケートをふまえて、学習面の項目に課題が見られるが、対人面の项目的には課題を抱えていない生徒が、①実際にどういう状況におり（どういう困り感を抱えて）、②どのようなアプローチが学校側（主に担任）から可能なのかを、具体的事例として把握する試みを2班として実施した。本報告書には、対象生徒のプロフィールと、経過及び結果を簡潔に掲載する。

(1) 令和6年度の10月の生活アンケートより、生徒を選抜。うち、5名を掲載。

(「学習面に困っているが、学校には一定程度通っており、担任とコミュニケーションがとれる生徒」を選んだ。)

【生徒の簡潔なプロフィール】（「学習」と「対人」の項目は14点満点。担任所見等は令和6年10月時点）

●生徒A（令和5年度新入学） 学習：6、対人：11

・令和6年度履修単位：29（修得済み22）講座形態：平日＋継続 10月時点のレポート合格状況：0%
生活アンケートでは、学校生活は「どちらかというと充実（理由：友人がいるから）」などと回答。

・担任所見等：友人のいる生徒だが、友人であったが仲違いした生徒も同じクラス。令和6年度は動きが見られない。

●生徒B（令和5年度新入学） 学習：6、対人：8

・令和6年度履修単位：30（修得済み0）講座形態：全て継続科目 10月時点のレポート合格状況：30%
生活アンケートではレポートが「思ったように出せていない（理由：スクーリングに行かないとわからないから）」などと回答。

・担任所見等：自宅が横須賀で、通うダンススタジオが東京。卒業の意志はあり三者面談も行き、後期は数回来ている。

●生徒C（令和5年度編入学） 学習：6、対人：8

・令和6年度履修単位：20（修得済み0）講座形態：日曜＋継続 10月時点のレポート合格状況：20%
生活アンケートで卒業に向けた不安「あり」と回答し、理由に「学習が全然分かりません」などと記入。

・担任所見等：日曜生で、最近は学校に来ており、文化祭にも来ていた。施設入所中で、平日5日は作業所に通う。

●生徒D（令和5年度新入学） 学習：6、対人：9

・令和6年度履修単位：28（修得済み0）講座形態：全て継続科目 10月時点のレポート合格状況：50%
生活アンケートでは、レポートが「全然出せていない（理由：1人で完成できないため）」と書き、卒業に向けた不安があり、その理由には「何をどうすればいいかわからなくなりました。レポートや出席など」と書いていた。

・担任所見等：（入学直後と比較して）ちょっと勉強するようになったという様子が見えている。

●生徒E（令和5年度新入学） 学習：6、対人：9

- ・令和6年度履修単位：29（修得済み30）講座形態：すべて平日 10月時点のレポート合格状況：30%
生活アンケートでは、学校生活を「どちらかというと充実（理由：友だちと一緒に過ごしているから）」
としつつ、レポートは「全然出せていない（理由：初めの方のレポートでつかえて止まっている）」な
どと回答。
- ・担任所見等：学習6は自己評価の低さからで、もう少し出来そうな生徒だと思っている。前年度の単位修
得の実績もある。

【経過】

- ①11月初め：2班員で当該生徒にどのようなアプローチが可能かを検討し、それを各担任とも共有した。
- ②11月前半以降：全生徒を対象に、「トライ教室ツアー」を実施（前期に行ったものを、後期も継続実施を
決定した）。
- ③11月前半：改めて学習の難しい生徒へのアプローチのフローチャートを作成し、各担任に配布・説明。
- ④11月半ば：各担任から、約1か月の途中経過をヒアリング。
- ⑤12月半ば：年内のレポート期限が迫り、当該生徒の進捗状況を2班で確認。順調に進んでいたのは生徒
Bのみ。

【結果】

生徒Bは30単位修得を果たしたが、あとの4名は0単位修得となった。担任教員が10月に「いまの状況
だと厳しい」と把握した生徒に、何らかのアプローチをしたり意欲を確認したりしても、11月など実際に意
欲そのままに学校活動できる生徒が多くないことがわかった。

(2) 令和7年度の10月の生活アンケートより、生徒を選抜。うち、5名を掲載。

（「学習面に困っているが、学校には一定程度通っており、担任とコミュニケーションがとれる生徒」を選んだ。）

【生徒の簡潔なプロフィール】（「学習」と「対人」の項目は14点満点。担任所見等は令和7年10月時点）

●生徒F（令和6年度新入学） 学習：6、対人：8

- ・令和7年度履修単位：30（修得済み7）講座形態：平日+継続 10月時点のレポート合格状況：3%
生活アンケートでは、レポートが「全然出せていない（理由の記述なし）」、卒業に向けた不安「あり」
などと回答。
- ・担任所見等：人と関わる姿をあまり見ない。できそうでできない生徒と認識しているが、あまり話をし
てきていない。

●生徒G（令和6年度新入学） 学習：5、対人：11

- ・令和7年度履修単位：26（修得済み0）講座形態：平日+継続 10月時点のレポート合格状況：12%
生活アンケートではレポートが「全然出せていない（理由：紙に書くのが苦手なのに継続科目を選んだか
ら）」などと回答。
- ・担任所見等：校内で友人という様子があり、文化祭にも有志として参加した。担任からも学習の助言はで
きている。

●生徒H（令和6年度編入学） 学習：5、対人：8

- ・令和7年度履修単位：26（修得済み27）講座形態：平日+継続 10月時点のレポート合格状況：17%
生活アンケートでは、学校生活は「どちらかというと不充実（理由の記述なし）」と回答。
- ・担任所見等：保護者・本人から頑張りたい旨の相談を既に受け、履修ガイダンス後には学習予定を生徒と
立てた。「ガンガン言ってほしい」と両者からの要望で小まめに電話等を行うようにした。

●生徒I（令和7年度新入学） 学習：6、対人：12

- ・令和7年度履修単位：26 講座形態：すべて平日 10月時点のレポート合格状況：23%
生活アンケートでは、レポートが「全然出せていない（理由：怠惰と1つの問を解くのに時間を掛けすぎている）」などと回答。
- ・担任所見等：控えめだが素直な人柄である。体調や精神面で好調が長く続かない。10月に担任から声をかけ、取り組む科目の優先順位を一緒に決め、生徒と入門科目も一緒に取り組めた。

●生徒J（令和7年度新入学） 学習：6、対人：11

- ・令和7年度履修単位：24 講座形態：すべて平日 10月時点のレポート合格状況：8%
生活アンケートでは、学校生活を「どちらかという和不充実（理由：勉強のやる気起きず、部活動も参加できずにいるから）」、レポートは「全然出せていない（理由：頭でわかっているけど行動に移せず長続きもしないから。）」などと回答。
- ・担任所見等：他者に丁寧に接する人柄が好印象。相談にも来てくれている。新しいことに挑戦する意欲もある。（11月追記：トライ教室に一度つなげたが「自分でできそう」というので見守ることにした）

【経過】

- ①生活アンケート集計後：2班員で回答内容から生徒を抽出し、各担任教員に研究の主旨を伝え理解と協力を得た。
- ②10月22日：上記の生徒についてのアプローチ記録等を各担任教員にとってもらうべく、2班員からシート記入を依頼。
- ③11月19日：2班員と各担任教員で、進捗状況共有会を座談会形式で実施。
- ④12月25日：年内のレポート期限を迎え、当該生徒の進捗状況を2班で確認。生徒Fが14単位、生徒Gは0単位、生徒Hは18単位、生徒Iは22単位、生徒Jは8単位の修得見込み。
- ⑤1月7日：各担任教員と2班員で座談会の形式による、後期を通じての当該生徒の様子聞き取りを実施。在校生徒をトライ教室に繋げようとした具体的事例としてまとめたい、と結んだ。

【結果】

令和7年度に選んだ上記の5名について、生徒Gを除き大なり小なりの単位修得を見守ることができた。生徒ごとに状況が異なるなかでも「汎用化できる支援方法の立案」のため、それぞれの生徒に対する担任教員側の課題と、今後のアプローチについて次のようにまとめることができた。令和6年度より各生徒への理解の解像度が上がり、教員個人の独自の生徒対応法をアーカイブ化していく上での前進と考えている。

- | | |
|------|--|
| ・生徒F | 【課題】 SHRに不定期出席で電話応答も保護者（父親）であること【今後】 保護者と連携継続 |
| ・生徒G | 【課題】 SHRに現れずコミュニケーションがとれないこと【今後】 まず1単位修得の目標提案 |
| ・生徒H | 【課題】 特になし【今後】 令和8年度卒業予定者となる。能力はあるがやる気等が不安定なところがあるので、声かけによる二人三脚を継続するつもりである。 |
| ・生徒I | 【課題】 特になし【今後】 担任からの声かけに応じて単位修得に至ってくれたので継続したい。 |
| ・生徒J | 【課題】 もっとトライ教室等を頼ると修得単位は増えたかもしれないこと【今後】 案内は継続 |

(3) 2年間の成果と課題

成果は、「①アンケートに素直な回答ができる」、「②電話などで連絡ができる」、「③約束した日などに登校できる」、「④学校の支援体制を利用できる」、「⑤自分の目標までやり遂げることができる」、「⑥学校や担任教員の支援なしでもできる」と段階で把握を行い、担任教員目線の生徒へのアプローチ方法等を具体的に検討したこと自体にある。生徒と（場合によって保護者も含めて）意思疎通・連携できた事例はうまくいっていた。

課題は、どの生徒も「学校に来られていない」、「話す機会が限られている」、「一緒に立てた計画がうまくいかない」など、つまりきがつがあることでもう進まなくなってしまうことである。その際に、事例のアーカイブがあると「この方法はどうか」と教員の手立てが豊かになると期待し、今後も類似の企画を検討する。

7. 学校生活アンケート全体から「分かったこと」と「今後の課題」

(1) 「学校生活が充実している」と答えた生徒の割合が微増した一方、「不充実」な一定の生徒が変わらずいること。

	問2 良かった(1～3)と答えた割合	問10 充実している(4～3)と答えた割合	問2「良かった」と問10「充実」の差分 (入学して良かったが、学校生活が充実していない生徒)
令和6年度(N=810)	94.6%	76.9%	-17.7%
令和7年度(N=630)	96.7%	78.6%	-18.1%

表1 問2「入学して良かったか」(6件法)と問10「学校生活の充実」(4件法)の比較

上記の表1から、2年間で、「入学して良かった」と思う生徒のうち、約18%の生徒(約5人に1人)は「学校生活が充実していない」と答えていることがわかる。この差は微増とはいえども、2年間で少し(0.4%)広がっている。

このうち特に、学校生活が「不充実」であると感じている生徒のうち、スモールサンプルではあるが「対人面に課題あり(対人面質問14点満点中の6点以下)生徒」に興味深い変化があった。対人面に不安を抱える生徒のうち、問10で「充実していない(1)」と回答した生徒が増加している点である。次の表2に黄色で示している。

	令和6年度		令和7年度		2年間の差
全体	1と2の合計	23.1%	1と2の合計	21.4%	-1.7%
令和6年度 N=810	[内訳: 2のみ	16.9%]	[内訳: 2のみ	15.7%]	-1.2%
令和7年度 N=630	[内訳: 1のみ	6.2%]	[内訳: 1のみ	5.7%]	-0.5%
対人面課題生徒	1と2の合計	86.6%	1と2の合計	85.1%	-1.5%
令和6年度 N=82	[内訳: 2のみ	43.9%]	[内訳: 2のみ	27.7%]	-16.2%
令和7年度 N=47	[内訳: 1のみ	42.7%]	[内訳: 1のみ	57.4%]	+14.7%

表2 全体と対人面課題生徒の問10で「どちらかという充実していない(2)」と「充実していない(1)」と答えた生徒の比較

上記の表2から、令和7年度の「全体」と「対人課題生徒」のうち「充実していない(1)」のみを選んだ生徒の割合には15.2%の開きが生まれた。「対人面に課題を抱える生徒」が「全体」と比較して、学校生活について充実していないと答えたことがうかがえる。全体的には「充実を感じている」生徒の割合が微増したなかで、全体の10%に満たない生徒である(学校に前期のスクーリング期間中に来られていない生徒が多く含まれる)とはいえ、対人面の課題の有無によって学校生活の質(クオリティ)の格差が開いたことがうかがえた。学校に通えていなければ不充実を選ぶのは理解できるが、差の拡大は気になるところである。

今後 「対人面に課題を抱える生徒」もスクーリングや行事に参加できるよう支援する必要がある。令和8年度は、1班の「協働チーム」の研究内容でもあるように段階的な協働学習がさらに進む予定である。また、学校生活(特に学校行事、イベント)に受け込めなかった、混ざれなかったという令和7年度の新入学生徒に「2年目(以降)でも参加できるよ!」、「このくらいの参加から(例:見学等のみ)でも良いよ!」などと新規参入の心理的・物理的なハードルを下げていくことを、本校内の教職員で意識する。すでにハードルを下げて、という校内行事であれば、その周知・宣伝(広報)強化を行う。また、生徒同士のつながりを作っていくような、生徒同士が話す機会のあるイベントの創出を検討する(一例:スクーリング外の時間に、スクーリングの登録曜日対抗の体育競技のチーム戦などの企画・実施)。一部教職員のみ負担増とならない学校行事の充実と新規参入ハードルの低下を進めたい。

同時に、スクーリング内容における協働学習的な活動の充実による効果を実感したという教職員の声もあがっている。例えば、協働学習をきっかけに友人をつくり学校行事等の校内イベントに参加するようになった生徒は何人もおり、いきなり学校行事に参加しだした、というよりも友人が先にできたことが大きいという指摘である。スクーリングでの協働学習の充実や SHR での交流機会の創出から、学校行事等の校内イベント参加に活動意欲のある生徒を繋げるというのも大事な視点である。

また、トライ教室につながっている生徒の「充実度」が高い傾向から、レポートが作成できていれば「充実度」もあがる傾向があると言えるため、前期のレポート作成の学校としての支援も引き続き大事なことである。

(2) オンラインレポート導入に対する「負の影響」が、学校生活アンケートからほとんど読み取れないこと。

生活アンケート全体を通じて、基本的に各数値は良い方に上がっており（もしくは現状維持しており）、令和6年度と令和7年度の最大の変化である「オンラインレポート」の導入による大きな影響を読み取ることはできなかった。また、問11の「レポート取組が進んでいるかいないか」とその理由の部分でも、レポート提出システムへの不満がほとんどみられなかった。

2年前のオンラインレポート導入決定時には、教職員からも不安の声が上がっていた。また、1年前の在校生への通達時には、学校の方針に絶望するような意見も生徒からあった。しかし、オンラインレポートシステムが想像以上に完成されたものであったこと、生徒（新入学者も含め）の順応が早かったことなどから、事前に想定された以上の混乱は起こらなかったことが生活アンケートからも読み取れたといえる。

(3) レポートの提出システムよりも、生徒のレポートが出せない理由は「内面的課題」が根本にあること。

問11のレポート取組み・提出を聞く質問では、その直後に「そう答えた理由をよければ教えてください。」という自由回答部分をつけている。令和6年度の自由回答で多かった用語は【しまう】、【やる気】、【分からない】、【後回し】であり、令和7年度の自由回答では【やる気】、【後回し】、【しまう】、【サボる】が目立つ。【やる気】と【後回し】を含む回答数が増えたことが分かった。（レポート、スクーリング、問題、前期などの言葉は除外した。）

このことから、本校生徒が「レポートが捗らない理由」として挙げていることはこの2年間で変わらず、外的な要因（環境やシステム）以上に自身の内面的課題（やる気や怠惰、体調不良、能力不足）をその根本的理由にしているといえる。「家庭」や「バイトのしすぎでレポートが進まない」などの理由を書く生徒もいるが少数である。

今後 本校生徒のこうした学習面の課題について、どのようにケアしていくか。本校ではスクールカウンセラーの在校日数もほかの県立高校より多く、保健室の養護教諭もよく対応し、担任教員以外の教職員を生徒の相談相手にする「メンター」制度もあるなど、生徒の内面的サポートに今も力を入れている。しかし、生徒の不安が主に学習面にあるとしたら、「メンター」制度は精神面のみならず、学習面の不安生徒にも拡大解釈していくか、または学習面「チューター」制度（仮称）を主に副担任の先生にお願いするような制度としてつくっていく等も考えられる。そもそも「メンター」制度も、担任教員と話のしづらい生徒が主に利用しており、利用していない生徒も多い。「チューター」制度が本校に適するかも要検討である。

まずは「チューター」制度以前に、現在の校内体制での、担任教員等から生徒への声かけの充実策や、学習計画を年度の中途に担任教員とクラスの生徒と一緒に立てる年間行事の創出のほうが、実現しやすいため、できること・マイナーチェンジレベルでの有効な手立てを教職員一同で考えたい。

(4) 特に「スクーリングのペースが良いと感じる」生徒と「協働的な取組ができると感じる」生徒が増加。

これは前述の、問16や問5の結果による。それぞれ、良い回答の数値が昨年度比で4.6%と5.6%向上し、有意な差がみられた。なぜ令和6年度より令和7年度の方が良い回答の比率が上向きになったのか。スクーリン

グ改善の影響がおそらく大きいと考えられ、学校行事の拡充も少なからず影響していると推察される。

なお、問5の結果は、令和7年度の平日生と日曜生で34%も開いていることが分かっており、講座形態の抱える本校の課題の一つといえる。日曜スクーリングで協働的な取組を増やすことは要検討事項である。

(5) 家での学習時間が少ないこと。

問8のスクーリング期間中の「1日あたりの学習時間」の質問で、「6 1時間未満」であると答えた生徒が、令和6年度で43.5% (352名/810名)、令和7年度で44% (277名/630名) いた。学校に通えていない生徒もいることを考えれば、妥当ともいえる一方で、全日制高校よりもスクーリング(授業)時間が相対的により貴重な機会であることを考えると、自宅など週末や余暇期間における在校生徒の学習時間が増えて、生徒が自学自習の姿勢を身につけていくことは学校として重要なことである。

(4)と合わせれば、本校生徒は「スクーリングに出れば、学習を楽しむ生徒」であり、他者との「協働的な取組にもより積極的に取り組める生徒」となってきたが、「家やスクーリング外では学習しない生徒」傾向が高い。学習をスクーリングの外とつなげていこうとする取組は、(1)の内容とも関係する。学校の方針としてスクーリング外の学びを拡げたい。

今後 この課題に対しては、例えば令和8年度から本校は「オンラインスクーリング配信」や「スクーリングの録画記録の配信」を行う可能性があることが好材料である。それらの取組を始めて、生徒がスクーリングを「家で視聴する」ことが習慣化されれば、家での学習時間の回答に大きく反映される可能性もある。また、スクーリングに際して各教職員が予習や復習を促す取組や、反転学習メソッドの実践、声かけを令和7年度も行っているが、令和8年度も継続していくことが重要なことである。

どうすれば通信制高校生の学習習慣(自学自習の姿勢)を促していくことができるか、1班の研究内容でもあり、生活アンケートからも伺える本校の大きな課題の一つである。

8. 学校生活アンケート及び全体のまとめ

最終ページ掲載の表Xと表Yの内容を交えて、基本的に「令和7年度」について言及する。

第一に、令和6年度と令和7年度の生活アンケートを比較して、全体的に令和7年度の方がより良い回答結果が得られた。その一方で、スクーリング以外の学習時間の項目など、今後より向上してほしい項目もある。

第二に表Xより、生活アンケートから定義した「学習面に課題を抱える生徒」(70名。※以下、生徒数や数値は「令和7年度」)は、実際にレポート合格に苦戦しており、また、「学習面に課題を抱えていない生徒」(560名)とのレポート合格の平均通数の差は、9月から11月にかけて一層(平均値で約3倍、中央値で約10倍)広がっていくことがわかった。生活アンケートに対する活動生の回答は、オンラインレポートシステム上で見られる実際のレポート合格通数とも概ね一致しており、生徒が素直に回答してくれていること、及びアンケートとしての信頼性の証左となった。

学習面に課題を抱えると回答した生徒70名(回答者数のうち11%の生徒)をどう支援していくことができるか。この学習面課題生徒の70名のアンケート回答およびトライ教室の前期の利用実績と照合し、そのうちの61名(87.1%)が10月半ば時点でトライ教室を利用したことがないことがわかった。利用した9名も1科目のレポート1通が進んだ程度で、教室の継続した利用にまだ至っていなかった。

どの学校も同様であるが、本校でもこれまで教職員の肌感覚で、「この生徒のレポートの取組は順調だろうか?大丈夫かな?」と声をかけ、それに応えてくれた生徒に対する支援は行ってきた。令和6年度から導入した生活アンケートはその感覚を補完できるものであり、「この生徒も思っていたより数値が心配だ。声をかけておこう」等と、心配な生徒の再発見につながり、より多くの生徒が単位修得につながることを期待できる。生徒の状況をより的確に判断し、学習意欲はあるが知識・技能等の学力的な能力に課題を抱える生徒をいかに支えていけるか。生徒の学習面を支える支援体制の充実が今後も必要だといえる。

なお、「対人面に課題を抱える生徒」(47名)は、「学習面に課題を抱える生徒」(70名)に比べればレポート合格通数の平均値が少しずつ高い。対人面に多少の課題を抱えていても学習面に課題を抱えているわけではないので「レポート合格が少し進んでいる」ことは、アンケート結果の信頼性を高めている。

第三に表Xより、「対人面と学習面の両方に課題を抱える生徒」(41名)は、課題を抱えていない生徒(665名)に比べて、11月時点のレポート合格通数の平均通数の差がさらに広がっていったことがわかった(平均値で約4倍、中央値で約40倍)。学習面の課題に加えての対人面の課題の影響、例えばスクリーングで分からなかった問題を添削担当教員に質問・相談することができない、などの積み重ねがさらに輪をかけて、学校生活および学習面の課題を乗り越えていくことを困難にしていることが数値からもわかった。

第四に表Yより、2年間にわたる生活アンケートの「対人面」・「学習面」関係質問の点数換算と集計の結果、「対人面」・「学習面」の総点数と、問10「学校生活は充実している」という「充実度」を聞く質問への回答の平均数値とには、はっきりとした相関関係がみられることがわかった。つまり、「対人面」・「学習面」の課題解決は、その生徒にとっての「学校生活の充実度」の向上、広く捉えればウェルビーイングの向上につながるものが、数値からわかる。

もちろん、本校の活動生のなかには、年間を通じてのレポート合格通数が「0」通の生徒も多くいる(表X内の全カテゴリーの最頻値が「0」通であることからわかる)。また、学習面・対人面の高低に関わらず「自己評価は低い、レポート取組はできている」「レポート取組はまったくできていないのに、自己評価が高い生徒」等の外れ値もかなりある。しかし基本的には、「学習面の課題」克服をしたいと思います、「対人面の課題」がさらに追打ちをかけてそれを妨げているような状況がうかがえる。「課題」といっても様々で、自宅からほとんど外出していないような活動生もいれば、平日のスクリーングのある期間を毎日のように登校しながら、まったくレポート合格が進んでいかない活動生もいる。令和6年度より、2班は主に「学習面に課題を抱えているが、教職員(主に担任教員)からのコミュニケーションに応じてくれる(コンタクトをとることができる)生徒」を研究対象としてきた。学校に一定日数通ってきてくれている生徒、連絡や呼びかけに応じてくれる生徒を支援したいという気持ちはどの教職員にもある。たとえ、生活アンケート上の約1割の「学習面課題あり生徒」であっても、学校を頼ってきてくれる限りは支援したい。

こうした状況打開のため、本校において長年継続して構築してきた「学びのコミュニティ」である、例えば「トライ教室」が生徒の学習面を強く支えている。生徒が外国につながるのある生徒であれば「架け橋教室」、同世代の生徒同士で教員とともに活動を通じてコミュニケーション力を高めようとする「キャリア・ポート(自校通級教室)」、校内でのちょっとした休息の場・空間として「悠ルーム」や「Hanataba Cafe」などを整備・拡充してきた。保健室を含め、生徒の個性に応じて対応できるように環境や体制を整え、生徒自身(もしくは保護者や担任教員)が繋がる先を選択できるようにしている。

令和7年度後半および令和8年度前半の学校全体・教職員個々の取組がさらに実を結ぶよう、令和8年度の生活アンケートでいえば令和7年度の状況よりもさらに上向きな様子が見られるように、教職員一同善処したいと考えている。2年間で準備してきた生活アンケートやその分析の、1つのまとめ・集大成の年にしたい。

表X：生活アンケート「学習面」・「対人面」課題あり/なし生徒数と「レポート平均合格通数」の相関関係

項目 (カテゴリー)	令和6年度 (N=810)内訳 単位:人	令和7年度 (N=630)内訳 単位:人 (平日生・日曜生の内訳)	令和7年度 N=630内の %換算 (平日生・日曜生の内訳)	令和7年度 カテゴリー別 9月30日時点 のレポート合格通数	令和7年度 カテゴリー別 11月25日時点 のレポート合格通数	令和7年度 レポート合格通数 9月30日と 11月25日の差
学習面 課題なし (7~14点)	700	560 (平日384・日曜176)	86.4% (平日61%・日曜28%)	最大値: 60 平均値: 21.98 中央値: 24 最頻値: 0 通	最大値: 85 平均値: 36.19 中央値: 40 最頻値: 0 通	△25 △14.23 △16 0
学習面 課題あり (0~6点)	110	70 (平日34・日曜36)	13.6% (平日5.3%・日曜5.7%)	最大値: 34 平均値: 7.12 中央値: 3 最頻値: 0 通	最大値: 54 平均値: 12.31 中央値: 4 最頻値: 0 通	△20 △5.19 △1 0
対人面 課題なし (7~14点)	734	583 (平日393・日曜190)	90.6% (平日61%・日曜28%)	最大値: 66 平均値: 21.16 中央値: 23 最頻値: 0 通	最大値: 80 平均値: 34.72 中央値: 38 最頻値: 0 通	△14 △13.56 △15 0
対人面 課題あり (0~6点)	76	47 (平日25・日曜22)	9.4% (平日4%・日曜3.5%)	最大値: 41 平均値: 10.39 中央値: 3 最頻値: 0 通	最大値: 85 平均値: 19.82 中央値: 8 最頻値: 0 通	△44 △9.43 △5 0
対人と学習ともに課題なし (両7~14点) ※ 令和6年度 N=706 令和7年度 N=567	665	540 (平日369・日曜171)	82.6% (平日58.6%・日曜27.1%)	最大値: 60 平均値: 22.11 中央値: 25 最頻値: 0 通	最大値: 80 平均値: 36.29 中央値: 40 最頻値: 0 通	△20 △14.18 △15 0
対人と学習ともに課題あり (両0~6点) ※ 令和6年度 N=706 令和7年度 N=567	41	27 (平日10・日曜17)	5.1% (平日1.6%・日曜2.7%)	最大値: 32 平均値: 4.46 中央値: 0 最頻値: 0 通	最大値: 54 平均値: 9.39 中央値: 1 最頻値: 0 通	△22 △4.93 △1 0

※ 令和6年度は生活アンケート上で、生徒が自身の「平日」および「日曜」の講座形態を答える質問が無かったため、その内訳を載せていない。なお、平日と日曜の両方の講座を履修する生徒も実際にいるため、「平日」生であるか「日曜」生であるかは、生徒自身の判断での答えを尊重している。

※ オンラインレポート導入により、令和7年度からレポート合格の平均通数が割り出しやすくなったため、生活アンケート結果とレポート合格通数との照合が容易になったという経緯がある。令和6年度の生活アンケート結果をふまえたレポート合格通数との照合は、令和6年度には行っていない。

表 Y：生活アンケート「対人面」・「学習面」各 14 点満点と、問 10「充実度」に対する回答の関係

対人面に関する 質問を14点満点とし たときの 点数	令和6年度 (N=810)内訳 単位:人	令和6年度 問10「充実度」を 尋ねる質問の 回答の対人点数ご との平均値 (1~4点換算)		令和7年度 (N=630)内訳 単位:人	令和7年度 問10「充実度」を 尋ねる質問の 回答の対人点数ご との平均値 (1~4点換算)				
		令和6年度 (N=810)内訳 単位:人	令和6年度 問10「充実度」を 尋ねる質問の 回答の対人点数ご との平均値 (1~4点換算)		令和7年度 (N=630)内訳 単位:人	令和7年度 問10「充実度」を 尋ねる質問の 回答の対人点数ご との平均値 (1~4点換算)			
14	67	4.00	69	4.00	14	39	3.66	18	3.66
13	81	3.63	51	3.78	13	73	3.51	50	3.46
12	170	3.18	149	3.13	12	109	3.22	93	3.30
11	119	3.02	105	2.98	11	107	3.21	112	3.18
10	107	2.88	83	2.77	10	118	2.99	101	3.13
9	80	2.65	62	2.66	9	109	2.72	77	2.71
8	64	2.43	37	2.41	8	73	2.69	65	2.68
7	46	2.24	27	2.07	7	72	2.55	44	2.55
6	31	1.90	23	2.04	6	55	2.44	35	2.40
5	31	1.63	10	1.20	5	26	2.20	22	2.05
4	7	1.29	5	1.20	4	21	1.90	5	1.60
3	4	1.50	6	1.00	3	4	1.75	7	1.71
2	3	1.00	3	1.00	2	4	1.25	1	1.00
1	0		0		1	0		0	
	810		630			810		630	

※ 問 10 の「学校生活は充実している」ことに対する質問は 4 件法であり、「4」の方が充実している。

文部科学省「多様性に応じた新時代の学び充実支援事業」

【検討委員】

氏名	所属・職名
澁川 幸加	中央大学 文学部特任助教 教育力研究開発機構 研究員
西原 秀夫	北里大学 海洋生命科学部教授
渡貫 由季子	神奈川県教育委員会 教育局指導部高校教育課長
西川 陽平	神奈川県教育委員会 教育局指導部高校教育課 指導主事
相原 健右	神奈川県教育委員会 教育局指導部高校教育課 指導主事

【校内研究担当者】

氏名	職名	担当	所属
米山 教子	校長		総括
堀内 昌之	副校長		総括
小林 匡希	教頭		総括
山口 眞喜子	事務長		会計事務総括
坂井 一郎	教諭	研究主任	保健体育科【教育相談・学習支援グループ】
橋本 真人	教諭	データ分析班 班長 / 2班	外国語（英語）科【教育相談・学習支援グループ】
室井 佑太	教諭	1班 班長	地歴公民科【学務グループ】
大澤 浩祐	教諭	2班 班長	地歴公民科【キャリア教育推進グループ】
源嶋 大央	教諭	1班「個別チーム」リーダー	理科【学務グループ】
堀内 宏基	教諭	1班「個別チーム」 / データ分析班	情報科【学校運営グループ】
竹田 昌平	教諭	1班「個別チーム」	数学科【生徒活動支援グループ】
渋谷 優里	教諭	1班「個別チーム」	芸術科（美術）【生徒活動支援グループ】
増尾 佐紀	教諭	1班「協働チーム」リーダー	外国語（英語）科【経営企画広報グループ】
結城 佳織	教諭	1班「協働チーム」	保健体育科【教育相談・学習支援グループ】
糸日谷 輝	教諭	1班「協働チーム」	国語科【キャリア教育推進グループ】
里崎 志穂	教諭	1班「協働チーム」	家庭科【教育相談・学習支援グループ】
高取 夏希	教諭	2班	地歴公民科【教育相談・学習支援グループ】
黒木 健太郎	教諭	2班 / データ分析班	理科【教育相談・学習支援グループ】

データ分析班：生徒の実態に応じた指導・支援に向けた調査

1班：通信制における個別最適な学び・協働的な学びの実現に向けたレポート・スクーリングの改善・工夫

2班：多様な背景を有する生徒への校内支援・指導体制の改善・普及

文部科学省「多様性に応じた新時代の学び充実支援事業」

通信制における個別最適な学び・協働的な学びの実現と発信

及び

多様な背景を有する生徒に対する校内支援・指導体制の改善

令和7年度報告書

令和8年3月発行

発行者 神奈川県立横浜修悠館高等学校

編集者 校内研究委員（文科6期）

印刷・製本 山口印刷所



しゅうたん（生徒デザイン）